

FutureNet AS-150/X-II

CDMA1X MOBILE ACCESS ROUTER

ユーザーズマニュアル

第4版



このたびは **FutureNet AS-150/X- II** をご購入いただきまして、誠にありがとうございます。

本書には、本装置を安全に使用していただくための重要な情報が記載されています。ご使用前に本書をよくお読みになり、正しくお使いいただけますようお願い致します。

■商標について

FutureNet は、センチュリー・システムズ株式会社の商標です。

下記製品名等は米国 Microsoft Corporation の登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows 95、Windows 98、Windows NT4.0、Windows 2000、
Windows XP、Windows Vista、Microsoft Internet Explorer、Microsoft Outlook
Express

その他の商品名、会社名は、各社の商標または登録商標です。

■ご注意

- (1) お取扱いを誤った場合には責任を負いかねますので、ご使用前には必ず本マニュアルをお読み下さい。
- (2) このマニュアルの作成にあたっては万全を期しておりますが、万一不審な点、記載漏れなどお気づきのことがありましたらお問い合わせ下さい。
- (3) 本製品を使用した事によるお客様の損害、逸失利益、または第三者のいかなる請求につきましても、上記の項目(2)にかかわらず当社は一切の責任を負いかねますので、あらかじめご了承下さい。
- (4) このマニュアルの著作権および本体ハードウェア、ソフトウェアに関する知的財産権は、センチュリー・システムズ株式会社に帰属します。
- (5) このマニュアルの内容の全部または一部を無断で転用、複製することはできません。
- (6) 本マニュアルの内容および仕様、外観は、改良のため将来予告なく変更することがあります。

■本製品の修理について

本製品の修理はセンドバックサービスになっています。故障等の異常が発生した修理対象機器をご返却いただき、当社にて修理を実施いたします。修理後、お客様が指定する場所に送付いたします。

※ 当社への発送料金はおお客様ご負担となります。

※ お預かりする修理品の状況により、修理のために本製品の設定情報を初期化し、ご購入前の状態に戻す場合があります。必ず設定情報の控えを取ってから修理品をお送りください。

※ 本製品の保証期間は、お買い上げ日より 1 年間です。保証期間を過ぎたもの、保証書に販売店印のないもの(当社より直接販売したものは除く)、また保証の範囲外の故障については有償修理となりますのでご了承ください。保証規定については、同梱の保証書をご覧ください。

— 目次 —

第1章	はじめに	1
1.1	AS-150/X-IIの使い方	2
1.2	梱包内容の確認	4
第2章	ハードウェアの名称と接続方法	5
2.1	本体各部の名称	6
2.2	LED表示	7
2.3	装置の接続	9
2.4	LAN インタフェース仕様	10
2.5	RS-232 インタフェース仕様	11
2.6	デジタル接点入力インタフェース	12
第3章	セットアップ機能	13
3.1	Telnet による設定管理	14
3.2	工場出荷 IP アドレスの変更	16
3.3	パケット通信速度の選択	17
3.4	設定値のバックアップと復帰	18
3.5	設定を工場出荷値に戻す	20
第4章	センターとの通信仕様	21
4.1	発着信の制御	22
4.1.1	ドメイン管理情報	22
4.1.2	発信、PPP 認証	22
4.1.3	着信、PPP 認証	23
4.2	NAT/NAPT 変換	24
4.2.1	NAT コンフィグレーション・テーブルの作成方法	24
4.2.2	NAT コンフィグレーション・テーブルの設定例	25
4.3	GRE トンネリング	30
4.4	RS-232 プロトコル変換	32
4.4.1	センターとの通信	32
4.4.2	緊急地震速報の RS-232 装置への中継	34
4.5	インターネット接続と DNS リレー機能	36
4.6	OTA 機能	37
4.7	ケータイアップデート機能	39
4.8	メール送信機能	40
第5章	運用・管理に関する機能	41
5.1	省電力機能	42
5.1.1	運用状態から待機状態への移行	42
5.1.2	待機状態から運用状態への移行	43
5.2	時刻サーバ機能	44
5.3	パケットフィルタ機能	45
5.3.1	機能の概要	45
5.3.2	設定項目	46
5.3.3	主な設定例	48
5.4	DHCP サーバ機能	49
5.4.1	設定手順	49
5.4.2	DHCP クライアントの設定について	52
5.5	通信履歴のロギング機能	53
5.6	SYSLOG によるログ情報の転送	57
5.6.1	AS-150/X-II 側の設定	57
5.6.2	ホストコンピュータ側の設定	58
5.7	ステータス表示	59
5.8	ファームウェアのバージョンアップ	62

第 6 章 設定項目	65
6.1 Telnet メニューの設定項目	66
6.2 コマンド一覧	73
6.2.1 制御コマンド	73
6.2.2 設定コマンド	75
第 7 章 参考資料	85
7.1 AS-150/X-II 設定例	86
7.1.1 インターネット接続で NAT を利用した通信設定例	86
7.1.2 閉域網サービスで NAT を利用した通信設定例	87
7.1.3 閉域網サービスで GRE を利用した通信設定例	91
7.1.4 省電力機能を使った RS-232 ポート通信設定例	95
7.1.5 接続テストの例	99
7.2 AS-150/X-II 仕様一覧	100

第 1 章

はじめに

ここでは FutureNet AS-150/X-II の概要をご紹介します。

1.1 AS-150/X-II の使い方

FutureNet AS-150/X-II は、KDDI 株式会社が提供する CDMA 1X サービスを使って、モバイルデータ通信を省電力で実現するための専用ルータです。「閉域網サービス」環境、または「インターネット接続サービス」環境で利用でき、屋外に設置した設備・機器など、環境条件の厳しい場所でもワイヤレスの通信を実現します。

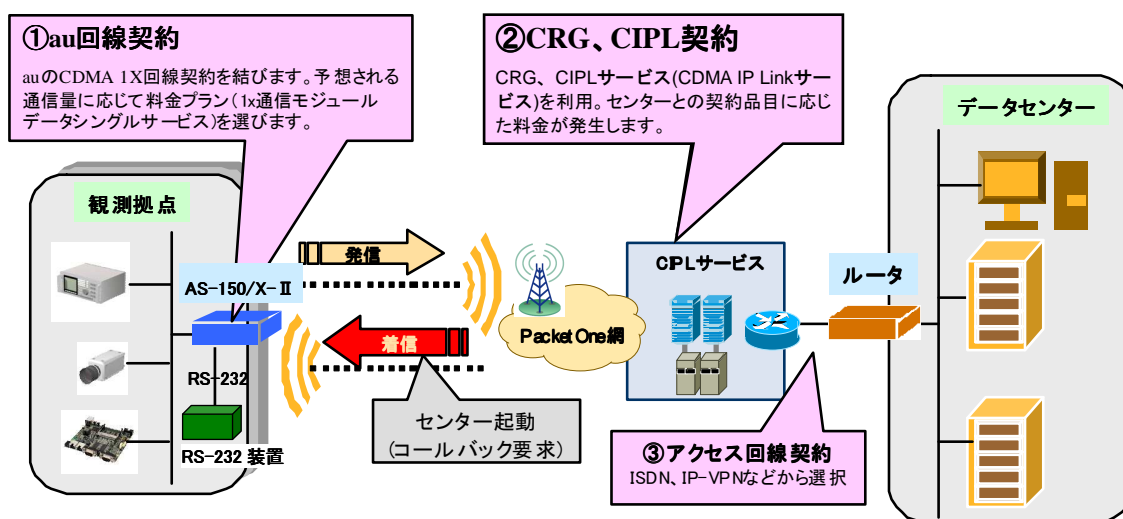
通信モジュールとしては「WM-M200」(セイコーインスツルメンツ社製)を内蔵しています。「WM-M200」は、CDMA 1X に対応しており、下り最大 144kbps(ベストエフォート)、上り最大 64kbps(ベストエフォート)の通信性能を備えます。

●省電力機能

AS-150/X-II はソーラー電源を利用したシステムへの組み込みに対応できるよう省電力機能に対応しています。これにより消費電力 **0.24W** 以下で製品を待機状態にできます。また、通常の運用動作時でも省電力 CPU や電源回路の最適化により、最大でも 3W という低消費電力を実現しています。ファンレスで動作すると共に高信頼性を確保し、**24 時間 365 日の常時稼働が可能**です。

●閉域網サービスの利用

AS-150/X-II は、KDDI 株式会社が提供する閉域網サービス「クローズドリモートゲートウェイサービス (CRG)」や「CIPL サービス」を利用して**パケット着信機能**をサポートします。この構成では拠点→センター方向の接続に加え、**センター→拠点方向の接続**も可能です。また閉域網を利用するため、通信のセキュリティも確保できます。



(*) 閉域網サービスに関する情報:

CIPLサービス : http://www.kddi.com/business/tsushin_module/kosei.html
 通信料金の情報: http://www.kddi.com/business/tsushin_module/ryokin.html
 アクセス回線: 各社の専用線サービスを参照ください。

図 1 閉域網サービス

●インターネット接続サービスの利用

回線が引けない拠点や、期間限定で利用するオフィス/店舗/観測拠点等では、インターネット接続環境で利用できます。拠点側からインターネットにアクセスする、メールをする、本社やセンターにデータを送る/ダウンロードする、といった一般的なインターネット利用が可能です。ネットワーク回線の施工が不要なため、簡単にインターネット接続環境を配備/移設できます。

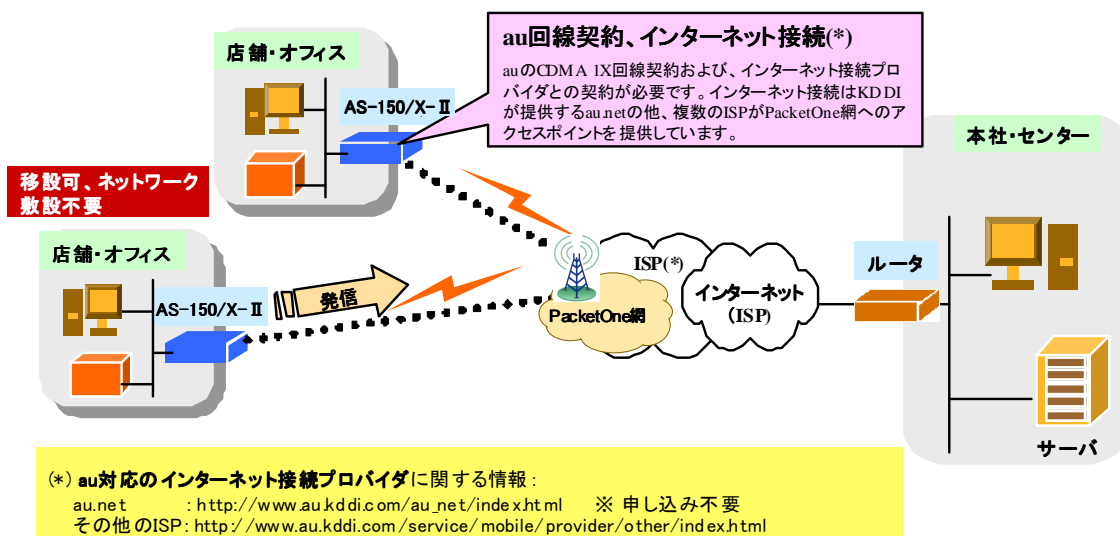


図2 インターネット接続サービス

●複数ドメインの登録機能

AS-150/X-IIには最大5つまでドメインの登録ができますので、上述の「閉域網サービス」と「インターネット接続」のように異なるサービス環境が混在しても、パケットの宛先により自動的に振り分けて通信することが可能です。

●AS-150/X-IIのネットワーク機能

AS-150/X-IIはルータとしてスタティックルーティングや、複数の機器からの同時アクセスを可能にするポートフォワーディング機能を備えています。また、外部からの攻撃や内部からの意図しない接続を防止するパケットフィルタ機能も備えています。さらにネットワーク設計を簡単にするGRE (Generic Routing Encapsulation)、au網の時刻情報をLAN上の機器へ提供するSNTP (Simple Network Time Protocol) サーバ、DHCPサーバなどの機能も搭載しています。

●シリアル変換機能

AS-150/X-II を使うことにより、ネットワーク通信機能を持たないシリアル通信装置を、無線通信網を介した遠隔地のコンピュータや拠点 LAN 上のコンピュータから制御・アクセスすることができます。本装置は、ネットワーク側からの TCP 接続を受け、TCP/IP 通信手順と RS-232 無手順通信との間でプロトコル変換を行います。これにより本装置に接続したシリアル通信装置は TCP/IP プロトコルを意識することなくネットワークとの通信が可能となります。

●接点入力

AS-150/X-II は接点入力を2ポート備えています。接点入力は省電力動作の待機状態からの復帰および、メール送信のトリガーとして利用できます。ソーラーバッテリーの容量低下時に警報メールを送信したり、充電回復をメールで通知するなどの用途に利用できます。また、たとえばネットワークカメラの接点と連動させて画像アップロードと同時にメールでセンターに通知するといった構成が可能です。

1.2 梱包内容の確認

製品パッケージに含まれる内容は別紙の「パッキングリスト」に記載されています。「パッキングリスト」に含まれるものがそろっているか確認して下さい。万一、不足しているものがありましたら、お手数ですが「FutureNet サポートデスク」までご連絡下さい。

製品に同梱の CD-ROM には、本マニュアルの他にファームウェア・バージョンアップのためのユーティリティソフトが含まれています。これについても確認して下さい。

第 2 章

ハードウェアの名称と接続方法

ここでは FutureNet AS-150/X- II の本体各部の名称と接続についてご説明します。

2.1 本体各部の名称

AS-150/X-II の本体各部の名称と働きは以下のとおりです。

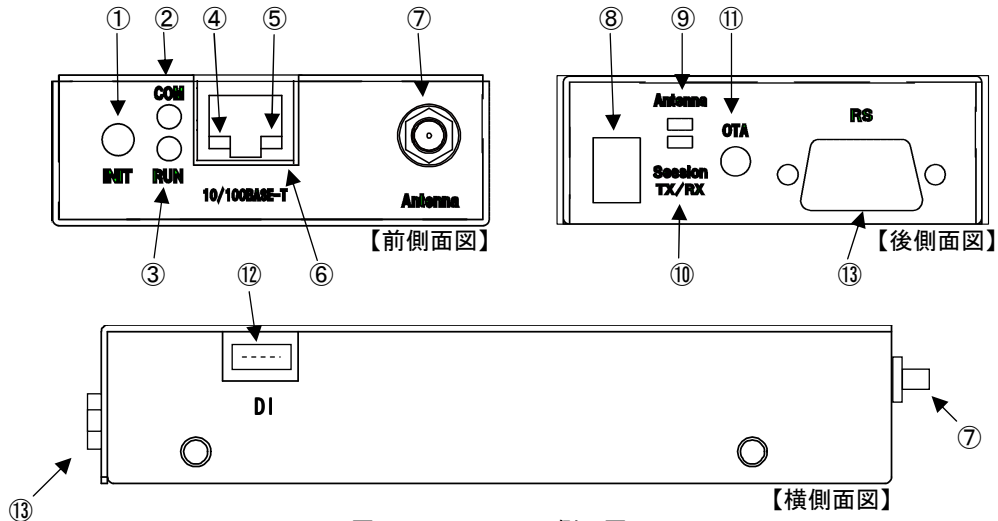


図 3 AS-150/X-II 側面図

【AS-150/X-II 本体各部の名称と働き】

番号	名 称	働 き
①	[INIT] プッシュボタン	このボタンを押しながら本体の電源を入れると、すべての設定内容を工場出荷時の状態に初期化します。 詳細は「3.5 設定を工場出荷値に戻す」を参照してください。
②	[COM]赤色 LED	下記「2.2 LED 表示」を参照してください。
③	[RUN]緑色 LED	
④	イーサネットリンク 緑色 LED	イーサネットリンクで点灯。データ送受信時は点滅します。
⑤	イーサネット通信速度 橙色 LED	100Mbps 時点灯、10Mbps 時消灯します。
⑥	[100/10BASE-T] イーサネットコネクタ	イーサネット規格の 100/10BASE-T ケーブルを接続するためのコネクタ (RJ-45)です。
⑦	[Antenna] アンテナ接続端子	外部アンテナを接続する端子です。
⑧	電源コネクタ	DC5~24V の外部電源を入力します。(コネクタ型番:S2P-VH)
⑨	[Antenna] 電波強度 LED	下記「2.2 LED 表示」を参照してください。
⑩	[Session Tx/Rx] PPP リンク/通信 LED	下記「2.2 LED 表示」を参照してください。
⑪	[OTA] プッシュボタン	OTASP(回線開通)を行います。 詳細は「4.6 OTA 機能」を参照してください。
⑫	接点入力コネクタ	2 ポートの無電圧接点入力コネクタです。
⑬	RS-232 コネクタ	RS-232 機器を接続するポート(Dsub9 オス)です。 固定用のネジはインチネジです。

③H/W システム情報読み出しエラー

[COM]は5回点滅と1秒消灯を繰り返し、[RUN]は連続点滅します。動作停止の状態です。

[COM] →  1秒消灯  ~

[RUN] →  ~

④システムエラー

[COM]と[RUN]は両方とも連続点滅し、動作を停止します。ただし WatchDog 監視を行っていれば再起動します。

[COM] →  ~

[RUN] →  ~

(2) Antenna (緑/赤 2色)

電波の受信状態を2色LED[Antenna]により表示します。

緑点灯 : 普通(3本)
 緑点滅 : やや弱い(2本)
 赤点滅 : 弱い(1本)
 赤点灯 : 圏外(0本)

(3) Session Tx/Rx (緑)

● 運用状態の表示

PPP リンク及びデータ送受信、OTA の状態を表示します。

- ・PPP リンク確立時 点灯。PPP リンク解消時 消灯。
- ・PPP リンクの状態にかかわらず、データ送受信時点滅。

・OTA 機能を実行したとき、以下の表示を行います

- ① モジュールとのデータ送受信に伴い点滅。
- ② OTASP(回線の開通)が成功した場合、約10秒間点灯。

● 待機(省電力)状態の表示

常に点灯します(他のLEDはすべて消灯)。

(4) イーサネットコネクタ両側の・リンク(緑)/速度(橙)LED

イーサネットコネクタの両側の2個のLEDで、イーサネットリンク確立とデータ転送状態、10/100Mbpsの区別を表示します。「2.1 本体各部の名称」を参照してください。

2.3 装置の接続

本体背面は次のように各機器を接続して下さい。

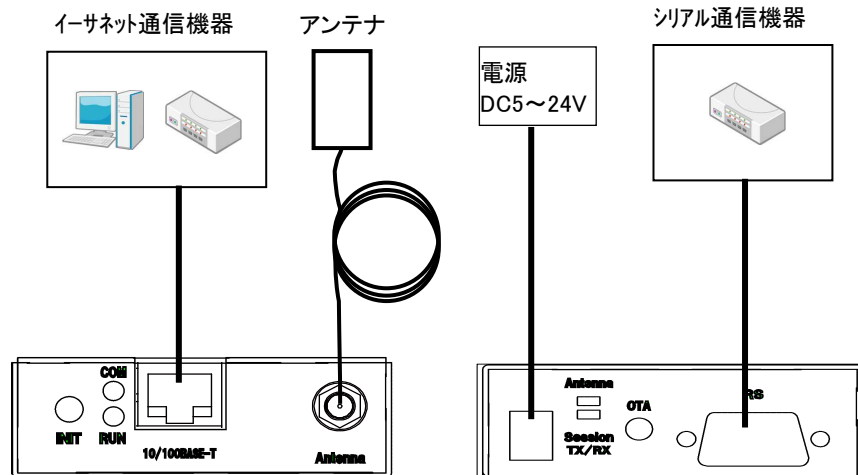


図 4 ケーブルの接続

➤ 取り付け金具の使用

AS-150/X-IIを固定設置する場合は、付属の取付金具を取付金具用ネジでねじ止めし設置して下さい。

➤ 接続可能なアンテナ

AS-150/X-IIに接続できる外部アンテナ(別売)は用途に応じて各社の製品が選択できます。使用可能な製品につきましては弊社営業部までお問い合わせください。

➤ LAN ケーブルの接続

本装置をLANに接続するにはイーサネットケーブルを使って本装置の100/10Base-Tポートをハブに接続します。イーサネットケーブルのクロス/ストレートは自動判定です。ケーブル・コネクタは、カチッと音がするまでしっかりと接続して下さい。

➤ RS-232C ケーブルの接続

RS-232Cケーブルのコネクタを本装置のD-SUBコネクタにねじ止めしてください。RS-232Cポートの詳細は「2.5 RS-232C インタフェース仕様」を参照してください。

すべての接続が完了したら、AS-150/X-IIと各接続機器の電源を投入してください。

2.4 LAN インタフェース仕様

本装置は以下のイーサネットインタフェースを備えています。

Fast Ethernet × 1 ポート
100BASE-TX/10BASE-T (RJ-45)、Auto MDI/MDI-X

本装置の MAC アドレスの上位 3 バイトは“00806D”です。MAC アドレスは本体の裏面のシールに印刷されています。また、Telnet でログインしたときの最初の画面にも表示されます。

通信速度および通信モードは、オートネゴシエーションによる自動設定、またはマニュアル設定が可能です。工場出荷値は自動設定になってますので、相手装置もオートネゴシエーションであれば、電源投入時、互いにやりとりを行い通信速度と全二重/半二重モードを自動的に決定します。

設定を変更する場合は、Telnet 設定メニューもしくは Telnet のコマンドラインにより行ってください。設定メニューの場合は、トップメニューの 1) General から 2) Ethernet Physical I/F を選択して各設定を行ってください。コマンドラインの場合は「ethernetif」コマンドを使用してください。各々の詳細については「6.1 Telnet メニューの設定項目」または「6.2.2 設定コマンド」を参照してください。

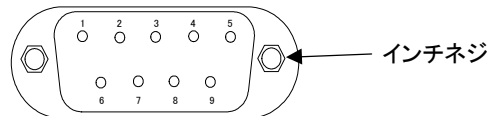
2.5 RS-232 インタフェース仕様

AS-150/X-II のシリアルインタフェースは RS-232 に準拠しています。

RS-232 インタフェースの仕様は以下のとおりです。

コネクタ形状	: DSUB9ピンオス型
通信方法	: 全二重通信・調歩同期式
通信速度	: 2,400、4,800、9,600、19,200、38,400、57,600、115,200、230,400、460,800(bps)
データ形式	: データ長:8ビット、7ビット パリティビット:なし、偶数、奇数 ストップビット:1bit、1.5bit、2bit
フロー制御	: なし、RTS/CTS、XON/XOFF、RTS/CTS と XON/XOFF の両方

■AS-150/X-II 本体側の D-SUB 9 ピンコネクタのピン配置は次のようになっています。



ピン番号	信号名	方向	用途
1	—		
2	RXD	入力	データ受信
3	TXD	出力	データ送信
4	DTR	出力	緊急地震速報の送信通知、TCP 接続状態の通知
5	GND		
6	—		
7	RTS	出力	フロー制御、TCP 接続状態の通知
8	CTS	入力	フロー制御
9	—	出力	緊急地震速報の送信通知 (「4.4.2 緊急地震速報の RS-232 装置への中継」参照)

2.6 デジタル接点入力インタフェース

AS-150/X-II は2ポートの無電圧接点入力 (DI0、DI1) を備えます。

インタフェース: 2ポート

入力形式: 無電圧接点入力

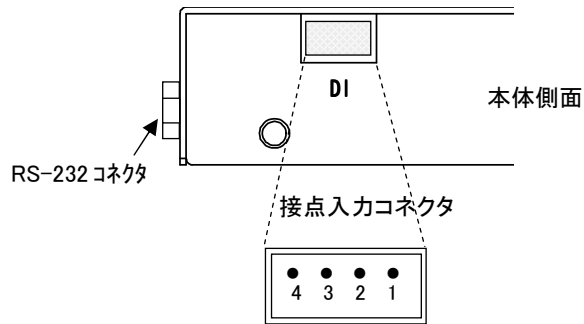
信号電圧: 5-24V

出力電流: 1mA

絶縁: 非絶縁

コネクタ型番: S04B-PASK-2

メーカー: 日本圧着端子製造株式会社



ピン番号	信号名
1	コモン 0
2	接点入力 0
3	コモン 1
4	接点入力 1

* コモン 0, 1 は内部で接続

■ この接点入力には以下の2つの用途で使います。

接点各々について、OFF 状態から ON 状態に変化したとき、

- (1) 待機状態から運用状態に移行させる(「5.1 省電力機能」参照)
- (2) メールを送信する(「4.8 メール送信機能」参照)

第 3 章

セットアップ機能

ここでは AS-150/X-II の工場出荷時 IP アドレスの変更方法、及び他の設定方法についてご説明します。

3.1 Telnet による設定管理

本装置の設定や運用管理は Telnet で行うことが出来ます。

パソコンなど(Telnet クライアント)から本装置に Telnet で接続し、パスワード(工場出荷時は“system”)を入力してログインに成功すると、以下の項目がメニュー表示されます。ここで“Enter Number”のプロンプトに対してメニュー番号を指定して希望のメニューを選びます。項目を選ぶとその階層に移動し、さらに下層メニューの選択肢が表示されます。番号を指定しないで “↵”(Enter)キーだけを押しすとひとつ上の階層に戻ります。

【Telnet トップメニューの表示項目】

1) General

全体の動作や運用及び LAN 側ネットワークに関わる設定を行うサブメニューです。この下位層メニューについては、「6.1 Telnet メニューの設定項目」を参照してください。

2) Service Type:

将来機能が追加された場合の動作選択メニューです。現状は“CIPL Access Router”と表示されるだけで設定項目はありません。

3) Service Settings

本装置の主に WAN 側動作の設定を行うサブメニューです。この下位層メニューについては、「6.1 Telnet メニューの設定項目」を参照してください。

4) Status

通信状態のステータスを表示するサブメニューです。「5.7 ステータス表示」をご覧ください。

5) Command Line

後述「コマンドラインの使い方」を参照してください。

6) Exit

Telnet 設定メニューを終了します。変更した内容をキャンセルして Telnet メニューを閉じる(quit)か、設定した内容を保存して再起動する(Save configuration & Restart)かが選べます。

Telnet を使った設定として、2つの方法があります。1つは、1) General や 3) Service Settings のサブメニューからメニュー選択で行う方法、もう1つは、5) Command Line からコマンドで行う方法です。どちらで行っても同じですが、以下の4つの設定項目はコマンドラインだけで対応しています。Telnet サブメニュー内には設定項目として表れません。各々のコマンド詳細については「6.2.1 制御コマンド」の以下の各項目を参照してください。

定期発信機能の設定 (1) atdreset
 定期リポート機能の設定 (2) autoreboot
 圏外定時間リセット機能の設定 (18) oosreset
 PPP 再接続待ち時間の設定 (22) ppp_interval

Telnet メニューからサブメニューをたどって設定を行った場合は、最後にトップメニューに戻って 6) Exit から 2) Save configuration & Restart を実行してください。これにより AS-150/X-II は再起動され、変更した内容が保存されて新しい設定が有効になります。6) Exit から 1) Quit を選ぶとそれまでの変更は無効となり、再起動もされません。設定値は不揮発メモリに保存されますので、電源を落としても消えません。

■ コマンドラインの使い方

Telnet メニューの 5) Command Line を選択すると、以下のように、コマンド入力を促すプロンプト “>” が表示されます。

```

Ethernet address 00:80:6d:01:02:03
 1) General
 2) Service Type: CIPL Access Router
 3) Service Settings
 4) Status
 5) Command Line
 6) Exit
Enter number 5<
>

```

コマンドラインで使用できるコマンドの全てを「6.2 コマンド一覧」に記述しています。

コマンドには、「show」、「restart」などのように入力して直ちに作用する「制御コマンド」と、各機能の設定を行う「設定コマンド」があります。設定コマンドは制御コマンド「restart」の入力によって始めて本装置内部へ保存記憶 (Telnet を切断して再起動) されます。

```

Enter number 5<
> filter 0 reject in 192.168.100.100/24 * * * * ppp1<
> syslog ipaddress 192.168.100.152<
> syslog option system on<
> restart<
Please Wait...
Configuration was saved. Now restarting...(再起動で Telnet は切断されます)

```

} 設定コマンド

変更を保存せずに Telnet コマンドラインから抜ける場合は、制御コマンド「quit」を使用します。「quit」の後、続けて Telnet メニューの 6) Exit から 2) Save configuration & Restart を選択すると、「restart」を使った場合と同様、それまでに変更した設定内容が本装置へ書き込み保存されます。

コマンドラインからは主に以下のことが可能です。

- ・本装置の設定 -----▶ 「6.2.2 設定コマンド」参照
- ・PPP 回線の接続/切断、Ping 送信 -----▶ 「6.2.1 制御コマンド」参照
- ・OTA 実行(OTASP,OTAPA) -----▶ 「4.6 OTA 機能」参照
- ・通信ログ、設定内容など各種情報の表示、本装置の再起動 -----▶ 「6.2.1 制御コマンド」参照
- ・緊急地震速報のテスト送信 -----▶ 「4.4.2 緊急地震速報の RS-232 装置への中継」参照

なおコマンドライン入力では、過去に実行したコマンド行を 32 個まで記憶しており、矢印キーにより再表示させて実行できます。この入力履歴はログアウトしても消失しませんが、再起動すると消えます。

【Telnet 無通信切断機能について】

本装置の Telnet サーバはシングルセッションで、同時に複数のユーザからの接続は受け付けません。そのため Telnet 接続したまま無操作で放置された場合、約 5 分 (工場出荷値) で Telnet を切断します。この切断までの時間は、設定メニュー 1) General の 5) Start up から 1) Telnet Inactivity Timeout を選択して、変更できます。(「6.1 Telnet メニューの設定項目」参照)

Memo
メモ

3.2 工場出荷 IP アドレスの変更

本装置の IP アドレスの工場出荷値は 192.168.254.254 に設定されてますので、お手持ちの (Telnet クライアントとして使う) パソコンの IP アドレスを一時的に 192.168.254.* (ただし * は 1~253) に変更して、以下のように接続を行ってください。

AS-150/X-II とパソコンを LAN 接続し、パソコンから 192.168.254.254 のアドレスに Telnet 接続して下さい。(ハイパーターミナルや市販のターミナルソフトから Telnet ポート番号 23 に接続するか、コマンドプロンプトから telnet 192.168.254.254 を入力して接続する、等の方法があります)

Telnet 接続が成功すると以下のようにパスワード入力を促されます。

```
# FutureNet AS-150/X-II Version 1.00 #
password :
```

ファームウェアのバージョン番号

パスワードの工場出荷値は "system" です。ログインすると以下のメニューが表示されます。

```
password :system<
Ethernet address : 00806D123456
1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number
```

このトップメニューから、1) General → 3) TCP/IP → 1) Ether I/F IP address を選んで、任意の IP アドレスと、"/" で区切ってサブネットマスクビット値を 1~30 で指定して下さい。

```
IP configuration
1) Ether I/F IP address      192.168.254.254/24 ← 工場出荷値
2) Static route
3) Default route            0.0.0.0
4) IP packet filter
Enter number 1<
Enter new IP address/mask: 128.1.2.3/16<
```

設定例

IP アドレスとサブネットマスクビット数を指定したら Enter キーを押してトップメニューに戻り、6) Exit → 2) Save configuration & Restart を選んで下さい。

```
1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 6<
1) Quit
2) Save configuration & Restart
Enter number 2< ----- 設定の保存と再起動を選択
Please Wait

Set up complete ! ----- 再起動から立ち上がった時点で新しい IP アドレスが有効です
```

3.3 パケット通信速度の選択

本装置の無線パケットデータ通信速度は、au 回線契約の内容に合わせてください。工場出荷値は「高速パケット」になっています。高速パケット通信の契約でない場合は、必ず「低速パケット」に設定変更してください。

《設定変更の方法》

・コマンドを使う場合

Telnet のコマンドラインから「packetspeed low」を指定します。

```

?
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 5----- コマンドラインを選択
> packetspeed low----- 低速パケットに変更
?
> restart----- 変更を保存し再起動する

```

・Telnet メニューを使う場合

Telnet メニューの 3)Service Settings から 6)Packet speed を選択し、

低速パケットの場合は以下のメニューから 1) low を選びます。

- 1) low (Up 14.4kbps, Down 14.4kbps)
- 2) high (Up 64kbps, Down 144kbps)

最後に Enter キーを押してトップメニューに戻り、6) Exit → 2) Save configuration & Restart を選んで設定を保存します。

【通信ログメッセージ】

通信速度設定が契約内容と異なったまま発呼を試みると、通信ログに“Dialout Failed.: NO CARRIER” のメッセージが記録され、発呼に失敗します。

アンテナが抜けている場合と同じログメッセージです。



3.4 設定値のバックアップと復帰

本装置に設定した値は不揮発メモリに格納されます。従って本装置の電源を落としても消失することはありません。

以下は設定値をパソコンなどにバックアップする方法と、バックアップした設定値を再度AS-150/X-IIに書き込む場合の例です。

(1) 設定値のバックアップ

- ① Telnet メニューから 5)Command Line を選択し、「show config」コマンドを使って現在の設定値(工場出荷値から変更された項目)を表示させます。

ただし、Telnet ログイン用のパスワードは「show config」コマンドでは表示されません。パスワードのバックアップは別途行ってください。

```

Ethernet address 00:80:6d:01:23:45
1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 5<Enter> ----- コマンドラインを選択
> show config<Enter>
main ip 192.168.1.1
main mask 255.255.255.0
nat 0 * * * ipcp
flag menutimeout 0
>

```

設定値

- ② 表示されたコマンド列をコピーしてメモ帳、ワードパッド、などに貼り付けて保存します。



```

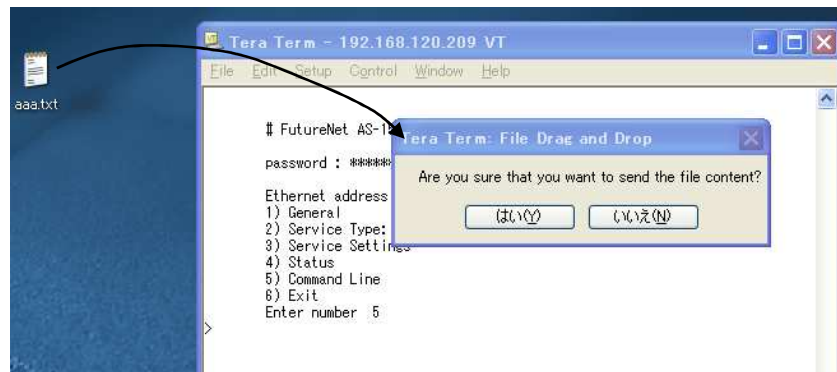
aaa.txt - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
main ip 192.168.1.1
main mask 255.255.255.0
nat 0 * * * ipcp
flag menutimeout 0

```

(2) 設定値の復帰

- ① 上記で保存していた設定をAS-150/X-IIに書き込む場合は、対象とするAS-150/X-IIにパソコンからTelnetでログインします。Telnetメニューから5)Command Lineを選択してプロンプト“>”を表示させ、保存していたコマンドをコピーしてコマンドラインに貼り付けます。このときAS-150/X-IIが工場出荷値設定でない場合は、コマンドラインの先頭に「clr」コマンドを追加して工場出荷値に戻します。

以下のようにTeraTermなどを使用すると、保存したファイルをそのままドラッグ&ドロップして内容を貼り付けることもできます。



```

Enter number 5
> clr ----- 工場出荷値に戻す場合は「clr」コマンドを使う
> main ip 192.168.1.1
> main mask 255.255.255.0 } ----- 貼り付けられたコマンド列
> nat 0 * * * ipcp
> flag menutimeout 0
>
    
```

② 最後に「restart」により設定の書き込みを行います。

```

> clr
> main ip 192.168.1.1
> main mask 255.255.255.0
> nat 0 * * * ipcp
> flag menutimeout 0
< restart ----- 「restart」コマンド実行
Please Wait...
Configuration was saved. Now restarting... ----- 書き込んで再起動される
    
```

もしくは、以下のように「quit」でコマンドラインを抜けて、トップメニューの 6) Exit から設定の書き込みを行っても同じです。

```

Enter number 5
> main ip 192.168.1.1
> main mask 255.255.255.0
> nat 0 * * * ipcp
> flag menutimeout 0
> quit ----- コマンドラインを抜ける

Ethernet address 00:80:6d:01:02:03
1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 6 ----- 6) Exit を選ぶ
1) Quit
2) Save configuration & Restart
Enter number 2 ----- 書き込んで再起動を選択
Please Wait.

Set up complete !
    
```

3.5 設定を工場出荷値に戻す

本装置のすべての設定を工場出荷時の状態に戻すことができます。これは設定がわからなくなったり、使用場所を変える場合など、現在の設定内容をすべて破棄して、最初から設定をやり直す場合におこなって下さい。

工場出荷値に戻す場合は、以下の手順で操作して下さい。

- (1) 接続している回線があれば通信を切断します。
- (2) 電源を切ります。
- (3) 本体背面の[INIT]ボタンを押しながら電源を入れます。設定値を初期化している間 20 秒程度、赤色 LED [COM] が点滅します。点滅が点灯に変わるまで[INIT]ボタンを押しつづけてください。点灯に変わると初期化完了です。[INIT]ボタンを離して下さい。

本装置のすべての設定は工場出荷状態に戻っています。本装置は停止状態ですので、電源を入れなおして使用してください。



注意!

【工場出荷値に戻す】

本装置の設定を工場出荷値に戻すと、それまで設定した内容はすべて失われます。復帰させる必要がある場合は、前もって Telnet コマンドの「show config」などにより、設定値を保存してください。

第4章

センターとの通信仕様

ここでは CRG や CIPL 網を経由して、センターと通信する上で必要とする機能や設定内容についてご説明します。

4.1 発着信の制御

4.1.1 ドメイン管理情報

本装置はドメイン毎の情報として以下の内容を管理しています。

- ① ドメイン名
- ② ユーザー名
- ③ パスワード
- ④ 自動発呼先の宛先 IP アドレスとネットマスク値
- ⑤ メトリック(宛先までのホップ数)
- ⑥ 接続インターフェースとして、NAT/GRE のどちらを使用するか
- ⑦ GRE を選択した場合の GRE トンネリング終点 IP アドレス

4.1.2 発信、PPP 認証

(1) 発信の動作

センターから着信待ち受け状態時に、イーサネットインターフェースから IP パケットを受信し、その宛先 IP アドレスがドメインリストの宛先 IP グループに含まれる場合、発信し、PPP 接続を行います。WAN 側の IP アドレスは、IPCP で取得します。PPP リンク確立時、対応するドメインリストの宛先 IP ネットワークを IP ルーティングテーブルに登録します。PPP リンク確立後は、LAN 側のパソコンから受信し WAN 側にルーティングする IP パケットは、NAT 変換または GRE カプセリング後 WAN 側に送出し、WAN 側から受信した IP パケットは、NAT 逆変換または GRE デカプセリング後 LAN 側に送出します。

PPP 認証は、以下の形式で行います。

ユーザーID:ドメインに対応するユーザー名@ドメイン名

パスワード:ドメインに対応するパスワード

例. 下表のように2つのドメイン登録を行っているとしたします。

ドメイン名	domain0	domain1
ユーザー名	user0	user1
パスワード	pw0	pw1
宛先ネットワーク	192.168.201.0	192.168.202.0
マスク	24	24
メトリック	1	1
インターフェース	NAT	GRE
GRE トンネリング終点	0.0.0.0	192.168.11.126

仮にイーサネットインターフェースから 192.168.202.1 宛での IP パケットを受信したとすると、発信、PPP 認証が行われます。PPP 認証のユーザーID は“user1@domain1”、パスワードは“pw1”となります。WAN 側のルーティングは GRE を使用し、192.168.202.0/24 をインターフェース GRE として、IP ルートテーブルに登録します。

(2) 発信トリガパケットの処理

発信のトリガとなったパケットを「送信する」か「破棄する」の指定が可能です。「送信する」を指定した場合、トリガとなったパケット、及び発信動作中に LAN から受信した最大 10 パケットを保存しておき、発信成功後にまとめて送信します。ただしリダイアルの指定回数を越えて PPP 接続に失敗した場合はパケットを廃棄します。「破棄する」を指定した場合、PPP 接続成功するまで LAN から受信したパケットは破棄します。

工場出荷値は「破棄する」になっています。変更する場合は Telnet 設定メニューもしくは Telnet のコマンドラインにより行ってください。設定メニューの場合は Telnet 設定の 3) Service Settings から 5) Auto dial options を選択して変更してください。コマンドラインから設定する場合は「main packetforwarding」コマンドを使用してください。

詳細については「6.1 Telnet メニューの設定項目」または「6.2.2 設定コマンド」を参照してください。

4.1.3 着信、PPP 認証

通信モジュールからの着信通知を受けて PPP 接続を行います。WAN 側の IP アドレスは、IPCP で取得します。

PPP 認証時は着信したドメイン名に従い、登録されたユーザ名、パスワードを使用します。

PPP リンクが確立すると、対応するドメインリストの宛先 IP ネットワークを IP ルーティングテーブルに登録します。それ以降、自ノードまたは LAN 側から受信し WAN 側にルーティングする IP パケットは、NAT 変換または GRE カプセリングして WAN 側に送出し、WAN 側から受信した IP パケットは、NAT 逆変換または GRE デカプセリングして自ノードまたは LAN 側に送出します。

4.2 NAT/NAPT 変換

AS-150/X-II は、NAT に加えて NAPT (Network Address Port Translation、別名: IP masquerade) 機能を実装しています。NAPT 変換は、複数のプライベート IP アドレスを、センター側(認証代行 RADIUS)から払い出された単一のグローバル IP アドレスに対応させる機能です。これによって LAN 上の複数の機器が AS-150/X-II を通して CRG、CIPL 網を利用できるようになります。ただし NAPT の場合、TCP/UDP のポート番号を変換して LAN 上の複数の機器に割り当てるため、WAN 側から LAN 側に接続を開始するような使い方はできません。

NAT コンフィグレーション・テーブルの設定により、次のような接続形態が実現できます。

- WAN 側にアクセスできる LAN 側の機器を限定する。
- WAN 側からアクセスできる LAN 側の機器を指定する。
- WAN 側から LAN 側にアクセスできないようにする。

4.2.1 NAT コンフィグレーション・テーブルの作成方法

NAT コンフィグレーション・テーブルには、最大 48 個まで変換データを登録できます。何も登録を行わない場合、WAN 側から本装置へのアクセスは可能ですが、WAN⇄LAN 間の通信はできません。複数の変換データが登録されている場合は、エントリ番号の小さい順に比較し、マッチした変換データに従って、NAT/NAPT 変換や逆変換を行います。

登録できる内容は下表の項目です。

エントリ番号	NAT コンフィグレーション・テーブルの登録番号
プライベート IP アドレス	LAN 側のプライベート IP アドレスを次のいずれかで登録します。 <ul style="list-style-type: none"> ● プライベート IP アドレスを1つ指定する ● プライベート IP アドレスの始点と終点を範囲で指定する ● すべてのアドレスを対象とする 単一指定した場合は「NAT エントリ」となり、このプライベート IP アドレスに対して WAN 側からアクセスが可能になります。 範囲指定、またはすべてを指定した場合は「NAPT エントリ」となり、WAN 側からはアクセスできなくなります。「NAT エントリ」と「NAPT エントリ」は混在可能です。
プロトコル	「NAT エントリ」の場合、LAN 側のプロトコルを次のいずれかで指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ● 特定のプロトコルを指定する ● すべてのプロトコルを対象とする 「NAPT エントリ」の場合はこの設定は無視されます
ポート	「NAT エントリ」の場合、LAN 側機器の TCP/UDP ポートを指定します。指定の仕方は次のいずれかが可能です。 <ul style="list-style-type: none"> ● 1つのポート番号を指定する ● 複数のポート番号を始点、終点の範囲で指定する ● すべてのポートを対象とする 「NAPT エントリ」の場合この設定は無視されます(すべてのポートにマッチする)。
アクセスポート	アクセスポートは、WAN 側から LAN 側への IP パケットの宛先ポート番号を、LAN 側機器の TCP/UDP ポート番号に変換する場合に指定します。 従ってアクセスポートを指定する場合、「NAT エントリ」であること、また上記ポートの項目で、LAN 側のポートを「1つのポート番号」に指定しておく必要があります。 WAN 側からの宛先ポート番号がここで指定したアクセスポート番号と一致すると、宛先ポート番号を LAN 側機器のポート番号に変換します。省略した場合はポート変換をせずに、宛先 IP アドレスだけを LAN 側機器の IP アドレスに変換して LAN 側に送出します。

4.2.2 NAT コンフィグレーション・テーブルの設定例

各設定例中の「nat」コマンドの書式に関しては、「6.2.2 設定コマンド」の(17)nat を参照してください。

【例1】LAN 側に WWW サーバー1 台と、複数のクライアントがある例です(NAT と NATP の混在)

(条件)

- ①WWW サーバー(プライベート IP アドレス=192.168.254.1)を、WAN 側からアクセスできるようにする。
- ②その他のクライアントは全て WAN 側にアクセスできるようにする(WAN 側からのアクセスさせない)。

(登録)

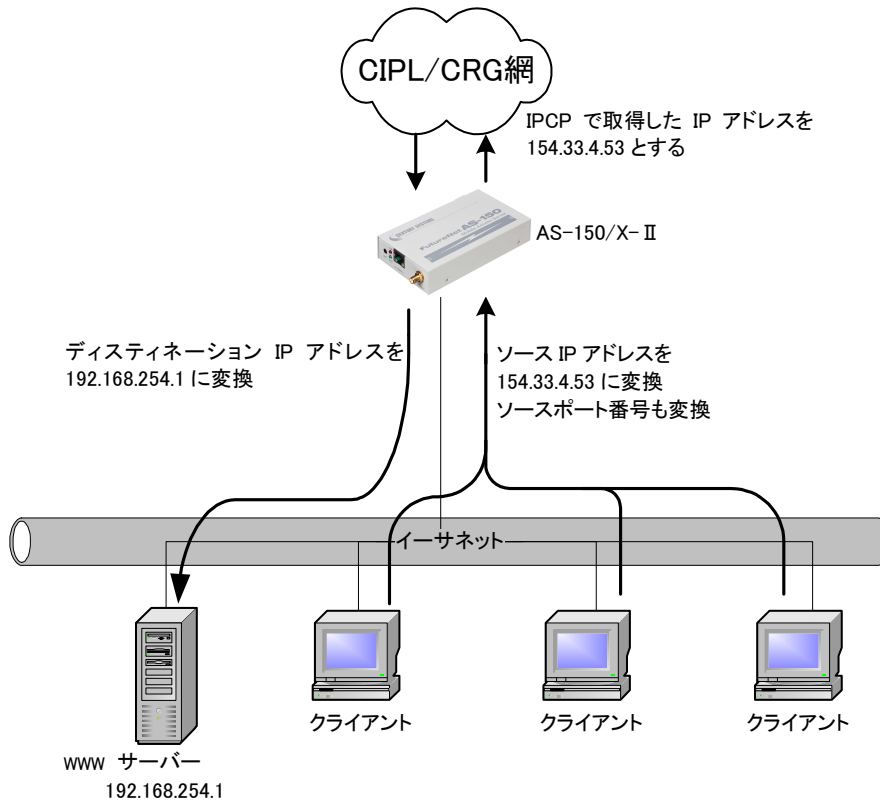
NAT コンフィグレーション・テーブル の登録項目	①の条件	②の条件
プライベート IP アドレス	192.168.254.1	①以外すべてを対象
プロトコル	tcp	すべてを対象
ポート	www(80)	すべてを対象
アクセスポート	指定しない	指定しない

注)登録時のエントリ番号は①より②を大きくします

(nat コマンド)

- ① nat 0 192.168.254.1 tcp www ipcp
- ② nat 1 * * * ipcp

(接続構成)



【例2】LAN 側のクライアント1台に対し、WAN 側からもアクセスできるようにする例です(NAT)

(条件)

WAN 側にアクセスするクライアントを 192.168.254.3 のみに限定し、IPCP で取得した 154.33.4.53 に変換して WAN 側へ送出させます。また WAN 側からの 154.33.4.53 へのパケットも、すべて 192.168.254.3 に渡します。

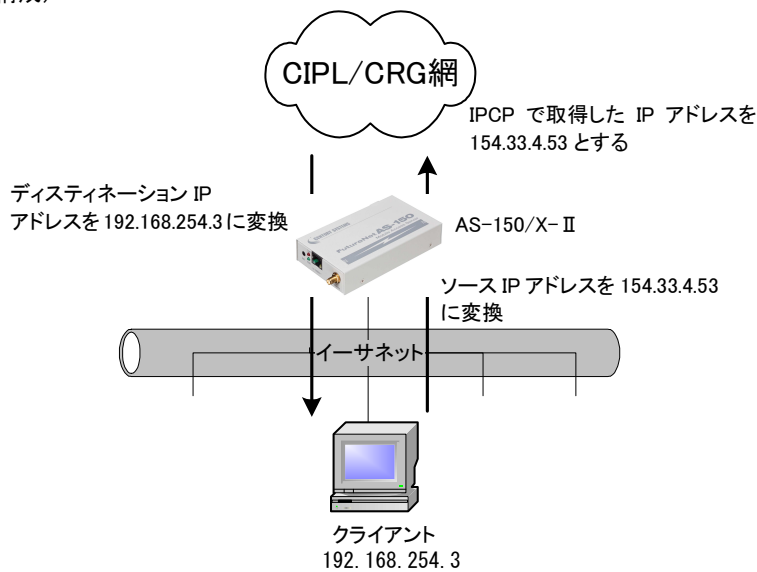
(登録)

NAT コンフィグレーション・テーブルの登録項目	上記の条件
プライベート IP アドレス	192.168.254.3
プロトコル	すべてを対象
ポート	すべてを対象
アクセスポート	指定しない

(nat コマンド)

```
nat 0 192.168.254.3 * * ipcp 0
```

(接続構成)



【例3】WAN 側にアクセスできるクライアントを限定する例です(NAPT)

(条件)

WAN 側にアクセスできるクライアントを、

- ① 192.168.254.2～192.168.254.4 および
- ② 192.168.254.7～192.168.254.10 に限定します。

※WAN 側からのアクセスは全てできません。

(登録)

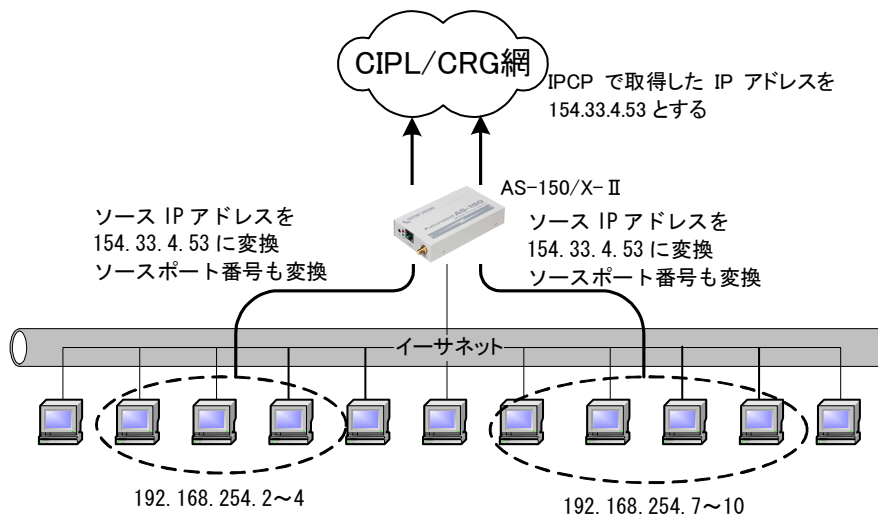
NAT コンフィグレーション・テーブル の登録項目	①の条件	②の条件
プライベート IP アドレス	192.168.254.2 } 192.168.254.4	192.168.254.7 } 192.168.254.10
プロトコル	すべてを対象	すべてを対象
ポート	すべてを対象	すべてを対象
アクセスポート	指定しない	指定しない

注) エントリ番号の順序は無関係です

(nat コマンド)

- ① nat 0 192.168.254.2:192.168.254.4 * * ipcp 0
- ② nat 1 192.168.254.7:192.168.254.10 * * ipcp 0

(接続構成)



【例4】宛先ポート番号の変換を伴う、ポートフォワード機能を使う例です(NAT)

(条件)

LAN 側にある2つの Telnet サーバを、WAN 側からアクセスできるようにします。

Telnet クライアントから、①AS-150/X-II の WAN 側アドレスの 23 番ポートにアクセスすると、LAN 側の 192.168.101.61 の23 番ポートにつながります。②同様に 8023 番ポートにアクセスすると、LAN 側の 192.168.101.62の 23 番ポートにつながります。

(登録)

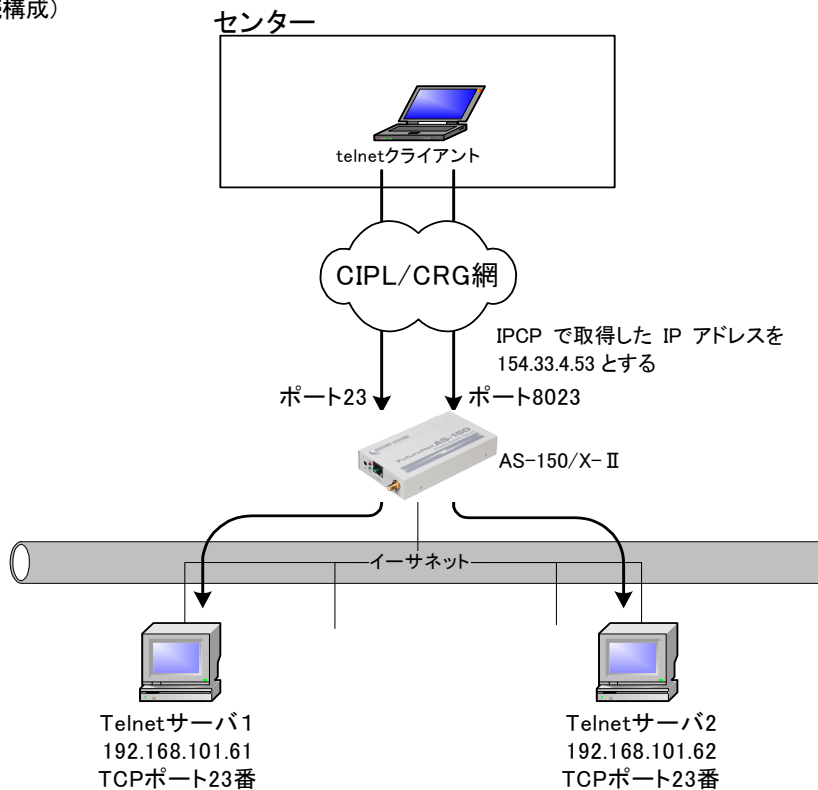
NAT コンフィグレーション・テーブル の登録項目	①の条件	②の条件
プライベート IP アドレス	192.168.101.61	192.168.101.62
プロトコル	tcp	tcp
ポート	23	23
アクセスポート	23	8023

注) エントリ番号の順序は無関係です。

(nat コマンド)

- ① nat 0 192.168.101.61 tcp 23 ipcp 23
- ② nat 1 192.168.101.62 tcp 23 ipcp 8023

(接続構成)



【例5】センター側から AS-150/X-II に対して、Ping、Telnet、ファームウェアバージョンアップを行えるようにし、LAN 上のクライアントから全て WAN 側にアクセスできるようにした例です。

(条件)

- ①AS-150/X-II から Ping (ICMP) 応答が返るようにする。
- ②AS-150/X-II に Telnet 接続できるようにする。
- ③TCP ダウンローダから AS-150/X-II に接続できるようにする。
- ④その他の LAN 上のクライアントは全て WAN 側にアクセスできるようにする。

センターから、①AS-150/X-II の WAN 側アドレスへの Ping を、LAN 側インターフェース (192.168.101.60) への Ping に変換する。②同様に WAN 側 23 番ポートへの Telnet アクセスを LAN 側インターフェースの Telnet アクセスに変換する。③同様に TCP ダウンローダから WAN 側 2222 番ポートのアクセスを LAN 側インターフェースのダウンロードポートへのアクセスに変換する。

(登録)

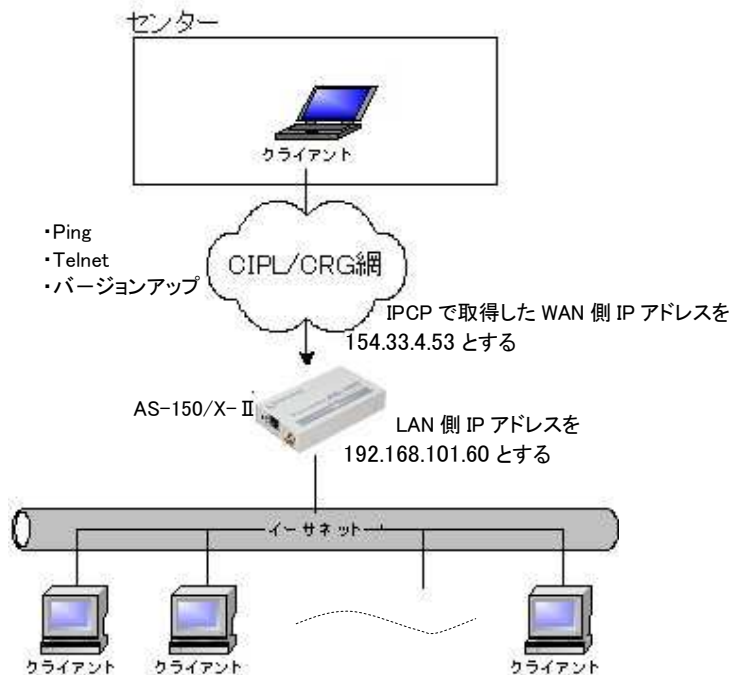
NAT コンフィグレーション・テーブルの登録項目	①の条件	②の条件	③の条件	④の条件
プライベート IP アドレス	192.168.101.60	192.168.101.60	192.168.101.60	全てを対象
プロトコル	icmp	tcp	tcp	全てを対象
ポート		telnet	2222	全てを対象
アクセスポート	指定しない	指定しない	指定しない	指定しない

注)④の登録は最後に行います。

(nat コマンド)

- ①nat 0 192.168.101.60 icmp * icpc 0
- ②nat 1 192.168.101.60 tcp telnet icpc 0
- ③nat 2 192.168.101.60 tcp 2222 icpc 0
- ④nat 3 * * * * icpc 0

(接続構成)



4.3 GRE トンネリング

AS-150/X-II では CRG や CIPL 網を介した、IP ルータ **FutureNet NXR シリーズ製品** との間で、GRE トンネリング機能 (RFC1701 GRE 準拠) を使うことができます。



図 5 GRE トンネリングを使う

本装置と NXR 間で、GRE を設定してトンネルの用意ができると、両端の装置は次のような通信動作となります。

LAN 側インタフェースから受信したデータの宛先 IP アドレスを参照し、それが対向装置の LAN 側宛だった場合は GRE インタフェースに渡して、GRE ヘッダや WAN 側 IP アドレス等を付与し対向装置に転送します。

一方、GRE のデータを受信した対向装置では GRE ヘッダや WAN 側 IP アドレス等を取り外し、LAN 側インタフェースにデータを渡します。

この際 GRE を設定した装置配下から送信されたデータはアドレス変換等は行われません。

(1) GRE カプセル化とデカプセル化機能

イーサネットインタフェースからセンタに送信する(または AS-150/X-II 自身がセンタに送信する)IP パケットの、送信先 IP アドレスがトンネリング対象アドレス(ドメイン管理情報の宛先アドレス)であれば、カプセル化して CIPL 網に送出します。

また CIPL 網から、ディスティネーション IP アドレスが CIPL 網インタフェースの IP アドレスである GRE パケットを受信した場合、デカプセル化し、Payload パケットを取り出し、IP ルーティングを行います。

(2) GRE ヘッダ

GRE ヘッダは4オクテットで、値は 0x00000800 とします。

0x00000800 の意味は次の通りです。

- ① チェックサムフィールドは存在しない。
- ② ルーティングフィールドは存在しない。
- ③ キーフィールドは存在しない。
- ④ Sequence Number フィールドは存在しない。
- ⑤ Protocol Type は IP(0x0800)。

(3) デリバリ・ヘッダ

デリバリ・ヘッダの送信元 IP アドレスは、IPCP で取得した WAN インタフェースの IP アドレスとします。
送信先 IP アドレスは、センターの NXR シリーズ製品の IP アドレスとします。
TTL は、255 固定です。

(4) GRE の MTU

GRE インタフェースの MTU は、1476 固定とします。
したがって、LAN 側から 1500 バイト、かつ Don't Fragment ビット=1 のパケットを受信した場合、ICMP Type=3(Destination Unreachable) Code=4(fragmentation needed and DF set) Next-Hop MTU=1476 を返信します。その結果として、1476 バイトのパケットを受信したら、GRE ヘッダとデリバリ・ヘッダを付加し、1500 バイトの IP パケットを PPP に渡します。

LAN 側から 1500 バイト、かつ Don't Fragment ビット=0 のパケットを受信した場合、フラグメント分割を行い、それぞれのフラグメントに GRE ヘッダとデリバリ・ヘッダを付加し、PPP に渡します。

(5) GRE トンネリングの終点

本装置から見た GRE トンネリングの終点は NXR シリーズ製品となります。
ドメイン管理テーブルにその IP アドレスを設定してください。(「4.1.1 ドメイン管理情報」を参照してください)

4.4 RS-232 プロトコル変換

4.4.1 センターとの通信

本装置側は、CIPL/CRG 網を介した遠隔地のコンピュータや拠点 LAN 上のコンピュータからの TCP 接続を待ちます。ホストコンピュータ側(クライアント側)から本装置のサーバ接続用 TCP ポート番号に対して接続要求を送ることによって TCP 接続が行われます。TCP 確立した後は、ホストコンピュータから本装置に送られたデータはそのまま透過で RS-232 機器へ送り、また RS-232 機器から本装置に送られたデータはそのまま透過でホストコンピュータへ送ります。本装置はプロトコル変換処理を行うだけです。

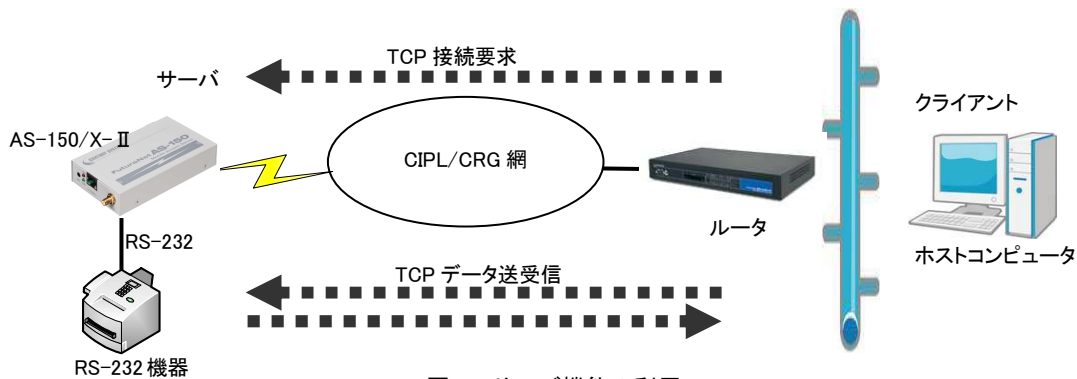


図 6 サーバ機能の利用

TCP 接続に関して、本装置側は接続元(ホストコンピュータ)に関する情報は持ちません。どのホストコンピュータからの TCP 接続要求も受け付けますが、同時には1台のホストコンピュータとしか TCP 接続できません。

TCP 接続をしたまま、無通信 PPP 切断タイマ(Inactivity timeout)により PPP が切断されても、TCP セッションは切れません。IP パケットの再送などによって、再度 PPP 接続に成功すれば、通信が再開されます。

ホストコンピュータ(クライアント)側からは、本装置のシリアルポートに接続した RS-232 機器を TCP/IP ネットワーク上のノードとしてアクセスできます。アクセスするためのインターフェースは TCP/IP の Socket です。本装置はこの Socket インタフェースを通じて受信したデータを RS-232 インタフェースに送信したり、逆に RS-232 から受信したデータを TCP/IP 側に送信する機能を提供します。

WAN 側のクライアントが、本装置の RS-232 とだけ通信を行い LAN 側とは通信しない場合、NAT や GRE を使用する必要がありません。このような場合は、ドメイン登録のインターフェースとして NAT を選択し、かつ NAT の定義は行わずに使用してください。本装置の RS-232 待ち受け TCP ポートに対して直接接続して RS-232 機器へのアクセスが可能です。本装置に対する Telnet 接続や、Ping、バージョンアップ等に関しても同様です。

Memo
メモ

- RS-232 プロトコル変換を行うために必要な設定
 - センターから着信する設定が行われていること。
 - RS-232 ポートサーバとしての設定が行われていること。

RS-232 ポートサーバとしての設定は、Telnet 設定 1) General から 3) RS-232C を選択して行います。
コマンドラインの場合は「rsport」コマンドを使用してください。

設定項目	説明
Baud rate(ボーレート)	RS-232 ポートの通信速度、パリティなどの通信条件を設定します。詳細は「6.1 Telnet メニューの設定項目」の(1-3)RS-232C を参照してください。
Flow control(フロー制御)	
XON Character(XON コード)	
XOFF Character(XOFF コード)	
Data bits(データ長)	
Stop bits(ストップビット)	
Parity bit(パリティ)	
Maximum Idle Characters (アイドル文字数)	
DTR ON timing (DTR 信号の動作)	DTR 信号をオンオフするタイミングを以下の 3 つから選択します。 ① 電源等入でオン ② TCP 接続でオン、切断でオフ ③ 緊急地震速報送信の通知に使う 上記①または②を選択した場合、緊急地震速報の通知は自動的に RS-232 の 9 ピンで行われます。③を選択した場合は9ピンは使用しません。(「4.4.2 緊急地震速報の RS-232 装置への中継」参照)
RTS ON timing (RTS 信号の動作)	RTS 信号をオンオフするタイミングを次の2つから選択します。 ① 電源等入でオンし、以後フロー制御の設定に従う ② TCP 接続でオン、切断でオフし、TCP 接続中はフロー制御の設定に従う
TCP port(TCP ポート番号)	センターからの接続待ち受け TCP ポート番号を設定します。
Inactivity timer value (無通信 TCP 切断タイマ)	TCP 接続中に、本装置とセンターの間で、設定された時間以上の無通信が継続したとき、TCP を切断します。時間値は秒単位で設定します。0 にすると切断しません。ハーフオープン対策にもなりますので設定をお勧めします。
Forced timer (強制 TCP 切断タイマ)	接続してから設定された時間が経過すると、通信中であっても強制的に TCP を切断します。通信状態に異常がなくても一定時間以上接続させたくない場合に有効です。必要に応じて秒単位で設定します。0 にすると切断しません。

4.4.2 緊急地震速報の RS-232 装置への中継

KDDI 関連設備より配信された緊急地震速報用ブロードキャスト SMS を読み出し、SMS データを RS-232 ポートに中継送信する機能を備えます。また RS-232 装置への送信を通知するために、RS-232 の DTR 信号（※もしくは9ピン）を使い、送信開始前にオン（マーク）状態にし、送信完了後にオフ（スペース）状態に戻します。

（※）DTR 信号を「緊急地震速報の送信通知」に設定していない場合は、DTR 信号の代わりに RS-232 の 9 番ピンを出力として使い、緊急地震速報の送信通知を行います。

● 緊急地震速報を中継するために必要な設定

- センターから着信を受ける設定になっていること。
- EMG Activate が on（有効）に設定されていること。
- RS-232 の通信条件が接続機器に合わせて設定されていること
- （アンテナが接続されて通信可能な状態であること）

工場出荷値の EMG Activate は off（無効）、送信完了後に DTR 信号（もしくは9ピン）をオフ状態に戻すデレイ時間は10秒です。変更する場合は、Telnet 設定の 3) Service Settings から 10) Earthquake Early Warning を選択して以下のように行います。コマンドラインの場合は「emg」及び「risignalholdtime」コマンドを使用してください。

EMG Activate の設定例

```

}
9) KUP Activate      off
10) Earthquake Early Warning
11) Mail
Enter number 10.....10) Earthquake Early Warning を選択
1) EMG Activate      off
2) signal hold time  10 seconds
Enter number 1.....EMG Activate を選択
1) off
2) on
Enter number 2.....on(有効)にする
}
1) EMG Activate      on
2) signal hold time  10 seconds
Enter number 2.....DTR 信号(または 9 ピン)のデレイ時間を選択
signal hold time
Enter new value in seconds (5-60) 30..... 30 秒に変更した例
}

```

(1) 緊急地震速報中継の手順

以下の順序で行います。

1. 通常時、本装置の RS-232 の DTR 信号(もしくは9ピン)はオフ(スペース)状態となっている。
2. 地震発生！ KDDI より緊急地震速報が SMS で送信される。
3. 本装置は、SMS の内容を取得する。
4. 本装置は、RS-232 の DTR 信号(もしくは9ピン)をオン(マーク)状態にし、1 秒後に SMS の内容をテキストデータで RS-232 出力する。テキストデータの出力を終了後、指定された時間(工場出荷値 10 秒)ディレイをおいて DTR 信号(もしくは9ピン)をオフ(スペース)状態に戻す。
5. RS-232 に接続された機器は、DTR 信号(もしくは9ピン)がオン(マーク)状態である間、シリアルデータを緊急地震速報として読み込む。

(2) 緊急地震速報テストデータの中継

実際に緊急地震速報が来ていなくても、テストデータを RS-232 ポートへ中継します。以下の手順で実行されます。

1. 本装置に Telnet ログインする。
2. コマンドラインを選択する。
3. コマンド “emgtest” を入力する。

```

      }
      4) Status
      5) Command Line
      6) Exit
      Enter number 5↓ ----- コマンドラインを選択
> emgtest↓ ----- テスト送信実行
>

```

4. 20 秒後、RS-232 の DTR 信号(もしくは9ピン)がオン(マーク)状態になる。
5. 1 秒後、テキストデータ “16211081510182031312F30382F31352031303A31382…” が RS-232 ポートに送信される。
6. 設定された時間が経過したのちに、DTR 信号(もしくは9ピン)がオフ(スペース)状態に戻る。



注意!

緊急地震速報(テスト送信も含め)は、KDDI 関連設備より配信されますので、アンテナを接続してないと中継できません。

4.5 インターネット接続と DNS リレー機能

AS-150/X-II は、ドメインネームサーバ(DNS)の代理応答の機能を持ちます。

これは、LAN 側機器(パソコン)からのドメイン名解決要求パケットをプロバイダの DNS サーバに中継し、DNS サーバからの応答を LAN 側機器に伝える機能です。

DNS リレー機能を使用する際は以下の手順で行ってください。

- (1) DNS リレー機能を有効に指定し、かつドメイン管理情報の宛先ネットワークを 0.0.0.0/0 と登録します。
- (2) クライアントとなる LAN 側機器(パソコン)に、デフォルトゲートウェイおよび DNS サーバとして、AS-150/X-II のイーサネットインタフェースの IP アドレスを設定します。(AS-150/X-II の DHCP サーバ機能を使えば、この設定は不要になります)
- (3) クライアントからインターネット接続を開始します。AS-150/X-II は、PPP リンク確立時に、プロバイダの DNS サーバ(プライマリとセカンダリー)を自動検出します。クライアントからのドメイン名解決要求パケットを DNS サーバに送信し、応答を要求元に返します。

《接続の例》

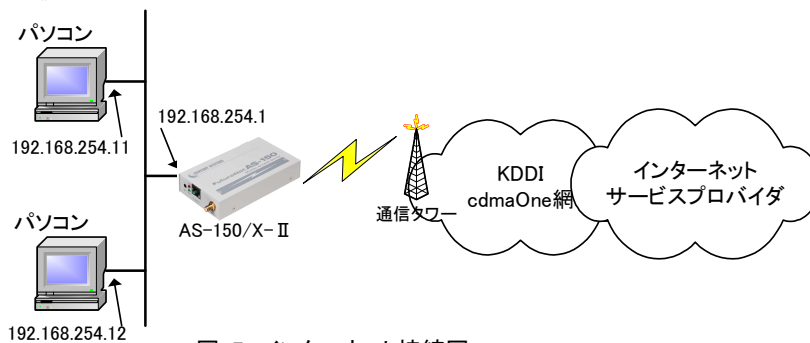


図 7 インターネット接続図

準備①: パソコンの設定は、デフォルトゲートウェイ、DNS サーバの IP アドレスを AS-150/X-II の IP アドレス(192.168.254.1)にします。

準備②: AS-150/X-II に下記を設定します(NAT の場合)。

```
domain 0 0 ドメイン名 ユーザー名 パスワード 0.0.0.0/0 1
nat 0 * * * * ipcp
dnsrelay activate on
```

注意) 上記コマンドに関しては「6.2 コマンド一覧」を参照してください。“ドメイン名” “ユーザー名” “パスワード”はISPの指定に従ってください。

4.6 OTA 機能

OTA(Over The Air) は、無線を利用して通信モジュールの電話番号等 ID 情報の書込み、消し込みを可能にする機能です。電波状態が悪いと失敗しますので、電波状態が良好な状態で行うようにしてください。電波状態は LED、及び Telnet コマンドの「show antenna」(「6.2.1 制御コマンド」の(8)show を参照)で確認できます。

OTA には、回線を開通するときに電話番号等 ID 情報を書込む OTASP(回線利用開始)、と回線を閉塞するときの消し込み処理の OTAPA(回線の解約)があります。

本装置は、OTASP は OTA ボタンまたは Telnet コマンドのどちらかで、OTAPA は Telnet コマンドだけで行うことができます。

OTASP/OTAPA 実行時は、LED [Session Tx/Rx] が点滅します。OTASP に成功すると、10 秒間 [Session Tx/Rx] LED が点灯し、その後本装置は再起動します。OTASP が失敗した場合、10 秒間 LED 点灯はありません。そのまま再起動します。

(1) OTASP 機能

回線が開通されていない状態で、OTA ボタンが押されるか、Telnet のコマンドとして「ota sp」が入力されると、OTASP(回線の開通)を実行します。

OTASP の実行状況、結果はログに残ります。また Telnet で実行する場合は以下のように結果を表示します。回線が開通すると “OTASP is completed successfully.” が表示され本装置は再起動します。

```

Ethernet address 00:80:6d:01:02:03
1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 5↵

> ota sp↵
OTASP is triggered.
AT@30
OK
OTASP1
OTASP2
OTASP3
OTASP4
OTASP5
OTASP6
OTASP0K
OTASP is completed successfully.
Rebooting...

```

OTA 向けコマンド及びリザルトコードをそのまま表示します。

OTASP 成功のメッセージ

回線の開通に失敗した場合は、“OTASP is terminated abnormally.” のエラーメッセージを表示します。回線がすでに開通されている状態で、Telnet のコマンドとして「ota sp」が入力された場合は、“The module is already registered.” のエラーメッセージを表示します。また回線がすでに開通されている状態で、OTA ボタンが押下された場合は無視されます。

(2) OTAPA 機能

回線がすでに開通されている状態で、Telnet のコマンドとして「ota pa」が入力された場合、OTAPA(回線の解約)を実行します。

OTAPA の実行状況、結果はログに残ります。また Telnet で実行する場合は以下のように結果を表示します。回線の解約ができると “OTAPA is completed successfully.” が表示され本装置は再起動します。

```

Enter number 5
> ota pa
OTAPA is triggered.
AT@31
OK
OTAPA1
OTAPA2
OTAPA3
OTAPA4
OTAPA5
OTAPA6
OTAPAOK
OTAPA is completed successfully.
Rebooting...

```

OTA 向けコマンド及びリザルトコードをそのまま表示します。

OTAPA 成功のメッセージ

回線の解約に失敗したり、回線が開通されていない状態で、Telnet のコマンドとして「ota pa」が入力された場合、“OTAPA is terminated abnormally.” のエラーメッセージを表示します。

回線がすでに解約されている状態で、Telnet のコマンドとして「ota pa」が入力された場合、“The module is already unregistered.” のメッセージを表示します。

4.7 ケータイアップデート機能

ケータイアップデートとは、本装置に搭載している通信モジュールのソフトウェアを無線ネットワークを介してダウンロードを行い、最新のソフトウェアへ更新する機能です。

ケータイアップデートの詳細については、KDDI 株式会社にお問い合わせください。

AS-150/X-II では、TELNET 設定メニューやコマンドラインから、ケータイアップデートの有効/無効を設定できます。ケータイアップデート機能を”有効”に設定し、かつ本装置内蔵の通信モジュールがケータイアップデートに対応しているバージョンであれば、ソフトウェア更新は実施されます。ケータイアップデート機能を”無効”に設定すると、通信モジュールのバージョンにかかわらず、ソフトウェア更新は実施されません。有効/無効の設定方法については、「6.1 Telnet メニューの設定項目の(3-9)KUP Activate、もしくは「6.2.2 設定コマンド」の(13)kup を参照してください。

注：ファームウェアバージョン番号 1.X.X の通信モジュールは、ケータイアップデート機能を正式にはサポートしていませんので、ケータイアップデート機能を”有効”という設定を行っても入力エラーを返して受け付けません。

【通信モジュールのファームウェアバージョン確認方法】

Telnet メニューのコマンドラインから「show module」を実行すると、以下のようにバージョン番号が表示されます。

例：

```
> show module
ProductName      : WM-M200
Manufacturer     : SHI
ProductNumber    : 8SKKI123456
ProductVersion : 010214.....バージョン番号 1.02.14
>
```

ケータイアップデート実施後は、結果の成功・失敗によらず、AS-150/X-II 本体の再起動が行われます。

ソフトウェア更新の確認は上記「show module」の ProductVersion により行ってください。ソフトウェア更新が成功していれば、通信モジュールのファームウェアバージョン番号が更新されています。

4.8 メール送信機能

接点入力 OFF から ON に変化したとき、Eメールを送信する機能を備えます。

メール送信を行うためには、2ポートの接点入力 0、1 それぞれ別個に、メール送信の有無、送信メールの宛先、電文の内容等をあらかじめ設定しておく必要があります。

設定は、Telnet 設定メニューもしくは Telnet のコマンドラインにより行ってください。設定メニューの場合は 3) Service Settings の 11) Mail から、またコマンドラインの場合は「maildi」、「mailserver」コマンドを使用してください。詳細については「6.1 Telnet メニューの設定項目」または「6.2.2 設定コマンド」を参照してください。

(1) 送信メールの設定項目

2ポートのデジタル接点入力 0、1 それぞれに対してメールの宛先、電文の設定を行います。

設定項目	内容
メール送信の有無 (Activate)	メール送信を行うか否かの指定です。DI0、DI1 それぞれに対して行います。否にするとメール送信は行われません。
メールサーバの選択 (Mail Server Setting)	下記 2 組のメールサーバのどちらを使用するかを選択します。
件名 (Subject)	メールの件名を半角英数字 63 文字以内で設定します。
本文 (Message)	メール本文を半角英数字 127 文字以内で設定します。
送信元メールアドレス (From)	送信元メールアドレスを半角英数字 127 文字以内で設定します。 (AS-150/X- II にはメールの受信機能はないので、本装置宛の返信はできません)
宛先メールアドレス (To 1~3)	宛先メールアドレスを半角英数字 127 文字以内で設定します。To1、To2、To3 により最大 3 か所まであて先を設定できます。
発生日時の付加 (Add time)	メール送信の契機となった DI 入力 ON の日時を、メール本文中に追加するか否か、また追加するとすれば本文の先頭または最後のどちらにするかを指定します。

(2) メールサーバの設定項目

メールサーバの設定は 2 組まで可能で、DI0、DI1 それぞれにどちらのメールサーバを使って送信するか指定できます。

設定項目	内容
メールサーバのアドレス (SMTP server address)	メールサーバ (SMTP サーバ) の IP アドレス、または FQDN (完全修飾ドメイン名 半角英数記号 63 文字以内) を設定します。
メールサーバポート番号 (SMTP server port)	メールサーバ (SMTP サーバ) の TCP ポート番号を設定します。
認証方式 (Auth method)	メール送信の認証方式を、「認証なし」、「POP before SMTP」、「SMTP AUTH」の 3 方式から選択します。「SMTP AUTH」は「PLAIN」と「LOGIN」をサポートします。優先順位「LOGIN」→「PLAIN」。
POP サーバのアドレス (POP3 server address)	認証用 POP3 サーバの IP アドレス、または FQDN (完全修飾ドメイン名 半角英数記号 63 文字以内) を設定します。
POP サーバポート番号 (POP3 server port)	認証用 POP3 サーバの TCP ポート番号を設定します。
認証ユーザ ID (User ID)	認証用ユーザ ID を半角英数記号 63 文字以内で設定します。
認証パスワード (Password)	認証用パスワードを半角英数記号 31 文字以内で設定します。

第5章

運用・管理に関する機能

ここでは本装置を運用管理する上で必要な機能についてご説明します。

5.1 省電力機能

AS-150/X-IIは、無通信状態が一定時間経過すると、消費電力を落として待機状態に移行する機能を備えています。待機状態では消費電力を運用時の約3分の1に抑えます。

5.1.1 運用状態から待機状態への移行

● 待機状態になる条件

センターからの**着信待受(PPP 未確立)状態**で、かつ下記 6 条件がすべて成立すると、待機状態になるための秒カウントを開始します。カウント中にひとつでも条件が不成立に変わると、その時点でカウントを中止します。また条件成立に戻れば再び0からカウントを開始します。秒カウントが[アイドルタイマ]で指定された秒数に到達すると待機状態に入ります。

- (1) CRG、CIPL 網センタサーバからの着信および、緊急地震速報 SMS 着信が無い
- (2) RS-232 通信が無い。
- (3) LAN 側機器との Telnet 通信が無い。
- (4) 接点入力 0 の状態変化の通知メールの送信が不要であるか、完了した。
- (5) 接点入力 1 の状態変化の通知メールの送信が不要であるか、完了した。
- (6) PowerSaving(省電力)が on(有効)に設定されている。

● 待機状態になるために必要な設定

- PowerSaving(省電力)が on(有効)に設定されていること。
- Idle Timer(アイドルタイマ)が設定されていること。

工場出荷値の PowerSaving(省電力)は on(有効)、Idle Timer(アイドルタイマ)は 60 秒です。変更する場合は Telnet 設定の 1) General から 8) Power saving を選択して以下のように行います。

コマンドラインから設定する場合は「powersaving」コマンドを使用してください。

PowerSaving(省電力)の Telnet メニュー設定例

```

}
7) Startup(option)
8) Power saving
Enter number 8↵

Power saving configuration
1) Power saving      off ..... 省電力の有効/無効
2) Idle timer        60 second
3) DI0 power on trigger  off
4) DI1 power on trigger  off
Enter number 1↵ ..... 省電力を選択
1) on
2) off
Enter number 1↵ ..... on(有効)を選択
}

```

Idle Timer(アイドルタイマ)の Telnet メニュー設定例

```

}
7) Startup(option)
8) Power saving
Enter number 8↵

Power saving configuration
1) Power saving          on
2) Idle timer          60 second
3) DI0 power on trigger off
4) DI1 power on trigger off
Enter number 2↵..... アイドルタイマを選択
Enter number (30-9999999) 180↵..... (例)180 秒に変更
}

```

5.1.2 待機状態から運用状態への移行

本装置が待機状態のとき、以下のいずれかのイベント発生により待機状態から抜けて運用状態に移ります。

- (1) CRG、CIPL 網センターサーバからの着信、または緊急地震速報 SMS 着信したとき
- (2) 接点入力 0 が OFF から ON 状態に変わったとき
- (3) 接点入力 1 が OFF から ON 状態に変わったとき

●運用状態に移行するために必要な設定

- 上記条件(1)に関しては、着信可能な設定になっていること。
- 上記条件(2)、(3)の接点入力に関しては、それぞれが有効に設定されていること

工場出荷値の“接点による移行”は無効になっています。有効にする場合は Telnet 設定の 1) General から 8) Power saving を選択して、以下のように該当する DI を on(有効)に変更します。コマンドラインから行う場合は「di」コマンドを使用してください。

```

}
7) Startup(option)
8) Power saving
Enter number 8↵.....Power saving を選択

Power saving configuration
1) Power saving          on
2) Idle timer          60 second
3) DI0 poweron trigger off
4) DI1 poweron trigger off
Enter number 3↵.....DI 入力 0 を選択
1) off
2) on
Enter number 2↵.....on(有効)を選択
}

```

5.2 時刻サーバ機能

AS-150/X-II は SNTP サーバのユニキャストモードの機能を持ち、LAN 側の機器からの要求に対して現在の時刻を返します。またこの時刻は通信ログのタイムスタンプにも使用しています。

時刻は本装置内蔵の GPS モジュールから取得しますので、電源投入直後や圏外などでは、時刻が得られない場合もあります。時刻が得られないとき、AS-150/X-II は RFC2030 に従い、NTP メッセージの閏秒指示子フィールド(LI)に 3 をセットし、正確な時刻が得られなかったことを SNTP 要求元に返答します。

本装置の時刻は、以下のように Telnet のコマンドラインから「show time」により表示させることができます。

```
Ethernet address 00:80:6d:01:23:45
 1) General
 2) Service Type: CIPL Access Router
 3) Service Settings
 4) Status
 5) Command Line
 6) Exit
Enter number 5↵
> show time↵
2008/07/30 17:30:21
> quit↵
```


5.3 パケットフィルタ機能

本装置では、セキュリティの強化と異常課金防止の目的で、LAN と WAN の間を流れるパケットにフィルタを設定して、通信を制限することができます。

設定は Telnet メニューまたはそのコマンドラインから行います。

5.3.1 機能の概要

LAN に外部からの接続を許す際には、セキュリティに充分配慮する必要があります。パケットフィルタ機能を使うと、以下のことができます。

- ・外部から LAN に入るパケットを制限する
- ・LAN から外部に出て行くパケットを制限する
- ・自動接続に使用するパケットを制限する

本装置でこの機能が有効になっていると、IP パケットを単にルーティングするだけでなく、パケットのヘッダ情報を調べて、送信元や送信先の IP アドレス、プロトコルの種類(TCP/UDP)、ポート番号などに基づいて、パケットを通過させたり破棄したりすることができます。

このようなパケットフィルタ機能は、コンピュータやアプリケーション側の設定を変更する必要がないために、ユーザがパケットフィルタの存在を意識することなく、簡単に利用できます。一般的には、すべてのパケットの通過を禁止しておき、ユーザに提供したいサービス(アプリケーション)のパケットだけが通過できるように、フィルタリングを設定します。

また、パケットフィルタはリモートの LAN にダイヤルアップ接続をおこなう際の、異常課金の防止にも有効です。自動接続による接続をおこなう場合、LAN 上のコンピュータやアプリケーションの設定によっては、意図しない接続がおこなわれ、膨大な通信料金が請求されることがあります。これを防ぐためにも、パケットフィルタは有効です。ユーザが意図するアプリケーションだけを通し、それ以外のものは通さないようにフィルタを設定しておけば、こういった事故を未然に防ぐことができます。

設定済みフィルタの確認、及びフィルタの設定は、以下のように Telnet トップメニューの 1) General から 3) TCP/IP → 4) IP packet filter サブメニューで行います。

```

General configuration
1) Password
2) TCP/IP
3) DHCP Server(option)
4) SYSLOG LOG message settings(option)
5) Start up(option)
Enter number 2↵

IP configuration
1) Ether I/F IP address 192.168.120.207/24
2) Static route
3) Default route          0.0.0.0
4) IP packet filter
Enter number 4↵      ← 最大 32 個フィルタが設定可能
1) Entry 1 - 16 }
2) Entry 17 - 32 }
3) The list which setting finished
Enter number 3↵      ← 設定済みのフィルタが表示される
    filter 1 pass in ** tcp ** ppp1
    filter 2 reject in * * * * * ppp1
Enter number

```

設定済みフィルタがなければ以下のように表示されます。

```

1) Entry 1 - 16
2) Entry 17 - 32
3) The list which setting finished
Enter number 3↵      ← 設定済みのフィルタがない場合
There is not the list which setting finished.
Press return key

```

5.3.2 設定項目

本装置は IP パケットのみをフィルタリング制御の対象とします。その他のレイヤー3 プロトコルは、すべて遮断します。

ICMP、TCP、UDP 以外のレイヤー4 プロトコルはすべて通します。ICMP の制御はおこないません。TCP では、ポート番号とフラグを監視します。UDP ではポート番号を監視します。

工場出荷の状態では、フィルタは設定されていません。ユーザは 32 個までのフィルタを設定することができます。

Telnet メニューから設定する場合は、まずエントリ番号を選択し、そのエントリ番号に対してサブメニューで表示された以下の項目を設定します。エントリ 1~32 が、「filter」コマンドのフィルタ番号 0~31 に対応しています。

(1) Type

通過フィルタ(pass)か遮断フィルタ(reject)を指定します。

- 1) pass
- 2) reject

(2) Direction

WAN に対する受信(in)または送信(out)のフィルタ方向を指定します。

- 1) in
- 2) out

(3) Source IP address

対象とする送信元 IP アドレスを指定します。

- 1) *(すべての送信元を対象とする)
- 2) single address(アドレスを単独指定する)
- 3) range of address(アドレスを範囲指定する)

Enter number 2↵
 Enter source IP address 192.168.101.25↵ } 単独指定の場合の指定例
 Enter mask(1-32) 24↵

(4) Destination IP address

対象とする送信先 IP アドレスを指定します。

- 1) *(すべての送信先を対象とする)
- 2) single address(アドレスを単独指定する)
- 3) range of address(アドレスを範囲指定する)

Enter number 3↵
 destination IP address
 Enter beginning IP address 192.168.200.1↵ } 範囲指定の場合の指定例
 Enter end IP address 192.168.200.5↵

(5) Protocol

対象とするプロトコルを指定します。1)~6)に該当しない場合は 7) other protocol number で直接プロトコル番号を指定します。

- 1) *(すべてのプロトコルを対象とする)
- 2) icmp
- 3) tcp
- 4) tcpfin
- 5) tcppest
- 6) udp
- 7) other protocol number

(6) Source port

- 1) *(すべての送信元ポートを対象とする)
- 2) single port(ポートを単独指定する)
- 3) range of port(ポートを範囲指定する)

Enter number 2↵
 Enter source port number (1-65535) 21↵ } 単独指定の場合の指定例

(7) Destination port

- 1) *(すべての送信先ポートを対象とする)
- 2) single port(ポートを単独指定する)
- 3) range of port(ポートを範囲指定する)

Enter number 3↵
 destination port number
 Enter beginning port number (1-65535) 100↵ } 範囲指定の場合の指定例
 Enter end port number (1-65535) 200↵

(8) Interface

現バージョンではインターフェースは ppp1 固定です。

5.3.3 主な設定例

以降の「filter」コマンド形式については「6.2.2 設定コマンド」の(10)filter を参照してください。

● 送信元を制限する

LAN 上のコンピュータのうち、リモート WAN にアクセスできるものを制限したり、リモート WAN 側からアクセスを許すコンピュータの、IP アドレスを指定することができます。IP アドレスだけでなく、ポート番号やパケットの種類も細かく指定できます。

例: WAN に対して、アクセスできるコンピュータを「192.168.10.10」～「192.168.10.19」に限定する。(フィルタ番号 0、1 に登録)

```
filter 0 pass out 192.168.10.10 - 192.168.10.19 * * * * ppp1
filter 1 reject out * * * * * ppp1
```

上例では、まず pass で通過させるパケットを指定し、次の reject フィルタでそれ以外のパケットを止めます。

● 送信先を制限する

LAN 上のコンピュータから、特定の接続先に向けたパケットだけを通過させる、あるいは特定の接続先に向けたパケットだけを禁止することができます。

IP アドレスだけでなく、ポート番号やパケットの種類も細かく指定できます。

例: 送信先コンピュータを「192.168.30.10」～「192.168.30.19」に限定する。

```
filter 0 pass out * 192.168.10.10 - 192.168.10.19 * * * * ppp1
filter 1 reject out * * * * * ppp1
```

● 接続に使用するパケットを制限する

フィルタの設定を一切おこなわないと、リモート WAN に向けたどんな種類の TCP/IP パケットも流れます。これは異常課金の原因にもなります。

例: メールによるパケットは許すが、他のアプリケーションのパケットは通さない。

```
filter 0 pass out * * * * 25 ppp1
filter 1 reject out * * * * * ppp1
```

● アプリケーションを制限する

ポート番号にフィルタをセットすることによって、本装置を通過するアプリケーションを制限することができます。たとえば、Telnet と ftp は通すが、WWW は通さないといった設定ができます。

例: IP アドレス「192.168.10.1」の機器に対して、WWW(ポート番号 80)によるアクセスを禁止するとき。

```
filter 0 reject in * 192.168.10.1/32 tcp * 80 ppp1
```

注) 単一の IP アドレスを指定する場合は、IP アドレスのマスクを 32 に設定して下さい。

5.4 DHCP サーバ機能

本装置は小規模(クライアント 128 台以下)の単一セグメントの LAN で用いる RFC2131 準拠の DHCP サーバに対応しています。本装置を DHCP サーバとして設定しておく、DHCP として設定された Windows パソコンなどのクライアントに IP アドレス、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイなどを自動的に設定できます。これによってクライアント側の設定が不要になり、ネットワーク関連の設定の間違いも防止できます。

本装置の DHCP サーバでは以下の設定情報を提供できます。

- ・IP アドレス
- ・サブネットマスク
- ・デフォルトゲートウェイアドレス
- ・プライマリ DNS サーバ
- ・セカンダリ DNS サーバ
- ・WINS サーバ
- ・DNS ドメイン名

また、128 台までのクライアントに固定の IP アドレスを割り当てることもできます。

5.4.1 設定手順

本装置を DHCP サーバとして設定するための手順は次のとおりです。

- (1) トップメニューから 1) General → 4) DHCP Server を選択すると、以下の DHCP 設定メニューが表示されます。

```

DHCP server configuration
1) DHCP Server - Inactive
2) Subnet Mask - 000.000.000.000
3) Gateway IP Address - 000.000.000.000
4) Primary DNS server - 000.000.000.000
5) Secondary DNS server - 000.000.000.000
6) WINS server - 000.000.000.000
7) Domain Name -
8) Lease Time (hours) - 24
9) Start Address of the IP address pool - 000.000.000.000
10) Number of Addresses in the IP address pool - 0
11) Manually enter configuration parameters
Enter number
```

- (2) DHCP サーバの設定をおこないます。

設定項目の設定方法は次のとおりです。

2-1) DHCP Server

DHCP サーバ機能を有効にするか、無効にするかを指定します。このメニューを選ぶと以下の項目が表示されます。

- 1) DHCP Server - Inactivate
- 2) DHCP Server - Activate

有効にする場合は 2) DHCP Server -Activate を選択して下さい。

2-2) Subnet Mask

DHCP クライアントに割り振る IP アドレスのサブネットマスクを指定します。

例) Enter Subnet mask 255.255.255.0

2-3) Gateway IP Address

DHCP クライアントに設定するデフォルトゲートウェイの IP アドレスを指定します。

例) Enter Gateway IP Address 192.168.254.10

2-4) Primary DNS server

DHCP クライアントに設定するプライマリ DNS サーバの IP アドレスを指定します。

例) Enter Primary DNS Server Address 203.140.129.3

2-5) Secondary DNS server

DHCP クライアントに設定するセカンダリ DNS サーバの IP アドレスを指定します。

例) Enter Secondary DNS Server Address 203.140.129.5

2-6) WINS server

DHCP クライアントに設定する WINS サーバの IP アドレスを指定します。

例) Enter WINS Server Address 192.168.254.5

2-7) Domain Name

DHCP クライアントに設定する DNS ドメイン名を指定します。

例) Enter domain name (32 chars max) centurysys.co.jp

2-8) Lease Time (hours)

割り振った IP アドレスの使用を許す時間を時間(hour)単位で指定します。ここで設定された時間が経過すると、その IP アドレスは解放され、次の割り振りに使用される可能性があります(実際に解放されるか再取得されるかは使用する DHCP クライアントによります)。なお、0 を指定すると解放しません。

例) Enter the lease time in hours 12

2-9) Start Address of the IP address pool

割り振る IP アドレスの開始アドレスを指定します。このアドレスから 10)の項目で指定する数だけ IP アドレスが確保されます。

例) Enter the starting address of the IP pool 192.168.254.70

2-10) Number of Addresses in the IP address pool

割り振る IP アドレスの数を指定します。9)の項目で指定した IP アドレスからこの数だけ IP アドレスが確保されます。

例) Enter the number of addresses in the IP pool 30

以上、2-1)から 2-10)までの設定ができると次のように表示されます。

```

DHCP server configuration
1) DHCP Server - Active
2) Subnet Mask - 255.255.255.000
3) Gateway IP Address - 192.168.254.010
4) Primary DNS server - 203.140.129.003
5) Secondary DNS server - 203.140.129.005
6) WINS server - 192.168.254.005
7) Domain Name - centurysys.co.jp
8) Lease Time (hours) - 12
9) Start Address of the IP address pool - 192.168.254.070
10) Number of Addresses in the IP address pool - 30
11) Manually enter configuration parameters
Enter number

```

DHCP で割り振る IP アドレスとコンピュータの組を固定したい場合は、次の設定をおこないます(オプション)。

2-11)Manually enter configuration parameters

```

1) Entry      1- 16
2) Entry      17- 32
              中略)
7) Entry      97- 112
8) Entry      113- 128
Enter number  1↵ ..... 1～16 のグループを選択

```

ここでは 128 台分のクライアントの設定が可能です。表示のために 16 台ずつにグループ化されています。どこに設定してもかまいませんが、設定した場所を間違えないよう順番に使用することをお勧めします。

```

DHCP entry
1) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
2) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
3) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
              中略)
12) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
13) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
14) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
15) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
16) 00:00:00:00:00:00 000.000.000.000
Enter number

```

この表示の1行が1つの DHCP エントリです。設定していないところは“0”が表示されています。登録するエントリ番号を指定して設定をおこなって下さい。各エントリには次の項目があります。

```

1) Mac Address 00:00:00:00:00:00
2) Assigned IP address - 000.000.000.000
3) Delete this entry
Enter number

```

それぞれ次の意味を持ちます。

1) Mac Address

クライアントの MAC アドレス (Ethernet Address) を指定します。16 進数で1バイトごとにスペースで区切って指定して下さい。

2) Assigned IP address

指定した MAC アドレスに割り当てる IP アドレスを指定します。ここで割り当てるアドレスは 9) Start Address of the IP address pool と 10) Number of Addresses in the IP address pool で指定した範囲以外のアドレスを割り当ててください。

3) Delete this entry

このエントリを削除する際に使用します。

(3) トップメニューに戻って設定を保存して下さい。

```

General configuration
1) Password
2) Ethernet Physical I/F
3) TCP/IP
4) DHCP Server(option)
5) SYSLOG LOG message settings(option)
6) Start up(option)
Enter number 1 ..... トップメニューに戻る
Ethernet address : 00806D3B0003
1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 6 .....
1) Quit
2) Save configuration & Restart
Enter number 2 ..... 保存と再起動を選択
Please Wait

Set up complete !

```

5.4.2 DHCP クライアントの設定について

本装置を使用しているセグメント上の Windows95/98/XP のマシンでは、TCP/IP の設定で「IP アドレスを自動的に取得する」を、WindowsNT のマシンでは TCP/IP 設定の「IP アドレス」タブで「DHCP サーバから IP アドレスを取得する」を選択すると、DHCP クライアントになります。DHCP クライアントシステム起動時に DHCP サーバである本装置から IP アドレスなどの設定情報を受け取ります。

DHCP サーバによって割り当てられた IP アドレスは Lease Time で指定された時間の間使用されます。

5.5 通信履歴のロギング機能

AS-150/X-II は、直近の通信履歴のログデータ(日時+アンテナ強度+メッセージ)を最大で 300 件まで本装置内部に格納します。ログデータは AS-150/X-II の電源オフによって消滅しますが、システムの (TELNET メニューやコマンドによる) リスタートや、ファームウェアのバージョンアップを実行してもログデータは消滅しません。

ログデータは Telnet の「show log」コマンドによって以下のように表示されます。

```

1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 5

> show log
1 1900/01/01 00:00:00 (3) [NORMAL]CIPL Access Server AS-150/X-II system up.
2 1900/01/01 00:00:00 (3) [NORMAL]AS-150/X-II is INITIAL state.
3 1900/01/01 00:00:00 (2) [NORMAL]AS-150/X-II is NULL state.
>

```

} ログデータ

↓ 発生日時 ↓ 電波強度 ↓ ログ種別 ↓ メッセージ

(1) 発生日時

事象が発生した日時です。

(2) 電波強度

メッセージ発生時点の電波強度を以下の数値で表しています。

- (3) : 普通
- (2) : やや弱い
- (1) : 弱い
- (0) : 非常に弱い
- (-1) : 圏外

(3) ログ種別

メッセージの始めに下記のログ種別を表示します。

- [NORMAL] : 動作ログ
- [WARNING] : 警告ログ
- [ERROR] : エラーログ

(4) メッセージ一覧

通信履歴として格納されるログデータのメッセージとその意味は下表のとおりです。

項番	ログメッセージ	意味
1	[NORMAL] CIPL Access Server AS-150/X-II system up.	AS-150/X-II が電源投入またはリスタートし、正常に起動した。
2	[ERROR] WM-M200 Power ON sequence failed.	AS-150/X-II が通信モジュールのパワーオンシーケンスを実行したが、パワーオンに失敗した。
3	[ERROR] WM-M200 Hardware Reset sequence failed.	AS-150/X-II が通信モジュールのハードウェアリセットシーケンスを実行したが、リセットに失敗した。

4	[NORMAL] AS-150/X is INITIAL state.	AS-150/X-II が INITIAL ステートに達した。
5	[ERROR] INITIAL state : WM-M200 does not respond to AT command.	AS-150/X-II と通信モジュールの同期がとれている状態で、通信モジュールから応答を返らなかった。この場合、AS-150/X-II はリスタートする。
6	[ERROR] INITIAL state : Timeout (5 minutes)	INITIAL ステートが 5 分以上継続したので、リスタートする。
7	[NORMAL] AS-150/X is NULL state.	NULL ステート(待ち受け状態)に移行した。
8	[NORMAL] About to dialout to<ドメイン名>	IP 層から発信要求が来たので発信した。
9	[NORMAL] Dialout successfully finished.	発信に成功した。
10	[NORMAL] Dialout Failed. : NO CARRIER	発信に失敗した。(NO CARRIER 応答) アンテナが抜けている場合や、通信速度設定が契約内容と異なる場合もこのエラーとなる。(「3.3 パケット通信速度の選択」参照)
11	[ERROR] Dialout Failed. : 60 sec.TIMEOUT	発信に失敗した。(60 秒間応答なし)
12	[ERROR] WM-M200 : DSR = high and CTS = high	通信モジュールに異常を検出したので、INITIAL ステートに戻って初期化をやり直す。
13	[NORMAL] SMS received from <ドメイン名>	着信を受けた。
14	[NORMAL] About to callback to <ドメイン名>	着信に対してコールバックを行う。
15	[NORMAL] Callback successfully finished.	コールバックに成功した。
16	[NORMAL] Callback failed. : NO CARRIER	コールバックに失敗した。(NO CARRIER 応答)
17	[ERROR] Callback failed. : 60 sec. TIMEOUT	コールバックに失敗した。(60 秒間応答なし)
18	[NORMAL] PPP link established. IP address = <CIPL インタフェースの IP アドレス>	PPP リンクが確立した。CIPL インタフェースの IP アドレスは、IPCP によって取得したもので、カスタマーコントロールでモジュールごとに登録したものが払い出される。
19	[NORMAL] Dormant state : RI = low	ドーマント状態で、モジュールが RS-232 の 9 ピン low を出力。
20	[NORMAL] Dormant state : SMS received from <ドメイン名>	ドーマント状態で、SMS 着信。
21	[WARNING] Dormant state : SMS domain <ドメイン名> is not configured.	SMS データのドメイン名が AS-150/X-II に設定されていない。
22	[ERROR] Dormant state : failed to read/delete SMS.	SMS データの読み出し/削除に失敗した。
23	[NORMAL] PPP link : Inactivity Timeout occurred.	PPP link でインアクティビティタイムアウトが発生したので、AS-150/X-II は PPP リンクを切断する。
24	[NORMAL] PPP link disconnected. : CD = high (physical layer down)	PPP リンクが切断された。モジュールが出力する CD 信号は high。
25	[NORMAL] PPP link disconnected : DTR = high	PPP リンクが切断された。AS-150/X-II は DTR 信号 high を出力する。
26	[NORMAL] AS-150/X is TIME-WAIT state.	PPP リンク切断後の時間待ちに移行した。

27	[NORMAL] TCP downloader : Firmware Downloaded.	ファームウェアがダウンロードされ、AS-150/X-II はリスタートする。
28	[NORMAL] TELNET : Configuration was saved. Now restarting...	TELNET の設定データが保存され、リスタートする。
29	[NORMAL] Out Of Service T.O	圏外状態が設定した時間経過した。
30	[WARNING] WM-M200 : software reset	通信モジュールをソフトウェアリセットする。
31	[NORMAL] Out Of Service T.O : 3 times continuation	項番 29 の圏外タイムアウトが3回連続で発生し、その間一度も圏内にならなかった。
32	[NORMAL] AS-150/X AUTO REBOOT	定時リブートした。
33	[ERROR] WM-M200 : PS_HOLD = low	通信モジュールがパワーオフ状態になった。
34	[ERROR] UART1 TimeOut.	通信モジュール(UART1)から応答が得られなかった。
35	[ERROR] WM-M200 Software Reset failed.	WM-M200 モジュールをソフトウェアリセットしようとしたが、失敗した。
36	[ERROR] UART2 TimeOut.	通信モジュール(UART2)から応答が得られなかった。
37	[WARNING] NO CARRIER : 8 times continuation	NO CARRIER を8回連続で検出した。(その間一度も接続できない)
38	[WARNING] TCP downloader : Firmware Download failed.	ファームウェアダウンロードに失敗した。
39	[NORMAL] Out Of Service T.O-Disconnect	通信中に圏外が3分連続で切断した。
40	[ERROR] Initial state : AT+IPR NG, retry.	ボーレートの設定に失敗。
41	[NORMAL] Execute Dummy ATD.	定期発信を実施。
42	[NORMAL] Dummy ATD failed. : NO CARRIER	定期発信を行ったが、NO CARRIER が返ってきた。
43	[NORMAL] Dummy ATD successfully finished.	定期発信し、接続した。
44	[NORMAL] RING	着信を受けた。
45	[ERROR] Dialout failed. : ERROR	発信時、ATD に対して ERROR が返された。
46	[ERROR] Callback failed. : ERROR	着信時、ATD に対して ERROR が返された。
47	[ERROR] Dummy ATD failed. : ERROR	ダミーATD に対して ERROR が返された。
48	[WARNING] Ignore ATD request : OTASP not yet executed.	IP 層 / アプリケーション層から発信要求があったが、通信モジュールが顧客未登録状態のため、ダイヤルアウト発信をしなかった。
49	[NORMAL] DI0 status change (OFF→ON) detected.	接点 0 が OFF から ON に変化したことを検出した。
50	[NORMAL] DI1 status change (OFF→ON) detected.	接点 1 が OFF から ON に変化したことを検出した。
51	[NORMAL] DI0 status cleared	接点 0 の状態をクリアした。
52	[NORMAL] DI1 status cleared	接点 1 の状態をクリアした。
53	[NORMAL] About to send mail	メール送信を開始する。
54	[ERROR] failed to establish TCP connection with SMTP server.	SMTP サーバとの TCP コネクションを確立できなかった。

55	[ERROR] SMTP send/receive error occurred.	SMTP サーバとのデータ通信において、送信タイムアウトまたは受信タイムアウトが発生した。
56	[ERROR] SMTP command error occurred (SMTP 応答コード)	SMTP コマンドエラーが発生した。
57	[ERROR] SMTP AUTH error occurred. (SMTP 応答コード)	SMTP 認証されなかった。
58	[ERROR] failed to establish TCP connection with POP server.	POP サーバとの TCP コネクションを確立できなかった。
59	[ERROR] POP send/receive error occurred.	POP サーバとのデータ通信において、送信タイムアウトまたは受信タイムアウトが発生した。
60	[ERROR] POP command error occurred.	POP コマンドエラーが発生した。
61	[ERROR] POP AUTH error occurred	POP 認証されなかった。
62	[ERROR] Specified AUTH method is not utilized.	指定接続認証利用不可。
63	[NORMAL] send mail successfully finished.	メール送信は成功した。
64	[NORMAL] detect EMG RI	緊急地震速報 RI 信号を検出した。
65	[NORMAL] clear EMG RI	緊急地震速報 RI 信号をクリアした。
66	[NORMAL] EMG SMS : (3 文字)(12 文字) received.	緊急地震速報 SMS を受信した。長さは(3 文字)、日時は(12 文字)である。
67	[ERROR] This SMS is discarded because too old.	受信した SMS の日付が1日以上古かったので破棄した。

5.6 SYSLOG によるログ情報の転送

本装置はログ情報を外部の Syslog サーバに転送する機能を備えています。ログ転送機能では以下のカテゴリの情報を選択して転送できます。

- 認証

本装置自身へのログインの成否、本装置を経由したりリモートアクセスでのログインの成否といった認証に関するログ情報です。ログインに関するセキュリティ監視に有効です。
- システム

本装置の設定の変更、起動／再起動、エラーメッセージなど運用に関連したログ情報です。このカテゴリのメッセージは本装置の運用の監視に有効です。
- RS-232

通信モジュールとの送受信に関するログ情報です。通信モジュールとの動作内容の診断に有効です。
- PPP

PPP の動作状況に関するログ情報です。PPP の動作内容の診断に有効です。

SYSLOG 転送機能は、上記のログメッセージを UNIX の syslog 形式でホストコンピュータに送信する機能です。この機能を利用するには、syslogd(SYSLOG デーモン)が動作しているホストコンピュータが必要です。

5.6.1 AS-150/X- II 側の設定

SYSLOG ログ転送機能を利用するには、Telnet による初期設定が必要です。Telnet では初期設定のトップメニューから 1) General - 5) SYSLOG LOG message settings を選択し、設定をおこなって下さい。

```

General configuration
1) Password
2) Ethernet Physical I/F
3) TCP/IP
4) DHCP Server(option)
5) SYSLOG LOG message settings(option)
6) Start up(option)
Enter number 5
1) Syslog Server IP Address      000.000.000.000
2) Syslog UDP Port                514
3) Log authorization messages    NO
4) Log system messages           NO
5) Log RS232C messages          NO
6) Log PPP messages              NO
Enter number

```

各項目の内容は次の通りです。

- 1) Syslog Server IP Address

syslog サーバの IP アドレスを設定して下さい。

- 2) Syslog UDP Port
syslog サーバの UDP ポート番号を設定して下さい。
通常は工場出荷値(514)のままかまいません。
- 3) Log authorization messages
認証の成功・失敗を記録するかどうかを設定して下さい。セキュリティの管理の目的で利用できません。
- 4) Log system messages
本装置の起動、設定変更、再起動、エラーなどを記録するかどうかを設定して下さい。本装置の運用状況の監視の目的で利用できます。
- 5) Log RS232 messages
通信モジュールとの通信動作のログを取るかどうかを設定して下さい。通信状況を診断するのに有効です。
- 6) Log PPP messages
本装置の PPP 動作のログを取るかどうかを設定して下さい。PPP の動作状態を診断するのに有効です。

5.6.2 ホストコンピュータ側の設定

syslog 機能はほとんどの UNIX では標準で使用できます。Windows の場合はフリーソフトやシェアウェアで利用できるものがあります。

syslog の詳しい使用方法については、UNIX のマニュアル・ページ(`man syslog.conf`) や、参考書等を参照して下さい。

5.7 ステータス表示

トップメニューから 4) Status を選択すると、ステータスメニューが表示されます。

```

1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 4↵

System Up Time 00 day(s) 00:27:49

1) UART1 Status
2) UART2 Status
3) PPP Status
4) Ethernet Status
5) Network Error Log
6) ICMP Log
7) NAT Error Log
8) IP Route Table
9) ARP Table
10) RS-232C Status
11) System Error Log
12) System Error Log Clear
13) Log Clear
Enter number

```

} ステータスメニューの表示

System Up Time は、本装置が立ち上がったからの経過時間を表します。49 日まで計測できます。49 日を越えると、0 日に戻ります。ステータスメニューでは、次の各ステータスを見ることができます。

1) UART1 Status

2) UART2 Status

両ステータス情報は、通信モジュールとのデータ送受信状態を表します。障害発生時に弊社サポートで障害解析時の参考とします。

3) PPP Status は、PPP 通信に関する情報です。

上記 1)、2)、3)共に、障害発生時に弊社サポートで障害解析時の参考とします。

4) Ethernet Status

Ethernet Status として、イーサネットリンク状態、通信スピードおよび Duplex mode が表示されます。

```

Link      : UP(リンク確立) / DOWN(リンク切断)
Speed    : 100Mbps / 10Mbps
Duplex   : FULL(全二重) / HALF(半二重)

```

Ethernet receive error 及び Ethernet send error は、AS-150/X-II の Ethernet Controller チップがパケット送受信時にカウントするエラー(OSI の 7 階層モデルでいうデータリンク層で検出されるエラー)です。

- Frame Length Violation、Nonoctet Aligned Frame、Short Frame、CRC Error は受信した Ethernet パケットのヘッダ情報と実際のデータが異なること(=パケットが壊れていること)を示します。
- Overrun はコントローラチップのバッファがいっぱいになり、処理される前に次のパケットが到着した回数を示します。
- Collision はデータリンク層で検出されたパケットの衝突回数を示すもので、ネットワークが混んでいる場合にカウントアップされます。いずれのデータリンクレベルのエラーも Ethernet Controller チップ内の誤り制御機能によって処理されるため、このレベルでのエラーが直接データ抜けなどに繋がることはありません。

これらのカテゴリのエラーが高い値を示すときは AS-150/X-II の LAN 側インタフェースの故障や、

LAN 回線、ハブ、LAN ケーブルなどのネットワーク機器の不具合の可能性も考えられます。ただし、IP や TCP/UDP のレベルでエラーがカウントされていなければとくに対策を施す必要はありません。

5) Network Error Log

IP、TCP、UDP で発生したエラーの数を表示します。

- IP は IP 層でカウントされるエラーです。IP 層のヘッダやパケットの組み立てに関するエラーです。
- TCP は TCP のレベルでカウントされるエラーです。再送やチェックサムエラーの原因は過剰なトラフィックなどによって発生することがありますが、これはアプリケーション上は問題ありません。ただし、これも数が多いと TCP よりさらに上位のアプリケーションのレベルでタイムアウトが発生する可能性があります。LAN 内のトラフィックとの相関、IP 層やデータリンク層のエラー発生数との相関を見てどこに問題があるかを切り分けます。
- UDP は UDP のレベルでカウントされるエラーです。UDP レベルでバッファオーバーフローやチェックサムエラーが起こるとそのデータグラムは捨てられることとなります。アプリケーションで再送がおこなわれれば問題はありますが、そうでない場合はデータ抜けが発生します。LAN 内のトラフィックとの相関、IP 層やデータリンク層のエラー発生数との相関を見てどこに問題があるかを切り分けます。

6) ICMP Log

ICMP パケットの送受信履歴を表示します。ICMP Receive と ICMP Send は ICMP(Internet Control Message Protocol)を使って収集されるステータス情報です。

7) NAT Error Log

IP フレーム送受信処理中にエラーを検出した場合、破棄したパケット数を表示します。

8) IP Route Table

IP ルートテーブルを表示します。

【ルートテーブルの表示例】

Codes: C - connected, P - PPP, S - Static, D - Default route, I - ICMP					
Code	Destination	Metric	Next Hop	TTL	Interface
C	192.009.200.000/24	0	000.000.000.000	0	Ethernet
S	000.000.000.000/0	1	192.168.101.001	0	Ethernet
C	192.009.201.186/32	0	000.000.000.000	0	Port 1

経路の特性を表します表示の意味は次のとおりです。

Code C : Connected (直接接続)
 P : PPP による経路
 S : スタティックルート
 I : ICMP Redirect により更新された経路

Destination

経路終点のネットワークアドレス(またはホストアドレス)およびサブネットマスクのビット数を表示します。000.000.000.000/0 はデフォルトゲートウェイです。

Metric

経路終点に到達するまでに経由するルータの数です。

Next Hop

Destination に到達するためのゲートウェイ(ルータ)のアドレスです。本機に直接つながっている場合は、“0.0.0.0”と表示されます。

TTL(Time To Live)

この経路の有効時間です(単位:秒)。RIP による経路情報は少なくとも 180 秒間はルートテーブルに保存されますが、それ以上経過しても更新されなかった経路は異常と判断され、ルートテーブルから削除されます。

Interface

この経路で使用されるインタフェース名です。

9) ARP Table

現在の ARP テーブルの内容を表示します。

IP address	Ethernet address
192.168.120.005	0080adba2717
192.168.120.120	000cf1c6dc7d
192.168.120.105	000d871241d1

10) RS-232C Status

RS-232 インタフェースに関するステータスです。

Framing error、Overrun error、Parity error、Noise error の各カウンタは、そのどれかが大きな値に増えている場合は以下の可能性があります。

- ・通信速度、パリティ、フロー制御などの通信条件の設定が通信相手の機器と一致していない
- ・ケーブル上のノイズ、コネクタの接触不良、インタフェースの故障、電源電圧の不安定など

また Buffer overflow は、RS-232 インタフェースの受信バッファがオーバーフローしたときにカウントアップされるもので、RS-232 通信相手とのフロー制御が必要か、もしくは正しくフロー制御が行われていない可能性があります。

11) System Error Log

本装置で万一、システムエラーが発生すると赤色 [COM] と緑色 [RUN] の両 LED が同期して点滅する状態になり、数秒後に再起動が起こります(*)。発生したシステムエラーの内容は(タイムスタンプ付きで)装置の不揮発メモリに、上書きで1件記録されます。本メニューによりその記録された内容が表示されます。システムエラーが発生していない場合は、“System error message is not logged” と表示されます。また Watchdog リセットが発生した回数が “Number of watchdog resets” で示されます。

(*)Watchdog リセットを有効にしていない場合は再起動は起こらず、両 LED が点滅したまま停止状態です。本装置の電源を OFF/ON しない限り復旧しません。

システムエラーは AS-150/X-II の内部の以下のような事象で発生します。

- ・メモリーエラー
- ・メモリー領域不足
- ・スタックオーバーフロー
- ・Null ポインタ参照
- ・不正なパラメータ
- ・その他の予期しないエラー

このような状態が発生する原因としては次の可能性が考えられます。

- ・1. ハードウェアの不具合
- ・2. 電源の瞬断、一時的な電圧低下、ノイズなどによる外部要因による誤動作
- ・3. ファームウェアの不具合

このうちどれが原因かはエラー状態の発生状況および、再現性の有無によって判断します。

システムエラーログに記録されたメッセージは本装置の電源を OFF/ON しても消去されません。別のシステムエラーが発生するとメッセージは上書きされ、また装置を工場出荷時の状態に初期化すると消去されます。

12) System Error Log Clear

上記システムエラーログとして記録されたメッセージを消去します。

13) Log Clear

ステータスログ、エラー回数をゼロに戻します。ただし、システムエラーログは消去しません。

5.8 ファームウェアのバージョンアップ

本装置は書換え可能なフラッシュメモリを搭載しており、フラッシュメモリにファームウェアを格納しています。ファームウェアのバージョンアップは、Windows パソコンを使って、LAN 側からでも、CIPL/CRG 網側からでも行うことができます。ただし、NAT 変換を行っている場合は、AS-150/X-II の NAT コンフィグレーションテーブルに、CIPL/CRG 網側から受信した宛先 TCP ポート 2222 番の IP パケットを、ポートフォワードするエントリーを追加する必要があります。詳細は、「4.2.2 NAT コンフィグレーション・テーブルの設定例」の例 5 を参照してください。

ファームウェアのバージョンアップを行っても本装置に設定した値は失われません。

バージョンアップを行う Windows パソコンには、本装置付属の Windows ユーティリティ「TCP ダウンローダ」をインストールします。

① TCP ダウンローダのインストール

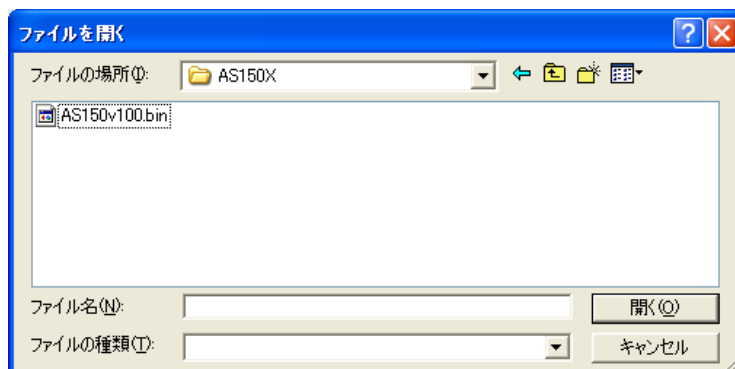
バージョンアップを行う Windows パソコンには、製品に添付の CD-ROM から TCP ダウンローダ (tcpdwl.exe) をコピーして下さい。tcpdwl.exe をダブルクリックすると、TCP ダウンローダを起動します。

起動すると次の画面が開きます。



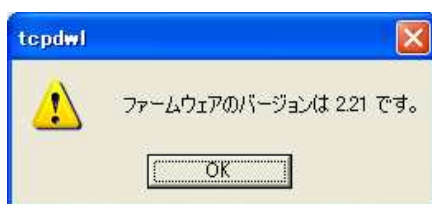
この画面の「ホスト名または IP アドレス」の欄に、本装置の IP アドレスを入力して下さい。CIPL/CRG 網側からファームウェアを更新する場合は、WAN 側の IP アドレスでなければなりません。hosts ファイルに本装置のホスト名を登録している場合はホスト名を指定することもできます。ポート番号の値は変更しないで下さい。

- ② IP アドレスの指定ができれば、[ダウンロード開始]ボタンをクリックします。

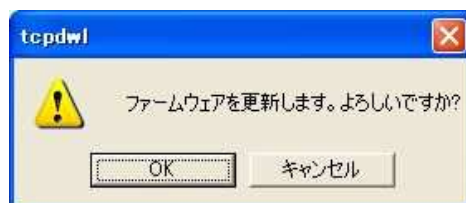


ここで入手した新ファームウェアファイルを指定して下さい。

- ③ ファームウェアファイルを選択し、[開く]ボタンをクリックして下さい。
これからダウンロードするファームウェアのバージョン番号が表示されます。
[OK]ボタンをクリックしてください。



- ④ 「ファームウェアを更新します。よろしいですか?」と表示されますので、良ければ[OK]ボタンをクリックしてください。



- ⑤ [OK]ボタンをクリックすると、ダウンロードを開始します。
進行状況がウィンドウに表示されます。



- ⑥ 上のダイアログが出ればダウンロード成功です。

Memo
メモ

【ファームウェアバージョンの確認】

AS-150/X-II の ファームウェアのバージョン は、Telnet で本装置に接続したとき以下のように最初の行に表示されます。

```
# FutureNet AS-150/X-II Version: 1.00 #  
?
```

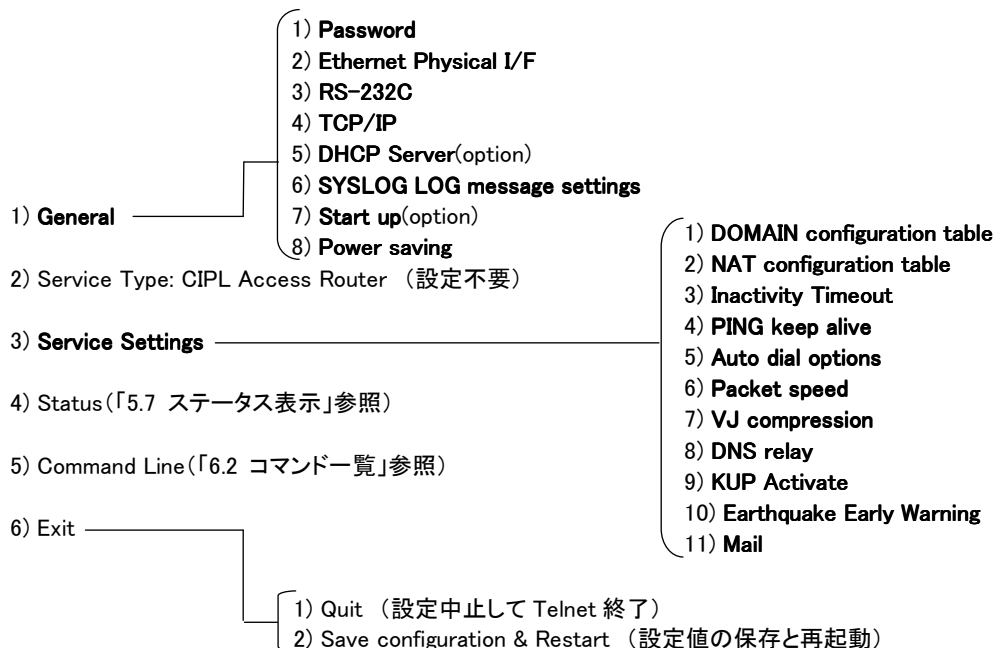
第 6 章

設定項目

AS-150/X-II の Telnet メニューに表示される設定項目、及びそのコマンドラインで使用できるコマンドを説明しています。

6.1 Telnet メニューの設定項目

Telnet メニューから項目を選択して設定する場合は 1)General と 3)Service Settings メニューから行います。各メニューの説明表中の「設定コマンド」の欄は対応する設定コマンドです。



■ General メニュー

(1-1) Password

メニュー表示	説明	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Password	Telnet ログインのためのパスワード	半角英数記号 0~15 文字	system	main

(1-2) Ethernet Physical I/F

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Auto-negotiation	オートネゴシエーション／固定モードの選択	Enable/Disable	Enable	ethernetif
Speed	固定モード時のイーサネット速度指定	10Mbps/100Mbps	100Mbps	
Duplex mode	固定モード時の全二重／半二重選択	Half Duplex/Full Duplex	Full Duplex	

(1-3) RS-232C

RS-232 通信条件、及び RS-232 ポートサーバとしての設定を行います。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Baud Rate	転送速度の選択 (bps)	2400/4800/9600/19200/38400 /57600/115200/230400/460800	230400	rsport 1
Flow Control	フロー制御の選択	・ None(なし) ・ RTS/CTS ・ XON/XOFF ・ Both(rts/cts と xon/xoff 両方)	None	
Data bits	データ長ビット数の選択	7/8	8	
Stop bit	ストップビットの選択	1/1.5/2	1	

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Parity bit	パリティビットの選択	None(なし)/Odd(奇数)/Even(偶数)	None(なし)	
Maximum Idle Characters	RS-232 入力に空白時間が生じると貯まった受信データをパケット化する。空白時間を受信文字数で設定。	0~65535 0 のときのとき空白時間によるパケット生成はしない	4	
XON Character	XON コードの設定	00~FF(16 進数)	11(16 進数)	
XOFF Character	XOFF コードの設定	00~FF(16 進数)	13(16 進数)	
DTR ON timing	DTR 信号の動作を選択	<ul style="list-style-type: none"> Power on(電源投入でオン) TCP session Establishment (TCP 接続でオン、切断でオフ) Earthquake (緊急地震速報送信時オン) 	Power on	
RTS ON timing	RTS 信号の動作を選択	<ul style="list-style-type: none"> Power on(電源投入でオンし、以後フロー制御に従う) TCP session Establishment(TCP 接続でオンし、切断でオフする。接続中はフロー制御に従う) 	TCP session Establishment	
TCP port	コネクション待ち受け TCP ポート番号	2300~65535	33337	
Inactivity Timer Value	無通信 TCP 切断タイマ。一定時間無通信継続で切断	0~99999999(秒) 0 は TCP 切断しない	0	
Forced timer	強制 TCP 切断タイマ。TCP 接続後一定時間で無条件切断	0~99999999(秒) 0 は TCP 切断しない	0	

(1-4) TCP/IP

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Ether I/F IP address	本装置の IP アドレスとサブネットマスクビット数	IP アドレスとビット数を/で区切って設定する。***./1~30 の形式	192.168.254.254/24	
Default route	LAN 側のデフォルトルータの IP アドレス	***.*** の形式	0.0.0.0	main
DNS server address	DNS サーバのアドレス	***.*** の形式	0.0.0.0	
Static Route		※1) 参照		
IP Packet Filter		※2) 参照		filter

※1) Static Route

スタティックルートは、イーサネット側に対する固定ルート設定です。LAN 上に他のルータがない場合は設定の必要はありません。複数のネットワークが相互に接続されている環境で、それぞれのネットワーク宛でのパケットを、指定したルータに送信するために使用します。インターネット接続の場合は、スタティックルートを個別 LAN セグメントに対して設定してください。

本装置では 30 までのスタティックルートを登録できます。Telnet メニューのルート 1~30 が、「route」コマンドのテーブル番号 0~29 に対応します。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値
Destination	宛先ネットワークのネットワーク番号	***.*** の形式	0.0.0.0
Subnet mask	宛先ネットワークのネットマスク値	***.*** の形式	0.0.0.0
Next router	経由するルータの IP アドレス	***.*** の形式	0.0.0.0
Metric	接続先までのホップ数	0~15	0

※2) IP Packet Filter

エントリ番号 1~32 を指定してフィルタを設定します。エントリ番号 1~32 は、「filter」コマンドのフィルタ番号 0~31 に対応します。詳細は「5.3 パケットフィルタ機能」を参照してください。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値
type	フィルタの種類	・pass(通過) ・reject(破棄)	無登録
dir	送受信の方向	・in(受信フィルタ) ・out(送信フィルタ)	in
source IP address	送信元 IP アドレス	・すべてを対象 → * と書く ・単独指定する → 例)192.10.3.5/32 ・範囲指定する → 例)192.10.3.5-92.10.3.254	*
destination IP address	送信先 IP アドレス	・すべてを対象 → * と書く ・単独指定する → 例)192.10.3.5/32 ・範囲指定する → 例)192.10.3.5-192.10.3.254	*
protocol	プロトコルをニーモニック選択またはプロトコル番号で指定する	・udp/tcp/tcpest/tcpfin/icmp ・プロトコル番号(1~255) ・すべては、* と書く	*
source port	送信元ポート番号	・すべてを対象 → * と書く ・単独指定する → 例)30000 ・範囲指定する → 例)30000-40000	*
destination port	送信先ポート番号	・すべてを対象 → * と書く ・単独指定する → 例)40000 ・範囲指定する → 例)40000-50000	*
interface	接続インターフェース	ppp1 固定です	ppp1

(1-5) DHCP server

詳細は「5.4 DHCP サーバ機能」を参照してください。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
DHCP server	DHCP サーバの有効無効	Inactive/Active	Inactive	dhcp
Subnet mask	DHCP クライアントに割り振るサブネットマスク	**** の形式	0.0.0.0	
Gateway IP address	DHCP クライアントに割り振るデフォルトゲートウェイ IP アドレス	**** の形式	0.0.0.0	
Primary DNS server	DHCP クライアントに割り振るプライマリ DNS サーバの IP アドレス	**** の形式	0.0.0.0	
Secondary DNS server	DHCP クライアントに割り振るセカンダリ DNS サーバの IP アドレス	**** の形式	0.0.0.0	
WINS sever	DHCP クライアントに割り振る WINS サーバの IP アドレス	**** の形式	0.0.0.0	
Domain name	DHCP クライアントに割り振る DNS ドメイン名	最大 31 文字	無登録	
Lease time(hours)	IP アドレスの使用許可時間 (単位:時間)	0 から 9999 0 は時間無制限	24	
Start address of the IP address pool	割り振る IP アドレスの開始アドレス	**** の形式	0.0.0.0	
Number of address in the IP address pool	割り振る IP アドレスの数	0~128	0	
Manually enter configuration Parameters (1-128)	MAC アドレス :IP アドレスを固定で割り振る対象を MAC アドレスで指定	16 進数 12 桁値 (":"で区切る)	00:00:00: 00:00:00	
	IP address: 固定で割り振る IP アドレス	**** の形式	0.0.0.0	

(1-6) SYSLOG

詳細は「5.6 SYSLOG によるログ情報の転送」を参照してください。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Server IP address	syslog サーバーの IP アドレス	***.*** の形式	0.0.0.0	syslog
UDP port	syslog サーバーの UDP ポート番号	1~65535	514	
Log authorization messages	認証に関するログの送信	No/Yes	No	
Log system messages	起動・設定変更・再起動等を記録するかどうか	No/Yes	No	
Log RS232C messages	通信モジュールの動作ログを記録するかどうか	No/Yes	No	
Log PPP messages	PPP に関するログの送信	No/Yes	No	

(1-7) Start up

設定項目の“Watchdog reset”は、本装置のファームウェアが正常に動作しているかどうかをハードウェアで監視し、正常に動作していないことを検出するとソフトウェアの再起動を行うものです。“Watchdog reset”に限り、変更は Save configuration & Restart を行わなくても、No/Yes 選択の時点で保存されますが、動作に反映されるのは次回電源投入後です。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Telnet inactivity timeout	Telnet セッションを自動的に切断するタイムアウト	60~99999999 (秒) 0 は切断なし	300	flag
Watchdog reset	WatchDog 監視を行うかどうかの選択	No/Yes	Yes	

(1-8) Power saving

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Power Saving	省電力機能の選択	on : アイドルタイム有効 off : アイドルタイム無効	on(有効)	powersaving
Idle Timer	PowerSaving(省電力)が on の時、アイドル状態を時間監視するタイム(秒)の設定。タイムアウトで待機状態に移行する。	30~99999999	60	
D10 poweron trigger	待機状態で、接点入力 0 が OFF から ON に変化したとき、待機状態から運用状態に移行するかどうかの選択	on: 運用状態に移行する off: 無処理	off	di
D11 poweron trigger	待機状態で、接点入力 1 が OFF から ON に変化したとき、待機状態から運用状態に移行するかどうかの選択	on: 運用状態に移行する off: 無処理	off	

■ Service Settings メニュー

(3-1) DOMAIN configuration table

ドメインを 5 つまで登録できます(「4.1.1 ドメイン管理情報」)。Telnet メニューの入力エントリ 1~5 が、「domain」コマンドのドメイン番号 0~4 に対応しています。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Domain name	ドメイン名	2~20 文字の半角数字「0~9」、半角英文字「a~z、A~Z」、ピリオド「.」、ハイフン「-」	空白	domain
User name	ユーザー名	1~65 文字の半角数字「0~9」、半角英文字「a~z、A~Z」 ユーザ名として「!auto」と記述すると、通信モジュールに登録されている電話番号がユーザ名として使われる。	空白	
Password	パスワード	1~32 文字の半角数字「0~9」、半角英文字「a~z、A~Z」 パスワードとして「!auto」と記述すると、通信モジュールに登録されている電話番号がパスワードとして使われる。	空白	

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Destination	宛先ネットワーク (アドレス/マスク)	0.0.0.0~254.254.254.254/0~32 0.0.0.0/0 の場合は外部ネットワーク宛先全てを対象とする	0.0.0.0/0	
Metric	メトリック	1~15	1	
Interface	NAT/GRE どちら を使うかの選択	・nat (Network Address Translation) ・gre (General Routing Encapsulation)	nat	interface

上表 Interface で gre を選択すると“Enter GRE tunneling target IP address”のメッセージが表示されて、GRE トンネリング終点 IP アドレスの入力を促されます。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
GRE tunneling target IP address	GRE トンネリング終点 IP アドレス	**** の形式	0.0.0.0	interface

(3-2) NAT configuration table

NAT コンフィグレーションテーブルは 1~48 を選んで設定できます。それぞれ「nat」コマンドのエントリ番号 0~47 に対応します。各エントリは以下の内容です。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Private IP address	プライベート IP アドレス	・単一アドレス指定 ・範囲指定 (0.0.0.1~254.254.254.254) ・すべてを対象” * ”	設定なし	nat
Protocol	プロトコル	・単一プロトコル番号 (1~254) ・プロトコル番号範囲指定 ・すべてを対象” * ”	すべてを対象 ” * ”	
Port	LAN 側の TCP/UDP ポート	・単一ポート番号 (1~65535) ・ポート番号範囲指定 ・すべてを対象” * ”	すべてを対象 ” * ”	
Global IP address	グローバル IP アドレス	設定不要	ipcp	
Port forward setting	WAN から LAN にアクセスする際ポート変換を行うか	No/Yes	No	
Access Port from WAN	上記が Yes の場合、WAN 側から LAN 側の機器にアクセスする際のアクセスポート番号	1~65535	設定なし	

(注)「4.2 NAT/NAPT 変換」参照

(3-3) Inactivity timeout

無通信 PPP 切断タイマの設定です。AS-150/X-II は、上りパケット (AS-150/X-II → センタ) の無通信状態を監視し、無通信時間が設定値を越えた場合、PPP リンクを解消し回線を切断します。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Inactivity timeout	無通信 PPP 切断タイマ値を 1 秒から秒単位で設定する。0 にすると PPP 切断は行わない。	0-99999999 0 は切断なし	30	rsport 0

(3-4) PING KeepAlive

CRG、CIPL 網接続を維持するため定期的に Ping (ICMP echo) を送信します。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Enable/Disable	Ping キープアライブ機能を使用するかどうか	Enable/Disable	Disable	pingkeepalive
Destination	Ping キープアライブパケットの宛先 IP アドレス	**** の形式	設定なし	
Timeout	IP パケットが一定時間流れないと、Ping キープアライブパケットを投げる。その秒数を指定する。	30~4294967	50	

(3-5) Auto dial options

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
Trigger packet forwarding	発信のトリガとなったパケットの扱いを指定。送信する場合、トリガとなったパケット、及び発信中に LAN から受信した最大 10 パケットをバッファリングする。発信成功後バッファリングしたパケットを送信する。“Dial retries”の回数を越えて PPP 接続に失敗した場合は廃棄する。	off(破棄する) on(送信する)	off	main
Dial retries	ダイヤル再試行回数(1 分間隔)	0~99999999	0	

(3-6) Packet speed

高速パケット通信の契約でない場合は、「低速パケット(low)」に設定変更が必要です。工場出荷値は「高速パケット(high)」の設定です。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
packet speed	契約内容に合わせて無線パケットデータ通信速度を選択する。	•low(上り 14.4kbps、下り 14.4kbps) •high(上り 64kbps、下り 144kbps)	high	packetspeed

(3-7) VJ compression

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
VJ compression	VJ 圧縮機能を使用するか否か	•Inactivate(使用しない) •Activate(使用する)	Activate	vjcompression

(3-8) DNS relay

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
DNS relay	DNS リレー機能を使用するか否か。	•Inactivate(使用しない) •Activate(使用する)	Inactivate	dnsrelay

(注)「4.5 インターネット接続と DNS リレー機能」参照

(3-9) KUP Activate

ケータイアップデート機能を ON(有効)、または OFF(無効)に設定します。通信モジュールのファームウェアバージョン番号が 1.X.X の場合、ON を選択しても “module version is 1.X.X.” を表示して設定は受け付けません。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
KUP Activate	ケータイアップデート機能を有効にするか否か	•on(有効) •off(無効)	off	kup

(3-10) Earthquake Early Warning

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	設定コマンド
EMG Activate	緊急地震速報を受信するか否か	•on(受信する) •off(受信しない)	off	emg
Signal hold time	緊急地震速報テキストを RS-232 ポートに送信後、何秒間 DTR 信号(または 9 ピン)のマーク状態を継続するかの設定	5~60	10	risignalholdtime

(3-11) Mail

● D10 および D11 mail settings

D10、D11 のそれぞれに対してメールの設定を行います。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	
Activate	メール送信を行うか否か	•on(メール送信する) •off(メール送信しない)	off	maildi
Mail Server Setting	Mail Server Setting 0 と 1 のどちらを用いるかの選択	•0(Mail Server Setting 0 を使う) •1(Mail Server Setting 1 を使う)	0	
Subject	メール件名	半角英数文字 1~63 文字	空白	

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	
Message	メール本文	半角英数文字 1~127 文字	空白	
From	送信元メールアドレス	半角英数文字 1~127 文字	空白	
To 1	宛先メールアドレス 1	半角英数文字 1~127 文字	空白	
To 2	宛先メールアドレス 2	半角英数文字 1~127 文字	空白	
To 3	宛先メールアドレス 3	半角英数文字 1~127 文字	空白	
Add time	メール本文内に発生時刻を追加するか の選択	<ul style="list-style-type: none"> •None(追加しない) •Header(本文の先頭に追加) •Footer(本文の最後に追加) 	追加しない	

● Mail server settings 0 および 1

Mail server settings 0/1 によりメールサーバを2組まで設定できます。

設定項目	内容	設定値	工場出荷値	
SMTP server IP address	SMTP サーバの IP アドレス、または FQDN 名	**** の形式 または半角英数記号 1~63 文字	空白	mailserver
SMTP server TCP port	SMTP サーバの TCP ポート番号	1-65535	25	
Auth Method	認証方式	<ul style="list-style-type: none"> •認証なし •POP before SMTP •SMTP AUTH (LOGIN と PLAIN をサポート) 	認証なし	
POP3 server IP address	認証用 POP3 サーバの IP アドレス、または FQDN 名	**** の形式 または半角英数記号 1~63 文字	空白	
POP3 server TCP port	認証用 POP3 サーバの TCP ポート番号	1-65535	110	
User ID	認証用ユーザ ID	半角英数記号 1~63 文字	空白	
Password	認証用パスワード	半角英数記号 1~31 文字	空白	

6.2 コマンド一覧

Telnet のコマンドラインから使用できるコマンド一覧です。

コマンドラインの使い方については「3.1 Telnet による設定」をご覧ください。

(コマンド形式の“ ”は半角スペース 1 文字を意味します)

6.2.1 制御コマンド

制御コマンドは入力と同時に作用するリアルタイム・コマンドです。

(1) connect

形 式

connect [<ドメイン番号>]

説 明

PPP 回線を接続する。

<ドメイン番号>	0 ~ 4。ドメイン番号を省略した場合、0 を指定されたものとする。
----------	------------------------------------

(2) disconnect

形 式

disconnect

説 明

PPP 回線を切断する。

(3) emgtest

形 式

emgtest [activate [<値>]]

説 明

緊急地震速報のテスト送信を行う。<キーワード>と<値>を省略した場合、“emgtest activate on”と同じ意味となる。“emgtest”だけでテスト送信の起動から完了までを自動的に行うので、通常は“emgtest activate off”を用いる必要はない。(「4.4.2 緊急地震速報のRS-232装置への中継」参照)。

<値>	on: 緊急地震速報のテスト送信を起動する off: 緊急地震速報のテスト送信を終了する
-----	---

(4) factorydefault

形 式

factorydefault

説 明

本装置に内蔵している通信モジュールを工場出荷状態に戻す。

(5) help

形 式

help

説 明

コマンドラインで使用できる全コマンドの一覧、及び各コマンド形式を表示する。

(6) ota

形 式

ota [<キーワード>]

説 明

OTA(Over The Air)機能を実行する。OTAの起動要求を行い、結果を表示する(「37 OTA機能」参照)。結果はsyslogにも出力する。キーワードとして下記を指定できる。

<キーワード>	説明
sp	OTASP起動要求(利用開始登録)
pa	OTAPA起動要求(解約手続き)

(7) ping

形 式

ping [-t] [-n <count>] [-l <size>] [-w <timeout>] <IP アドレス>

説 明

指定されたIPアドレス宛てに1秒間隔でICMP ECHO リクエスト(ping)を送信し、応答結果を表示する。

-t	ICMP ECHO リクエストをCTRL+C が押下されるまで繰り返し送出する。
-n <count>	<count> としてICMP ECHO リクエストの送出回数を指定する。(1 ~ 99999) -n オプションが指定されない場合のデフォルト値は4回。
-l <size>	<size> としてICMP ECHO のデータサイズをバイト数で指定する。(1 ~ 1448) -l オプションが指定されない場合のデフォルト値は32バイト。
-w <timeout>	<timeout> としてタイムアウト時間をミリ秒単位で指定する。(1000 ~ 99999) -w オプションが省略された場合のデフォルト値は2秒。
<IPアドレス>	ping送出先のIPアドレスを指定する

応答が返った場合の表示例

```
> ping 192.168.6.2
Pinging 192.168.6.2 with 32 bytes of data:
Reply from 192.168.6.2: bytes=32 time=4ms seq=1
Reply from 192.168.6.2: bytes=32 time=4ms seq=1
?
応答がなければ Requested timed out. が表示される。
```

(8) show

形 式

show <キーワード>

説 明

各種情報を表示する。

<キーワード>	説明
antenna	現在のアンテナ本数を表示する。 0: 圏外 1: 0本 2: 1本 3: 2本 4: 3本
config	現在設定されている(工場出荷値から変更されている)全設定値をコマンド形式で表示する。ただし Telnet パスワード(main password)は表示しない。
ether	イーサネットのリンク up/down、通信速度 10/100Mbps、全二重/半二重 Duplex を表示する。
log [n]	通信履歴のログデータを、古いものから順に最大 n 件表示する。n を省略した場合、最大 300 件表示する。(「5.5 通信履歴のロギング機能」参照)
module	通信モジュールの製造番号、メーカー、型名、バージョン No を表示する。 (このコマンドは、通信中は使えない)
phone	通信モジュールに登録されている電話番号を表示する。例: 09061925141 表示された電話番号が"01234567"の場合未開通を意味する。
rom	ROM 書き問い合わせ番号を通信モジュールに要求し、結果を表示する。例: 7060
time	GPS 時刻を表示する。例: 2008/07/23 10:26:05

(9) restart

形 式

restart

説 明

設定コマンドで入力された値を不揮発メモリに保存し、再起動する。

(10) quit

形 式

quit

説 明

コマンドモードを終了し、Telnet メニューに戻る。

6.2.2 設定コマンド

本装置の動作を定義するコマンドです。

(1) atdreset

形 式

atdreset <キーワード> <値>

説 明

定期発信機能を設定する。基地局のオーバーリーチ干渉などによる不着信対策として、待ち受け状態が一定時間継続した場合に、基地局に対して定期発信を実施する機能を設定する。この設定は、通信モジュールが OTASP により顧客登録されている場合に有効となる。

<キーワード>	<値>
activate	off: 定期発信機能を off にする。(工場出荷値) on: 定期発信機能を on にする。
time	定期発信の間隔(待ち受け状態継続時間)を 3~600 分で設定する。(工場出荷値: 20)

(2) autoreboot

形 式

autoreboot <キーワード> <値>

説 明

定期リブート機能を設定する。本装置を定時に定期的に再起動させる設定をする。

<キーワード>	<値>
activate	off: 定時リブート機能を off にする。(工場出荷値) on: 定時リブート機能を on にする。
time	何時にリブートさせるか 0~23 時で設定する。(工場出荷値: 0)

(3) clr

形 式

clr

説 明

本装置に設定する全ての値 (自 IP アドレス/マスク値を除く) を工場出荷値に戻す。続けて「restart」

コマンドを入力することにより、設定値が保存され確定する。

(使用例) 現在の設定値をいったん工場出荷値に戻して設定を行い保存する。

```
> clr<-----工場出荷値に戻す
> domain 0 au-net.ne.jp au au 0.0.0.0/0 1<---
>      }
> nat 0 * * * ipcp<-----
> restart<-----設定値を保存する
```

(4) dhcp

形 式 1

dhcp <キーワード> <値>

形 式 2

dhcp client <クライアント番号> <MAC アドレス> <IP アドレス>

形 式 3 (割り当てを削除する場合)

dhcp client <クライアント番号> delete

説 明

本装置を DHCP サーバーとして使用する場合に設定する。

形式 1:

<キーワード>	<値>
activate	off: サーバー機能を off にする。(工場出荷値) on: サーバー機能を on にする。
startip	割り当て開始アドレス(**** の形式)
noofip	割り当てアドレス個数を、1~128 で設定する
mask	ネットマスクの値を設定する。
gateway	デフォルトゲートウェイの IP アドレス(**** の形式)
domain	DHCP で割り当てるドメイン名を、半角英数字 31 文字以内で設定する。
pridns	プライマリ DNS サーバーの IP アドレス(**** の形式)
secdns	セカンダリ DNS サーバーの IP アドレス(**** の形式)
leasetime	DHCP で割り当てる IP アドレスのリース時間を設定する(値の範囲=0~9999、単位:時間。0を設定すると、リース時間無制限(infinite lease)となる。
wins	DHCP で割り当てる WINS サーバアドレスを設定する。

形式2: 特定のクライアントに固定IPを割り当てる。(最大128台)

<クライアント番号>	0~127 (Telnet メニューでは 1~128)
<MAC アドレス>	対称器機の MAC アドレスを 16 進数 12 桁で指定する。
<IP アドレス>	割り振る IP アドレスを**** の形式で指定する。

(5) di

形 式

di <接点番号> powerontrigger <値>

説 明

本装置が待機状態で接点入力(0 または 1)が ON になったときに、待機状態から運用状態に移行するかどうかを設定する。

<接点番号>	0: 接点入力 0 (DI0) 1: 接点入力 1 (DI1)
<値>	on: 接点 ON 変化で、運用状態に移行する off: 接点が ON に変化しても、運用状態に移行しない(工場出荷値)

(6) dnsrelay

形 式

dnsrelay `activate` `<値>`

説 明

DNS リレー機能の有効／無効を設定する。(「4.5 インターネット接続と DNS リレー機能」参照)

<code><値></code>	off: DNS リレー機能を off にする。(工場出荷値) on: DNS リレー機能を on にする。
------------------------	---

(7) domain

形 式 1

domain `<エントリ番号>` `<ドメイン名>` `<ユーザー名>` `<パスワード>` `<自動発呼先アドレス/マスク>` `<メトリック>`

形 式 2 (テーブルを削除する場合)

domain `<エントリ番号>` `delete`

説 明

ドメイン管理テーブルを設定する。(「4.1.1 ドメイン管理情報」参照)

<code><エントリ番号></code>	0 ~ 4 (Telnet メニューでは 1~5)
<code><ドメイン名></code>	半角英小文字、数字、ピリオド、ハイフンのみで 2~20 文字。ただし、ピリオドおよびハイフンは先頭および末尾にあってはならない。
<code><ユーザー名></code>	半角数字「0~9」、半角英文字「a~z、A~Z」で 1~65 文字。 "!auto"と記述すると、通信モジュールに登録されている電話番号がユーザー名として使われる。 例) 電話番号が 0312345678 とすると、下 2 行のコマンドは同じ定義となる。 domain 0 1.example !auto testpass 192.168.11.0/24 1 domain 0 1.example 0312345678 testpass 192.168.11.0/24 1
<code><パスワード></code>	半角数字「0~9」、半角英文字「a~z、A~Z」で 1~32 文字。 "!auto"と記述すると、通信モジュールに登録されている電話番号がパスワードになる(上記ユーザー名の例と同様の使い方)。
<code><自動発呼先アドレス/マスク></code>	自動発呼のトリガとする IP パケットの宛先アドレス/マスクを指定する。 例: "192.168.1.0/24"。 0.0.0.0/0 の場合は外部ネットワーク宛先全てを発呼の対象とする。
<code><メトリック></code>	1~15

(8) emg

形 式

emg `<キーワード>` `<値>`

説 明

<code><キーワード></code>	<code><値></code>
activate	on: 緊急地震速報を受信する off: 緊急地震速報を受信しない (工場出荷値)

(9) ethernetif

形 式

ethernetif `<キーワード>` `<値>`

説 明

イーサネットインターフェースの速度(10/100Mbps)、全二重／半二重をオートネゴシエーションとするか、または固定値で設定するかを指定する。

<キーワード>	<値>
autonego	off : 固定値で設定する on : オートネゴシエーションで設定する(工場出荷値)
speedselect	10 : 10Mbps 100 : 100Mbps
duplex	full : 全二重 half : 半二重

(10) filter

形 式 1

```
filter <number> <type> <dir> <srcaddr> <dstaddr> <protocol> <srcport> <dstport> <ppp1
```

形 式 2 (テーブルを削除する場合)

```
filter <number> delete
```

説 明

パケットフィルタ機能の設定をおこなう。パラメータは省略できない。(「5.3 パケットフィルタ機能」参照)

<number>	フィルタ番号を 0~31 で指定する。(Telnet メニューでは 1~32)
<type>	フィルタタイプを指定する。 pass: 一致すれば通す。 reject: 一致すれば破棄する。
<dir>	指定した方向のパケットをフィルタリングの対象とする。 in: 受信パケットをフィルタリングする。 out: 送信パケットをフィルタリングする。
<srcaddr>	IP アドレス、またはその範囲を指定する。この送信元 IP アドレスをフィルタの対象とする。 ● アドレスを単独で指定する場合 → [IP アドレス/マスクビット数] ● アドレスの範囲を指定する場合 → [アドレス始点:アドレス終点] ● すべての送信元を対象とする場合 → “*” と書く
<dstaddr>	IP アドレス、またはその範囲を指定する。この送信先 IP アドレスをフィルタの対象とする。 ● アドレスを単独で指定する場合 → [IP アドレス/マスクビット数] ● アドレスの範囲を指定する場合 → [アドレス始点:アドレス終点] ● すべての送信先を対象とする場合 → “*” と書く
<protocol>	プロトコル番号 (1~254)、またはニーモニック 指定した種類のプロトコルをフィルタリングの対象とする。ニーモニックは、次のものが指定できる。udp, tcp, tcpest, tcpfin, icmp, * (全てのプロトコル)
<srcport>	送信元ポート番号 (1~65534) を指定する。この送信元ポート番号をフィルタの対象とする。 ● 特定のポートを指定する場合 → ポート番号、またはニーモニックを記述する。 ● ポートの範囲を指定する場合 → [送信元ポート番号始点:送信元ポート番号終点] ● すべての送信元ポートを対象とする場合 → “*” と書く
<dstport>	送信先ポート番号 (1~65534) を指定する。この送信先ポート番号をフィルタの対象とする。 ● 特定のポートを指定する場合 → ポート番号、またはニーモニックを記述する。 ● ポート範囲指定する場合 → [送信先ポート番号始点:送信先ポート番号終点] ● すべての送信先ポートを対象とする場合 → “*” と書く

■ 参考: ニーモニックとプロトコル番号/ポート番号の一覧表

ニーモニック	プロトコル番号	ニーモニック	ポート番号	ニーモニック	ポート番号
icmp	1	ftpdata	20	pop3	110
tcp	6	ftp	21	sunrpc	111
udp	17	telnet	23	nnntp	119
tcpest	254	smtp	25	ntp	123
tcpfin	253	domain	53	login	513
		www	80	route	520

(11) flag

形 式

flag <キーワード> <値>

説 明

スタートアップに関する設定を行う。wd の on/off 指定だけは他の設定コマンドと異なり、コマンド入力時点で設定保存される。ただし動作に反映されるのは本装置の次回電源投入後となる。

<キーワード>	<値>
wd	on: ウォッチドッグ・リセット機能を有効にする。(工場出荷値) off: ウォッチドッグ・リセット機能を無効にする。
menutimeout	telnet の無通信切断タイマの秒数を記述する(工場出荷値: 300) (0、60~99999999 で指定する。0 のとき切断しない)

(12) interface

形 式

interface <ドメイン番号> <IP パケット変換方法> <IP アドレス>

説 明

センターとの IP 通信に NAT/NAPT を使うか、GRE トンネリングを使うかをドメイン毎に設定する。

<ドメイン番号>	ドメイン番号を、0 から 4 で指定する。
<IP パケット変換方法>	nat: Network Address Translation(工場出荷値) gre: General Routing Encapsulation
<IP アドレス>	上記で“gre”を指定した場合、GRE トンネリングの終点 IP アドレスを指定する。

(13) kup

形 式

kup <キーワード> <値>

説 明

ケータイアップデート機能を on(有効)、または off(無効)に設定する。通信モジュールのファームウェアバージョン番号が 1.X.X. の場合、on 指定に対しては“Parameter error”を応答して受け付けない。

<キーワード>	<値>
activate	off: ケータイアップデート機能を無効にする(工場出荷値) on: ケータイアップデート機能を有効にする

(14) maildi

形 式 1

maildi <接点番号> <キーワード> <値>

形 式 2 (エントリを削除する場合)

maildi <接点番号> delete

説 明

接点0、接点1のどちらのメール設定かを指定する。

<接点番号>	0: 接点入力 0 (DI0) 1: 接点入力 1 (DI1)
--------	------------------------------------

<キーワード>	<値>
activate	on: 接点入力 OFF から ON に変化したときメール送信する off: メール送信は行わない(工場出荷値)
server	0: メール送信に際して、mailserver の<番号>0 の設定を参照する(工場出荷値) 1: メール送信に際して、mailserver の<番号>1 の設定を参照する
subject	送信するメールの件名(半角英数文字1~63文字)
message	送信するメールの本文(半角英数文字1~127文字)

from	送信元メールアドレス(半角英数文字1~127文字)
to1	あて先メールアドレス1(半角英数文字1~127文字)
to2	あて先メールアドレス2(半角英数文字1~127文字)
to3	あて先メールアドレス3(半角英数文字1~127文字)
addtime	none :メール本文内に DI が ON になった時刻を追加しない(工場出荷値) header :メール本文の先頭に DI が ON になった時刻を追加する footer :メール本文の最後に DI が ON になった時刻を追加する

(15) mailserver

形 式 1

mailserver <番号> <キーワード> <値>

形 式 2 (設定を削除する場合)

mailserver <番号> delete

説 明

「maildi server」で参照されるメールサーバの設定を行う。

<番号>	0 または 1 のいずれかを指定する
<キーワード>	<値>
smtpaddress	SMTP サーバの IP アドレス、または FQDN 名(半角英数記号 1~63 文字)
smtpport	SMTP サーバの TCP ポート番号
auth	none :認証なし(工場出荷値) popbeforesmtp :POP before SMTP で認証 smtpauth :SMTP-AUTH で認証 (LOGIN と PLAIN をサポート)
pop3address	認証用 POP3 サーバの IP アドレス、または FQDN 名(半角英数記号 1~63 文字)
pop3port	認証用 POP3 サーバの TCP ポート番号
userid	認証用ユーザ ID(半角英数記号 1~63 文字)
password	認証用パスワード(暗号化した文字列)

(16) main

形 式

main <キーワード> <値>

説 明

本装置の基本情報の設定を行う。

<キーワード>	<値>
ip	本装置のイーサネットインタフェースの IP アドレス(**** の形式)
mask	上記 IP アドレスのサブネットマスク値(1~30)
gateway	LAN 側にデフォルトルータを設ける場合の IP アドレス(**** の形式)
password	Telnet ログイン時の管理者パスワードを、半角英数記号 0~15 文字で設定する(工場出荷値: "system")。「show config」による表示はされない。
redial	ダイヤル再試行回数を設定する。
packetforwarding	発信のトリガとなったパケットの送信/破棄を指定する。"送信"の場合、発信成功するまでに発生した最大 10 パケットを保存、成功後に送信する。失敗時は廃棄する。 "破棄"の場合、PPP 接続成功までに発生したパケットは破棄する。 off :破棄する(工場出荷値) on :送信する
dns	DNS サーバのアドレス(**** の形式)

(17) nat

形 式 1

nat <エン트리番号> <プライベート IP アドレス> <プロトコル> <ポート> ipcp <アクセスポート>

形 式 2 (テーブルを削除する場合)

nat <エン트리番号> delete

説 明

NAT コンフィグレーションテーブルを設定する。

<エン트리番号>	0 ~ 47 (Telnet メニューでは 1~48)
<プライベート IP アドレス>	次の3つの形式が入力可能。 <ul style="list-style-type: none"> ● 単一アドレス指定 (NAT エントリ) 例: "192.168.0.1" ● アドレス範囲指定 (NAPT エントリ) 始点: 終点で記述する 例: "192.168.0.1:192.168.0.254" すべてのプライベートIPアドレス対象の場合 (NAPT エントリ)、"*" と入力する
<プロトコル>	NAT エントリの場合、プロトコル番号(1~254)、またはニーモニック。 次の3つの形式が入力可能。NAPT エントリの場合は無視される。 <ul style="list-style-type: none"> ● 単一プロトコル番号指定 例: "6" ● ニーモニック単一指定 (icmp,tcp,tcpst,tcpfin,udp) 例: "tcp" ● すべてのプロトコルを対象とする場合 "*" と入力する
<ポート>	NAT エントリの場合、機器の TCP/UDP ポート番号(1~65535)、またはニーモニック。 次の3つの形式が入力可能。NAPT エントリの場合は無視される。 <ul style="list-style-type: none"> ● 単一ポート番号指定 例: "21" ● ニーモニック単一指定 (ftp, ftpdata, telnet, smtp,www, pop3, sunrpc, nntp, ntp, login, domain, route, pptp) ● ポート範囲指定 (始点: 終点) 例: "0:12287" ● すべてのポートを対象とする場合 "*" と入力する
<アクセスポート>	この項目は NAPT エントリでは無効。 WAN 側からアクセスするポート番号を 1~65535 で設定する。このポート番号は、上記<ポート>で指定した「単一ポート番号」に変換されて LAN 側への宛先ポートとなる。0 または省略した場合、WAN 側からのアクセスポートが LAN 側機器のポートと同じであることを意味する。(省略した場合 0 と表示される)

(18) oosreset

形 式

oosreset <キーワード> <値>

説 明

電波の受信状態が圏外のまま一定時間継続した場合に通信モジュールをソフトウェアリセットする。

<キーワード>	<値>
activate	off: 圏外定時間リセット機能を off にする。(工場出荷値) on: 圏外定時間リセット機能を on にする。
time	圏外が何分継続した時リセットさせるかを 1~10 分で設定する。(工場出荷値:3)

(19) packetspeed

形 式

packetspeed <キーワード>

説 明

契約のサービスに従い無線パケットデータ通信速度を設定する。キーワードとして下記を指定できる。

<キーワード>	説明
low	低速—上り14.4kbps、下り14.4kbps
high	高速—上り64kbps、下り144kbps(工場出荷値)

(20) pingkeepalive

形 式

pingkeepalive <enable/disable> <destination> <timeout>

説 明

PPP 接続中、CRG、CIPL 網接続を維持するため定期的に Ping(ICMP echo)を送信する。

<enable/disable>	enable: Ping キープアライブを行う disable: Ping パケットの送出は行わない(工場出荷値)
<destination>	Ping 送出先の IP アドレスを指定する 例: 192.168.101.69
<timeout>	30~4294967 秒で Ping 送出の間隔を指定する(工場出荷値: 50)

(21) powersaving

形 式

powersaving <キーワード> <値>

説 明

本装置の省電力機能を使用する場合は、activate(省電力機能)を on(有効)に設定し、アイドルタイムに待機状態に移行するまでの時間(秒)を設定しておく。

<キーワード>	<値>
activate	on: 省電力機能有効(工場出荷値) off: 省電力機能無効
idletimer	アイドルタイム値を 30~99999999 秒で設定する(工場出荷値: 60)

(22) ppp_interval

形 式

ppp_interval <秒数>

説 明

PPP 切断後、再び発信/着信できるようになるまでの待ち時間を設定する。

<秒数>	0~1000 (工場出荷値: 10)
------	--------------------

(23) risignalholdtime

形 式

risignalholdtime <保持時間>

説 明

本装置が RS-232 ポートに対して緊急地震速報を送出した後、何秒間 RS-232 の DTR 信号(または 9 ピン出力)をオン(マーク)状態に保持するかを設定する。

<保持時間>	5~60 (工場出荷値: 10)
--------	------------------

(24) route

形 式 1

route <テーブル番号> <宛先アドレス/マスク> <ゲートウェイ> <メトリック>

形 式 2 (テーブルを削除する場合)

route <テーブル番号> delete

説 明

本装置のスタティック・ルーティング・テーブルの設定をおこなう。LAN 側に対して有効。他のルータを経由してアクセスをおこなう場合にその経路情報を登録する。これによって異なるネットワークからでも本装置がアクセスできるようになる。

<テーブル番号>	0 から 29 を指定する。(Telnet メニューでは 1~30)
<宛先アドレス/ マスク>	単一ホストの IP アドレス、または宛先ネットワークのネットワーク番号、またはサブ ネットワーク番号を、IP アドレスとマスクビットで指定する。 例: 192.168.1.0/24
<ゲートウェイ>	宛先ネットワークに到達するために経由する最初のゲートウェイの IP アドレス。0 を 設定することはできない。
<メトリック>	宛先ネットワークまでのホップ数。0~15 までの数値。

(25) rspot

形 式 1

rspot 0 〇 inactivitytimer 〇 <値>

形 式 2

rspot 1 〇 <キーワード> 〇 <値>

説 明

形式 1:

<値>	無通信 PPP 切断タイマ値を秒単位で指定する。データ通信が一定時間行われな いとタイムアウトで PPP リンクを切断する。0 を設定すると切断しない。 (工場出荷値:30)
-----	---

形式 2:

RS-232通信条件、及びRS-232ポートサーバとしての設定を行う。

<キーワード>	<値>
baudrate	2400, 4800, 9600, 19200, 38400, 57600, 115200, 230400, 460800 のいずれかを設定 する。(工場出荷値: 230400)
flowctrl	none : フロー制御なし(工場出荷値) rtscts : rts/cts フロー制御 xonxoff : xon/xoff フロー制御 both : rts/cts と xon/xoff F フロー制御の両方
xoncode	フロー制御の xon コードを 00~ff の 16 進数で設定する(工場出荷値:11)
xoffcode	フロー制御の xoff コードを 00~ff の 16 進数で設定する(工場出荷値:13)
databits	7: データビット長は 7 ビット 8: データビット長は 8 ビット(工場出荷値)
stopbits	1 : 1 ストップビット(工場出荷値) 1.5 : 1.5 ストップビット 2 : 2 ストップビット
parity	none : パリティなし(工場出荷値) odd : 奇数パリティ even : 偶数パリティ
maxidle	RS-232C からの受信が何キャラクタ途切れた時に 1 パケットとするか、そのキャラク タ数を 0~65535 で設定する。(工場出荷値:4)
dtrctrl	DTR 信号の動作を、以下のいずれかから選択する powerup : 電源投入でオンにする(工場出荷値) session : TCP 接続した時オン、切断でオフにする earthquake : 緊急地震速報送信時オンにする
rtsctrl	RTS 信号の動作を、以下のいずれかから選択する powerup : 電源投入でオンにし、以後フロー制御設定に従う session : TCP 接続でオンし、以後フロー制御設定に従う。TCP 切断でオフする
scpcport	コネクション待ち受け TCP ポート番号を設定する(工場出荷値: 33337)
inactivitytimer	無通信 TCP 切断タイマのタイマ値を 0~9999999 秒で設定する。タイムアウトで TCP を切断する。0 を設定すると切断しない。(工場出荷値:0)
forcedtimeout	強制 TCP 切断タイマのタイマ値を 0~9999999 秒で設定する。0 を設定すると切断し ない。(工場出荷値:0)

(26) syslog

形 式 1

syslog <キーワード> <値>

形 式 2

syslog option <キーワード> <値>

説 明

本装置の各種ログ情報を SYSLOG サーバーに転送する場合に設定する。

形式 1:

<キーワード>	<値>
ipaddress	SYSLOG サーバーの IP アドレス。「0.0.0.0」は、SYSLOG 機能を使わないことを意味する。(工場出荷値:0.0.0.0)
port	SYSLOG サーバーの UDP ポート番号。(工場出荷値:514)

形式 2:

<キーワード>	<値>
system	off: システムログは取らない(工場出荷値) on: システムログを取る
rs232c	off: 通信モジュールに関するログは取らない(工場出荷値) on: 通信モジュールに関するログを取る
auth	off: 認証に関するログは取らない(工場出荷値) on: 認証に関するログを取る
ppp	off: PPP の動作状況に関するログは取らない(工場出荷値) on: PPP の動作状況に関するログを取る

(27) vjcompression

形 式

vjcompression <キーワード> <値>

説 明

VJ 圧縮機能は TCP/IP ヘッダーを圧縮して転送効率を向上させる。あらかじめ相手側が対応していないと分かっている場合は、off 設定にしてネゴシエーション・パケットを流さないことが可能。

<キーワード>	<値>
activate	off: VJ 圧縮機能を off にする。 on: VJ 圧縮機能を on にする。(工場出荷値)

第7章

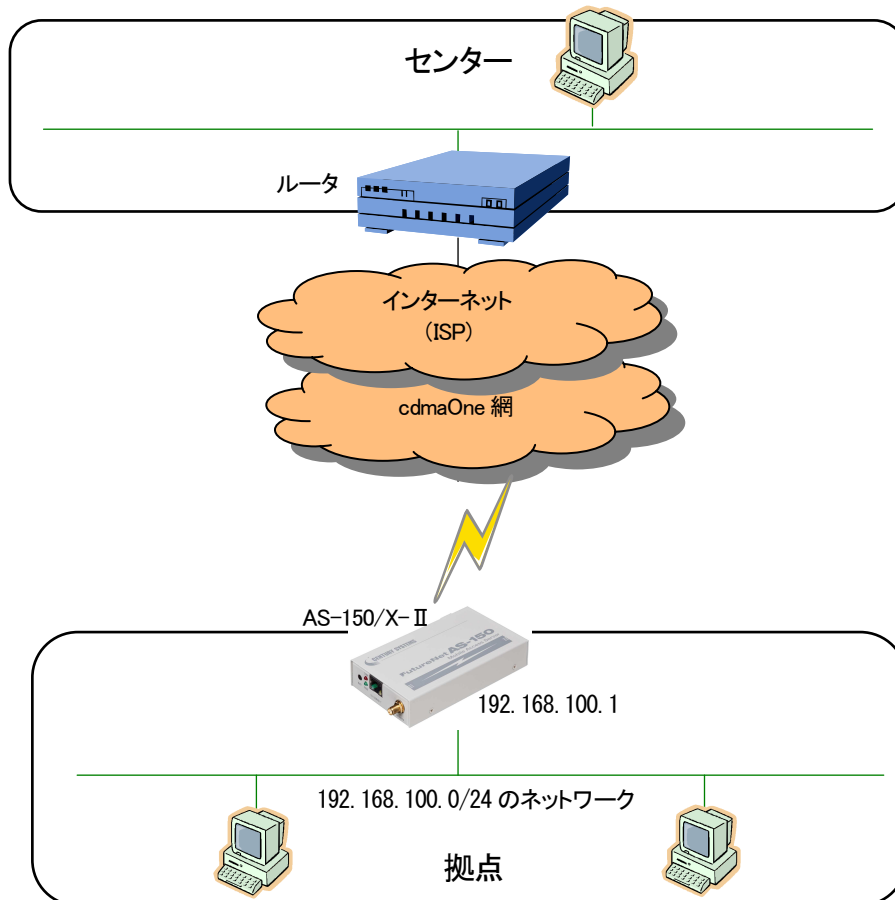
参考資料

7.1 AS-150/X-II 設定例

7.1.1 インターネット接続で NAT を利用した通信設定例

この例は、本装置の NAPT 変換機能を利用して、インターネット経由で通信を行う場合の設定例です。インターネット接続サービスは au.NET を使い、すべてのクライアントを LAN 側から WAN 側への発信のみに限定しています。

(1) 構成



(2) 要件

- ① LAN 側から外部ネットワーク宛先のパケット全てを発呼の対象とさせます。
- ② LAN 上のすべてのクライアントをセンターにアクセスさせます。

(3) AS-150/X-II の設定

```
main ip 192.168.100.1
main mask 255.255.255.0
domain 0 au-net.ne.jp au au 0.0.0.0/0 1.....①
nat 0 * * * ipcp 0 .....②
packetspeed low
dnsrelay activate on
}
```

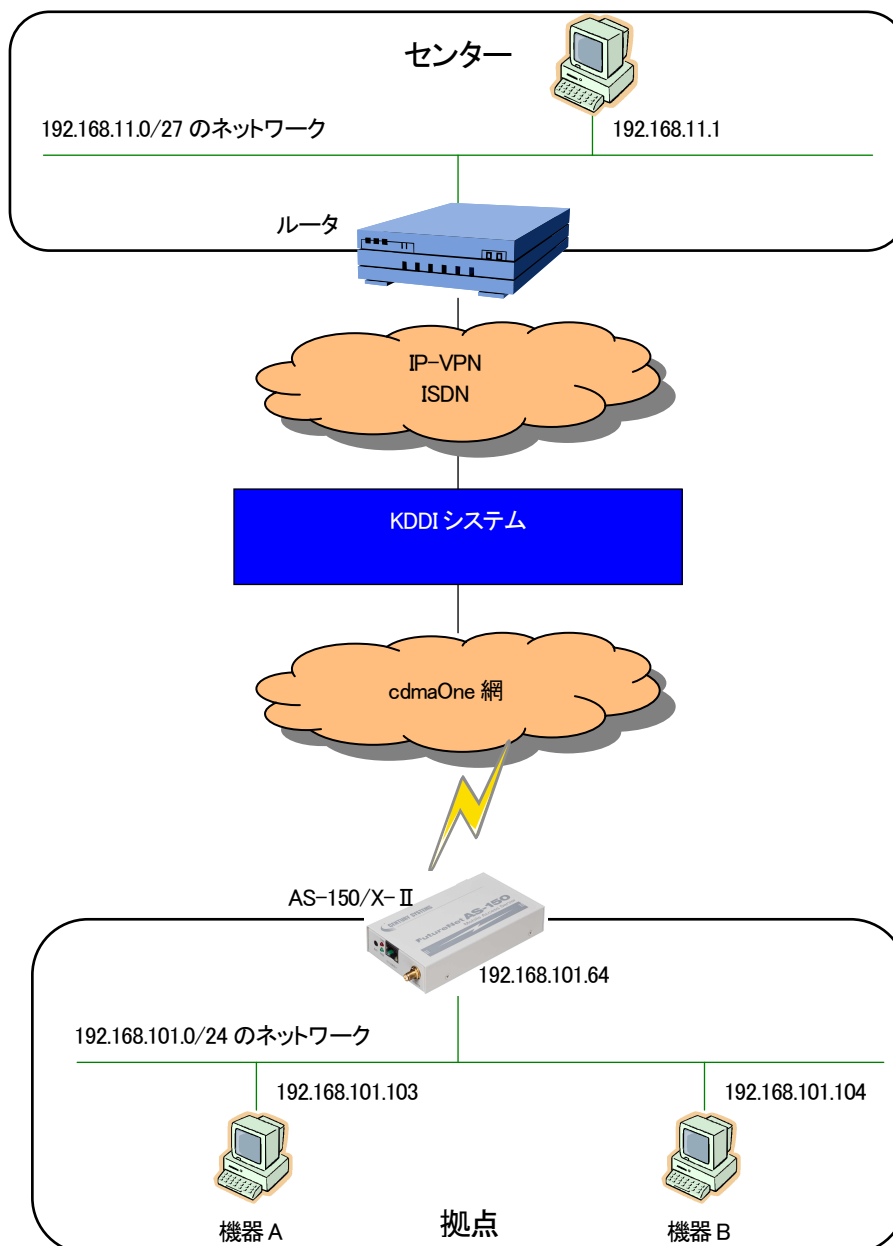
7.1.2 閉域網サービスで NAT を利用した通信設定例

これは、FutureNet AS-150/X-II の NAT 機能を利用して通信を行う設定例です。

■ センター⇄LAN 間で通信する場合

これは、閉域網サービスを利用し、AS-150/X-II に LAN 接続したクライアントとセンターとで通信を行う場合の例です。

(1) 構成



(2) 要件

- ① センターのパソコンから、AS-150/X-II に ping できること。
- ② センターのパソコンから、AS-150/X-II に telnet ログインできること。
- ③ センターのパソコンから、AS-150/X-II のファームウェアをバージョンアップできること。
- ④ センターのパソコンと LAN 上の機器 A (TCP ポート 65000 番) が TCP/IP 通信できること。
- ⑤ センターのパソコンと LAN 上の機器 B (UDP ポート 65001 番) が UDP/IP 通信できること。

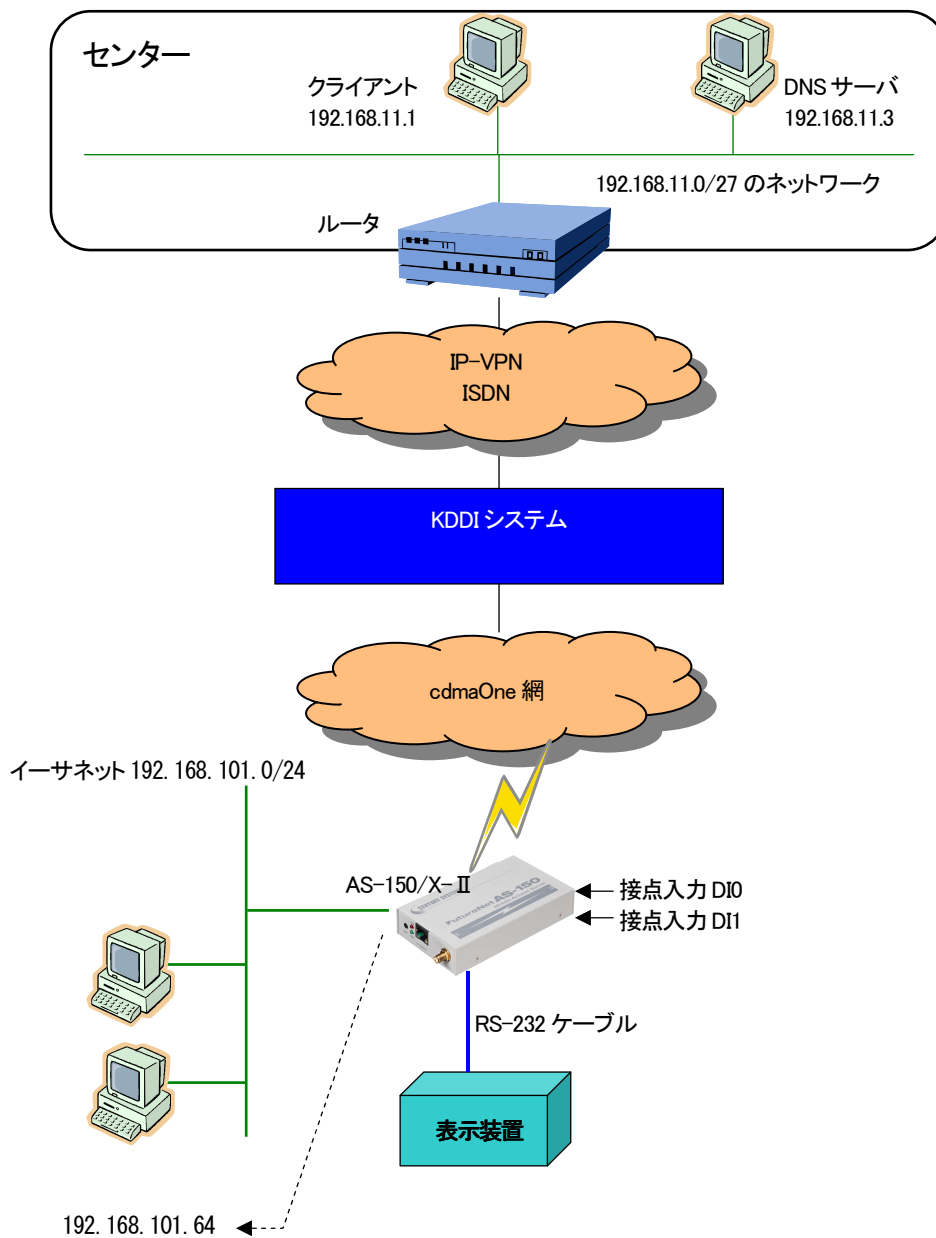
(3) AS-150/X-II の設定

```
main ip 192.168.101.64
main mask 255.255.255.0
domain 0 ドメイン名 ユーザ名 パスワード 192.168.11.0/27 1
nat 0 192.168.101.64 icmp * ipcp.....①
nat 1 192.168.101.64 tcp telnet ipcp.....②
nat 2 192.168.101.64 tcp 2222 ipcp.....③
nat 3 192.168.101.103 tcp 65000 ipcp.....④
nat 4 192.168.101.104 udp 65001 ipcp.....⑤
```

■ センター⇔LAN 及び RS-232 間で通信する場合

これは、閉域網サービスを利用し、AS-150/X-II の RS-232 ポートに接続した表示装置に対してセンターから通信しながら、同時に LAN 上のクライアントとも通信を行う場合の例です。

(1) 構成



(2)要件

センターのクライアントは、工場出荷値の TCP ポート番号 33337 に対してに接続を行い、表示装置とデータ送受信を行います。また LAN 上のクライアントからはセンターへのアクセスができるようにしています。

- ① DNS サーバーの IP アドレスを、192.168.11.3 に設定します。
- ② センターのクライアント 192.168.11.1 からの着信を受けられるようにします。
- ③ センターから AS-150/X-II に ping ができるようにします。
- ④ センターから AS-150/X-II に Telnet 接続できるようにします。
- ⑤ センターから AS-150/X-II のファームウェアをバージョンアップできるようにします。
- ⑥ センターから AS-150/X-II の RS-232 に接続した表示装置にアクセスできるようにします。
- ⑦ LAN 上のクライアントはすべて WAN 側にアクセスできるようにします。

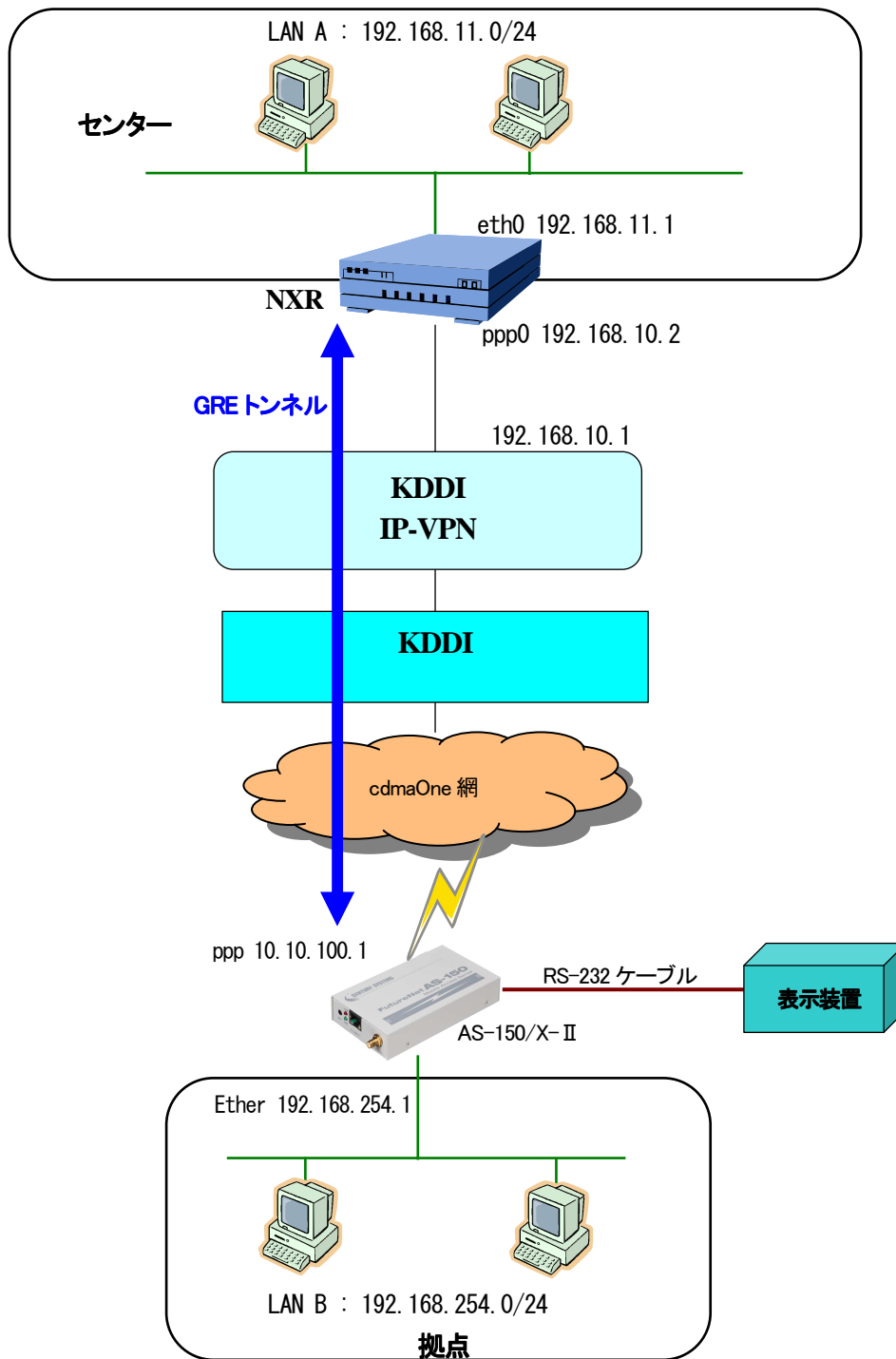
(3) AS-150/X-II の設定

```
main ip 192.168.101.64
main mask 255.255.255.0
main dns 192.168.11.3 ..... ①
domain 0 ドメイン名 ユーザ名 パスワード 192.168.11.0/27 1 ..... ②
nat 0 192.168.101.64 icmp * ipcp 0 ..... ③
nat 1 192.168.101.64 tcp telnet ipcp 0 ..... ④
nat 2 192.168.101.64 tcp 2222 ipcp 0 ..... ⑤
nat 3 192.168.101.64 tcp 33337 ipcp 0 ..... ⑥
nat 4 * * * ipcp 0 ..... ⑦
powersaving activate off
emg activate on
}
```

7.1.3 閉域網サービスで GRE を利用した通信設定例

この例は、FutureNet AS-150/X-II の GRE トンネリング機能を利用して通信を行う設定例です。これによりセンターと AS-150/X-II の LAN 側の機器や RS-232 とのアクセスが可能になります。

(1) 構成例



(2)要件

➤ インタフェースおよび PPP/PPPoE

- NXR では専用線接続の設定を行っています。
- AS-150/X-II では CRG、CIPL 網に接続するための設定を行います。

主なインタフェースおよび PPP/PPPoE のパラメータ

パラメータ	NXR	AS-150/X-II
LAN 側インタフェース	Ether0	Ether
LAN 側 IP アドレス	192.168.11.1	192.168.254.1
WAN 側インタフェース	ppp0	ppp
WAN 側 IP アドレス	192.168.10.2	ipcp で取得

➤ GRE

- NXR のインタフェースアドレスを GRE1 は「172.16.0.1」と設定しています。

主な GRE のパラメータ

パラメータ	NXR	AS-150/X-II
対向拠点	AS-150/X-II	NXR
インタフェースアドレス	172.16.0.1/30	-
リモート(宛先)アドレス	10.10.100.1	192.168.10.2
ローカル(送信元)アドレス	192.168.10.2	-
PEER アドレス	172.16.0.2/30	-
MTU	1476	-
MSS 設定[MSS 値]	有効[0]	-

➤ その他

- スタティックルート設定で AS-150/X-II 配下の LAN へのルートをスタティックルートでインタフェース「gre1」で設定しています。

(3) 設定例

■ NXR(センタールータ)側の設定

ポイント: AS-150/X-II と GRE トンネリングによる接続を行います。また IP-VPN 網に接続するための専用線設定も行っていきます。

<<インタフェース設定>>

[Ethernet0 の設定]

IP アドレスに「192.168.11.1」を設定します。

※IP アドレスの設定を変更した場合、即設定が反映されます。

<input checked="" type="radio"/>	固定アドレスで使用
IP アドレス	192.168.11.1
ネットマスク	255.255.255.0
MTU	1500

<<PPP/PPPoE 設定>>

[専用線設定]

専用線を利用するため、本装置の IP アドレスおよび接続先の IP アドレスを設定します。

プロバイダ名	<input type="text" value="CIPL"/>
専用線設定	
本装置のIPアドレス	<input type="text" value="192.168.10.2"/>
接続先のIPアドレス	<input type="text" value="192.168.10.1"/>

[接続設定]

接続ポートとして「Leased Line(128K)」を選択しています。

接続先の選択	<input checked="" type="radio"/> 接続先1 <input type="radio"/> 接続先2 <input type="radio"/> 接続先3 <input type="radio"/> 接続先4 <input type="radio"/> 接続先5
接続ポート	<input type="radio"/> Ether0 <input type="radio"/> Ether1 <input type="radio"/> Ether2 <input type="radio"/> BRI(64K) <input type="radio"/> BRI MP(128K) <input type="radio"/> Leased Line(64K) <input checked="" type="radio"/> Leased Line(128K) <input type="radio"/> RS232C
接続形態	<input type="radio"/> 手動接続 <input checked="" type="radio"/> 常時接続 <input type="radio"/> スケジューラ接続
RS232C/BRI接続タイプ	<input checked="" type="radio"/> 通常 <input type="radio"/> On-Demand接続
IPマスカレード	<input checked="" type="radio"/> 無効 <input type="radio"/> 有効
ステートフルパケット インスペクション	<input checked="" type="radio"/> 無効 <input type="radio"/> 有効 <input type="checkbox"/> DROPしたパケットのLOGを取得
デフォルトルートの設定	<input type="radio"/> 無効 <input checked="" type="radio"/> 有効

<<GRE 設定>>

[GRE1 設定]

AS-150/X-II との GRE トンネルを設定します。

インタフェースアドレス	<input type="text" value="172.16.0.1/30"/> (例:192.168.0.1/30)
リモート宛先アドレス	<input type="text" value="10.10.100.1"/> (例:192.168.1.1)
ローカル(送信元)アドレス	<input type="text" value="192.168.10.2"/> (例:192.168.2.1)
PEERアドレス	<input type="text" value="172.16.0.2/30"/> (例:192.168.0.2/30)
TTL	<input type="text" value="255"/> (1-255)
MTU	<input type="text" value="1476"/> (最大値 1500)
Path MTU Discovery	<input checked="" type="radio"/> 有効 <input type="radio"/> 無効

MSS 設定を「有効」にしています。

MSS設定	<input checked="" type="radio"/> 有効 <input type="radio"/> 無効 MSS値 0 Byte <small>(有効時にMSS値が0の場合は、MSS値を自動設定(Clamp MSS to MTU)します。)</small>
-------	--

<<スタティックルート設定>>

AS-150/X-II 配下の LAN への通信が GRE トンネルを通るようにインターフェース「gre1」でスタティックルートを設定しています。

アドレス	ネットマスク	インターフェース/ゲートウェイ	ディスタンス <1-255>
192.168.254.0	255.255.255.0	gre1	1

※NXR ルータの設定方法の詳細は各ユーザマニュアルをご参照下さい。

■ AS-150/X-II (拠点ルータ)側の設定

ポイント:NXR と GRE トンネリングによる接続を行います。domain と interface の設定は必須です。

(1)要件

センターのクライアントから RS-232 に接続した表示装置に対してアクセスする場合は、TCP ポート番号 30000 に対してに接続を行うようにします。

- ① 宛先ネットワークを 192.168.11.0 としてドメイン登録します。
- ② GRE トンネリングの終点を 192.168.10.2 とします。
- ③ RS-232 送受信のためのコネクション待ち受け TCP ポート番号を 30000 にします。

(2) AS-150/X-II の設定

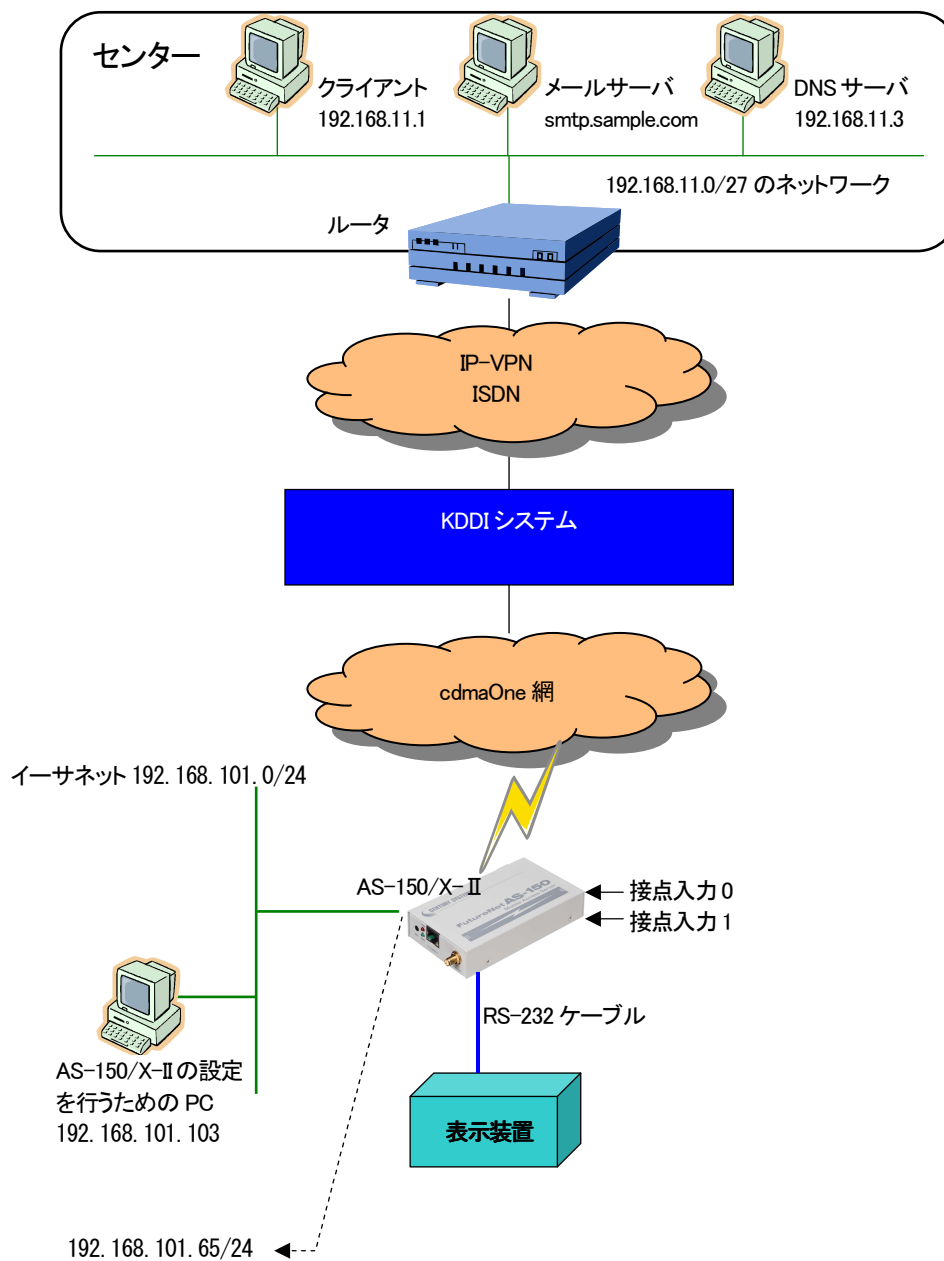
```
main ip 192.168.254.1
main mask 255.255.255.0
domain 0 1.example test testpass 192.168.11.0/24 1..... ①
interface 0 gre 192.168.10.2 ..... ②
rsport 1 scpcport 30000 ..... ③
}
```

7.1.4 省電力機能を使った RS-232 ポート通信設定例

これは、閉域網サービスを利用し、AS-150/X-II の RS-232 ポートに接続した表示装置に対して、センターから通信を行う場合の設定例です。なお接点入力を有効にし、メール送信の設定も行っています。

■ ドメイン登録が1つの場合

(1) 構成



(2)要件

センターのクライアントは、TCP ポート番号 50000 に対してに接続を行い、表示装置とデータ送受信を行います。アイドルタイム 60 秒で待機状態となります。

- ① DNS サーバーの IP アドレスを、192.168.11.3 に設定します。
- ② RS-232C の通信パラメータおよび RS-232 ポートサーバの設定を行います。
- ③ センターのクライアント 192.168.11.1 からの着信を受けられるようにします。
- ④ デジタル接点入力 DI0 が ON になった場合、AS-150/X-II が待機状態から抜けるようにします。
- ⑤ デジタル接点入力 DI1 が ON になった場合、AS-150/X-II が待機状態から抜けるようにします。
- ⑥ 緊急地震速報を受信できるようにします。
- ⑦ 表示装置に対して緊急地震速報を送出した後、10 秒間 RS-232 の 9 ピン出力をマーク状態に保持します。
- ⑧ DI0 が ON になったときに、メールを送るようにします。
- ⑨ メール の 題名 を “subject” とします。
- ⑩ メール の 本文 を “message” とします。
- ⑪ メール の 差出人名 を “from@sample.com” とします。
- ⑫ メール の あて先 を “to@sample.com” とします。
- ⑬ メールサーバーの FQDN 名を “smtp.sample.com” とします。

(3) AS-150/X-II の設定

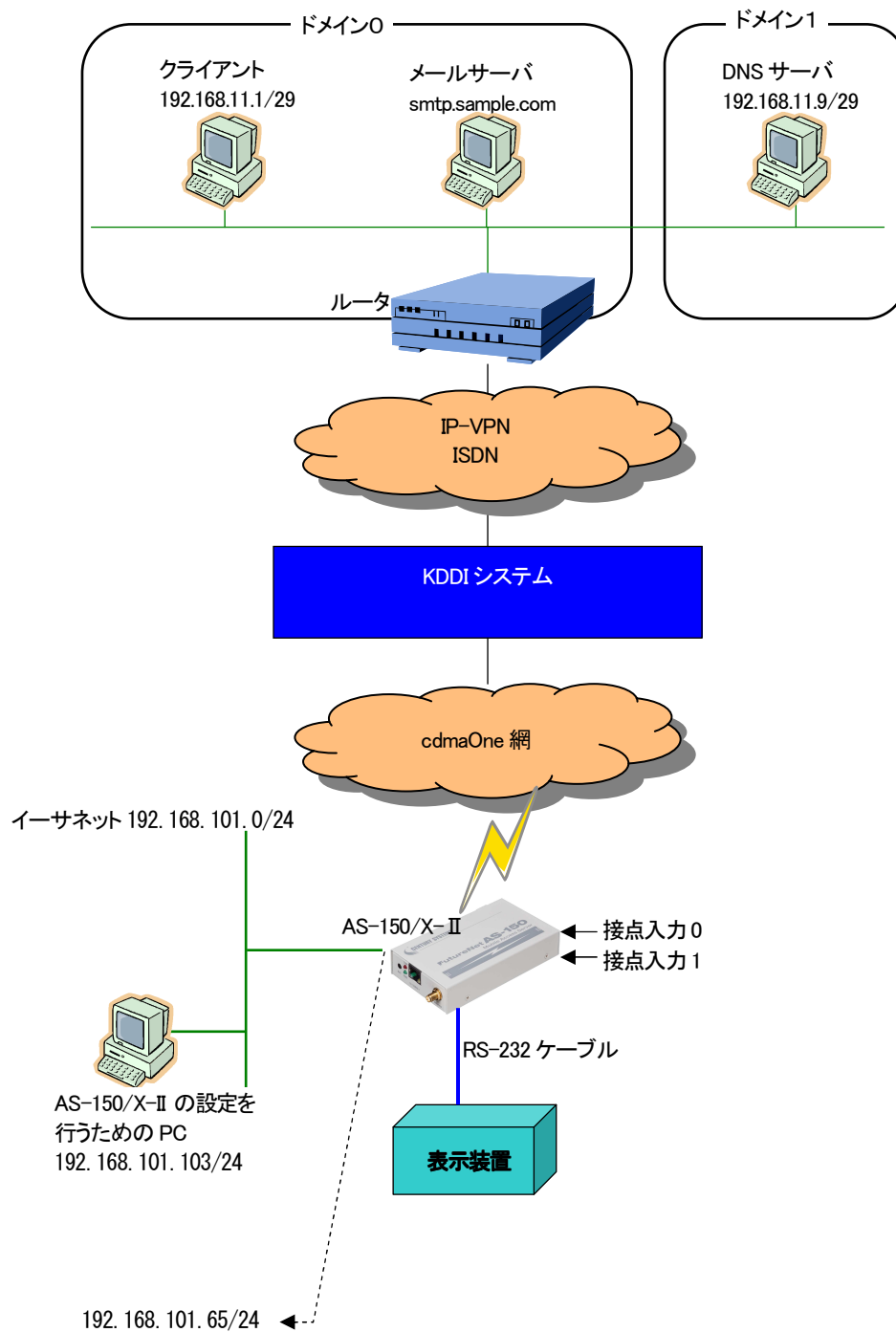
```

main ip 192.168.101.65
main mask 255.255.255.0
main dns 192.168.11.3 ..... ①
rsport 1 scpcport 50000
rsport 1 baudrate 19200 } ..... ②
rsport 1 parity even
domain 0 ドメイン名 ユーザ名 パスワード 192.168.11.0/27 1 ..... ③
di 0 powerontrigger on ..... ④
di 1 powerontrigger on ..... ⑤
eng activate on ..... ⑥
risignalholdtime 10 ..... ⑦
maildi 0 activate on ..... ⑧
maildi 0 subject subject ..... ⑨
maildi 0 message message ..... ⑩
maildi 0 from from@sample.com ..... ⑪
maildi 0 to1 to@sample.com ..... ⑫
mailserver 0 smtpaddress smtp.sample.com ..... ⑬
?

```

■ 複数ドメイン登録の場合

(1) 構成



(2)要件

センターのクライアントは、TCP ポート番号 50000 に対してに接続を行い、表示装置とデータ送受信を行います。アイドルタイム 60 秒で待機状態となります。

- ① DNS サーバーの IP アドレスを、192.168.11.9 に設定します。
- ② RS-232C の通信パラメータおよび RS-232 ポートサーバの設定を行います。
- ③ センターのクライアント 192.168.11.1/29 からの着信を受けられるようにします(ドメイン0)。
- ④ センターの DNS サーバ 192.168.11.9/29 へアクセスできるようにします。(ドメイン 1)
- ⑤ 接点入力 DI0 が ON になった場合、AS-150/X-II が待機状態から抜けるようにします。
- ⑥ 接点入力 DI1 が ON になった場合、AS-150/X-II が待機状態から抜けるようにします。
- ⑦ 緊急地震速報を受信できるようにします。
- ⑧ 表示装置に対して緊急地震速報を送出した後、5 秒間 RS-232 の DTR 信号(もしくは 9 ピン出力)をマーク状態に保持します。
- ⑨ 接点入力 DI0 が ON になったときに、メールを送るようにします。
- ⑩ メールの題名を “subject” とします。
- ⑪ メール本文を “message” とします。
- ⑫ メール差出人名を “from@sample.com” とします。
- ⑬ メール宛先を “to@sample.com” とします。
- ⑭ メールサーバーの FQDN 名を “smtp.sample.com” とします。

(3) AS-150/X-II の設定

```

main ip 192.168.101.65
main mask 255.255.255.0
main dns 192.168.11.9 ..... ①
rsport 1 scpcport 50000
rsport 1 baudrate 19200 } ..... ②
rsport 1 flowctrl none
rsport 1 parity even
domain 0 ドメイン名1 ユーザ名1 パスワード1 192.168.11.0/29 1 ③
domain 1 ドメイン名2 ユーザ名2 パスワード2 192.168.11.8/29 1 ④
di 0 powerontrigger on ..... ⑤
di 1 powerontrigger on ..... ⑥
emg activate on ..... ⑦
risignalholdtime 5 ..... ⑧
maildi 0 activate on ..... ⑨
maildi 0 subject subject ..... ⑩
maildi 0 message message ..... ⑪
maildi 0 from from@sample.com ..... ⑫
maildi 0 to1 to@sample.com ..... ⑬
mailserver 0 smtpaddress smtp.sample.com ..... ⑭
?

```

7.1.5 接続テストの例

通信に必要な設定が行われていれば、本装置の Telnet メニューのコマンドラインから、「connect」及び「disconnect」コマンドにより、ドメイン番号を指定して回線接続／切断を試みることができます。コマンド形式詳細は「6.2.1 制御コマンド」を参照してください。

以下の例では接続に成功した後、「ping」コマンドによりセンターとの接続を確認して、回線を切断しています。

```

Ethernet address 00:80:6d:01:23:45
1) General
2) Service Type: CIPL Access Router
3) Service Settings
4) Status
5) Command Line
6) Exit
Enter number 5 ← コマンドラインモードにはいる
> show config ← 現在の設定内容を表示して確認する
main ip 192.168.254.1
main mask 255.255.255.0
domain 0 1.example test testpass 192.168.11.0/24 1
?
> connect ← ドメイン番号を指定して接続する
Dialing... domain 0 (番号を省略すると0が指定される)
Dialing succeeded
Authentication succeeded
Connection established
> ping 192.168.11.10 ← ping 試験を行う場合
Pinging 192.168.11.10 with 32 bytes of data:
Reply from 192.168.11.10: bytes=32 time=356ms seq=1
Reply from 192.168.11.10: bytes=32 time=332ms seq=2
Reply from 192.168.11.10: bytes=32 time=344ms seq=3
?
> disconnect ← 回線を切断する
> quit ← コマンドラインから抜ける
?

```

万一上記接続テストが成功しない場合は、AS-150/X-II の通信ログをご確認ください。通信ログはコマンドラインから「show log」コマンドで表示できます。表示されるログメッセージとその意味については「5.5 通信履歴のロギング機能」を参照してください。

7.2 AS-150/X-II仕様一覧

LAN側 インタフェース	Fast Ethernet インタフェース	10BASE-T/100BASE-TX x 1 ポート Auto MDI/MDI-X、コネクタ RJ-45 通信速度・全二重/半二重のオートネゴシエーション機能および固定設定機能
WAN側 インタフェース	対応回線	KDDI CDMA 1X 最大通信速度 下り 144kbps/上り 64kbps ※ ベストエフォート
RS-232 インタフェース	通信インタフェース	D-Sub9 ピン x 1ポート 2400bps~460kbps
デジタル接点 インタフェース	入力形式 コネクタ型番	無電圧接点入力(非絶縁) x 2ポート 信号電圧 5~24V、出力電流 1mA S04B-PASK-2(日本圧着端子製造株式会社)
ネットワーク機能	搭載プロトコル	PPP、IPCP、IP、ICMP、TCP、TELNET、DHCP、SYSLOG、ARP、GRE、SNTP、SMTP
	ルーティング	スタティックルート、デフォルトルート
	NAT/NAPT	送信元 NAT 対応
	GRE カプセリング	FutureNet NXR ルータ互換
	DHCP サーバ	最大 128 台
CRG サービス対応	ドメイン登録数	最大 5 個
	発信	宛先 IP アドレスによりドメインを切り替え
	着信	(センター起動) 接続元 IP アドレスによりドメインを切り替え
OTA 機能	OTASP(回線契約)	本体 OTA ボタン/設定画面からの操作
	OTAPA(回線解約)	設定画面からの操作
通信モジュール時刻同期		無線モジュールから時刻情報を取得し、AS-150/X-II の時刻を合わせる
プロトコル変換機能		TCP 透過サーバモード
運用管理	設定手段	telnet 接続によるメニュー形式、及びコマンドラインインタフェース
	ファームウェア更新	専用ソフトウェアからネットワーク経由で可能
	回線維持機能	ping keepalive 機能
	ログ機能	システムログ/通信履歴をメモリに保存、Syslog による送信にも対応
	診断機能	電波強度表示 LED、PPP リンク状態表示 LED、ping による疎通確認、ログ情報表示、ステータス表示
	サーバ機能	SNTP(Simple Network Time Protocol)サーバ、DHCP サーバ、DNS リレー
認定/準拠	電波障害自主規制	VCCI Class A 準拠
サイズ・重量	外観寸法	71mm(W) x 125mm(D) x 25mm(H) ※ 突起物を除く
	重量	本体:約 320g
環境	入力電源電圧	DC5V~24V
	消費電力(最大)	約 3W
	消費電力(待機時)	約 0.24W
	電源コネクタ型番	S2P-VH(日本圧着端子製造株式会社)
	動作環境条件	-20°C~50°C、10%~90%(結露なきこと)
保存温度	-20°C~60°C、10%~90%(結露なきこと)	

FutureNet AS-150/X-II CDMA 1X モバイルアクセスルータ
ユーザーズマニュアル

2012年1月6日 第4版

発行 センチュリー・システムズ株式会社

Copyright(c) Century Systems Co., Ltd. 2011

東京都 武蔵野市 境 1-15-14 栄戸ビル 〒180-0022
Tel. 0422-37-8911 Fax. 0422-55-3373
<http://www.centurysys.co.jp/>